愛媛大学埋蔵文化財調査報告　XII

文京遺跡 Ⅲ

― 文京遺跡13次調査報告 ―

愛媛大学
寄贈
附属図書館

愛媛大学埋蔵文化財調査室

2004

文京遺跡 Ⅲ

― 文京遺跡13次調査報告 ―

愛媛大学埋蔵文化財調査室

２００４

1　13次調査CX～DF-11～15区遺構検出状況（西から）

2　13次調査CX～DE-11～15区完掘状況（西から）

巻頭図版 2

1　13次調査SB-51（南東から）

2　13次調査DB-DC区間の南北土層断面

序　　文

愛媛大学の本部事務局と４つの学部を抱える城北キャンパスには、弥生時代における西日本屈指の大集落である文京遺跡が所在する。愛媛大学では、1987年に愛媛大学埋蔵文化財調査委員会の指導に基づいて埋蔵文化財調査室を設立し、埋蔵文化財の保護に努めている。

城北キャンパスでは、2004（平成16）年までに、28次にわたる全面調査が実施されている。その中で、本書に報告する文京遺跡13次調査は、1995～1996年に実施した愛媛大学地域共同研究センター建設に伴う発掘調査である。調査地点は、旧工学部本館（総合研究棟２）の南西側にあたる。旧工学部本館の建設工事に際しては、大量の弥生土器や石器が出土したことが、故西田栄先生（元教養部教授）によって紹介されている。３・７次調査で出土した大型掘立柱建物の南側にもあたるので、弥生時代の大規模集落を解明する情報が得られることが期待された。

発掘調査では、まさしく弥生時代の11棟の竪穴式住居跡などが発見され、径25～30㎝の立柱痕跡をもつ掘立柱建物を部分的であるが確認できた。これらの遺構に伴う出土品も、弥生土器や石器だけではなく、鉄鏃、イネやムギの炭化種子など、豊富多彩である。また、弥生時代以上に、古墳時代後期の遺構も数多く発見されている。調査当時、文京遺跡では古墳時代の遺構と遺物がまとまって出土したことは初めてで、弥生時代に重なって古墳時代の集落が営まれていたという文京遺跡のもう一つの姿を明らかにできた。とくに、出土した鍛冶関連の遺構・遺物は集落の性格を分析していく貴重な手掛かりとなる。

さて、こうした重要な調査成果があげられたが、その後も連続して実施される校舎建設に対応する発掘調査が優先され、整理作業は寸断され、大きく停滞した。そこで、施設部と協議して短・中期的な整理計画をつくるとともに、整理体制の強化を図り、報告書刊行の準備を進め、今回、正式調査報告書を刊行することができた。しかし、調査の開始から数えて７年の月日がたっている。調査成果の公開が遅れたことは、今後の愛媛大学の解決すべき課題として残されている。

発掘調査から記録・遺物類の整理、そして報告書の刊行にいたるまでには、多くの方々から協力を得た。それらの方々に深く感謝するとともに、本書が多くの人々に利用・活用されることを祈念します。

2004年２月15日

愛媛大学埋蔵文化財調査室
室長　下　條　信　行

例　　言

1．本書は、愛媛大学埋蔵文化財調査室が1995（平成７）年度に実施した愛媛県松山市文京町３番の愛媛大学地域共同研究センター建設工事に伴う文京遺跡13次調査の正式調査報告書である。
2．愛媛大学埋蔵文化財調査室では、これまで文京遺跡８・９・11次調査、同10次調査の発掘報告を刊行している。本書が３冊目の報告書となることから『文京遺跡Ⅲ』とした。また同時に、愛媛大学埋蔵文化財調査報告XIIにあたる。
3．本書で示した方位・標高値は、平面直角座標Ⅳ系にしたがっている。
4．土色と遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1976）に準拠したが、本文中ではマンセル記号は省略した。
5．本書に使用した遺構図は、田崎博之・宮崎直栄・川口雅之・広瀬岳志・高尾浩司が実測図を作成し、三吉秀充・宮崎が浄写を行った。
6．遺物図は、田崎・宮崎・武田尊子が実測図を作成し、田崎・武田が浄写を行った。また、巻末表２～４の遺物観察表は、田崎・宮崎・武田が共同して作成した。
7．本書で使用した遺構・遺物写真は、田崎が撮影した。
8．炭化種子・炭化材・動物遺存体の一部については、㈱古環境研究所に同定・分析を委託し、その報告を体裁をかえて掲載した。
9．本書の執筆は、序説・Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ章は田崎、Ⅲ章は田崎・武田が共同して執筆し、Ⅳ章は㈱古環境研究所による自然遺物の同定と検討の報告である。
10．本書の編集は、埋蔵文化財調査室長下條信行の指導のもとに、田崎が行った。
11．本書に報告した文京遺跡13次調査にかかわる記録類・出土遺物は、愛媛大学埋蔵文化財調査室において保管されている。

目　　次

序　説
1　調査にいたる経緯と調査組織・体制 …… 1
2　整理作業と報告書刊行の経過と体制 …… 3
3　調査・整理の方法と遺物・記録類の保管 …… 5

Ⅰ　遺跡の位置と周辺における既往の調査 …… 6

Ⅱ　調査の概要
1　基本層序 …… 10
2　遺構と遺物 …… 11

Ⅲ　遺構・遺物の調査記録
1　弥生時代の遺構と遺物
（1）弥生時代遺構の分布 …… 13
（2）竪穴式住居 …… 14
SC-4号竪穴式住居　(14)　SC-5号竪穴式住居　(15)　SC-6号竪穴式住居　(15)
SC-7号竪穴式住居　(17)　SC-8号竪穴式住居　(20)　SC-11号竪穴式住居　(25)
SC-27号竪穴式住居　(26)　SC-34号竪穴式住居　(27)　SC-35号竪穴式住居　(30)
SC-38号竪穴式住居　(32)　SC-40号竪穴式住居　(34)
（3）掘立柱建物 …… 34
SB-51号建物　(34)
（4）溝 …… 36
SD-90号溝　(36)　SD-91号溝　(36)　SD-93号溝　(37)
SD-95号溝　(39)　SD-96号溝　(39)　SD-97号溝　(40)
（5）土壙 …… 40
SK-29号土壙　(40)　SK-31号土壙　(42)　SK-39号土壙　(44)
SK-50号土壙　(44)　SK-56号土壙　(44)　SK-75号土壙　(45)
SK-76号土壙　(45)　SK-79号土壙　(46)　SK-80号土壙　(46)
SK-83号土壙　(46)　SK-84号土壙　(46)　SK-85号土壙　(47)
（6）その他の遺構－土器溜り …… 47
SX-48号遺構　(47)　SX-73号遺構　(51)
（7）柱穴・小穴 …… 55
2　古墳時代の遺構と遺物
（1）古墳時代の遺構の分布 …… 61
（2）竪穴式住居 …… 62
SC-10号竪穴式住居　(62)　SC-12号竪穴式住居　(64)　SC-13号竪穴式住居　(65)
SC-14号竪穴式住居　(66)　SC-15号竪穴式住居　(67)　SC-16号竪穴式住居　(68)
SC-17号竪穴式住居　(71)　SC-18号竪穴式住居　(75)　SC-21号竪穴式住居　(76)
SC-22号竪穴式住居　(77)　SC-25号竪穴式住居　(80)　SC-28号竪穴式住居　(86)
SC-30号竪穴式住居　(90)　SC-33号竪穴式住居　(92)　SC-37号竪穴式住居　(96)

（3）掘立柱建物
SB-42号建物 (97) SB-43号建物 (97) SB-44号建物 (100)
SB-45号建物 (102) SB-46号建物 (102) SB-47号建物 (104)
SB-49号建物 (106) SB-52号建物 (106) SB-53号建物 (107)
SB-54号建物 (111) SB-57号建物 (111) SB-58号建物 (112)
SB-62号建物 (112)
（4）杭列（柵？）……113
SA-20号杭列 (113) SA-59号杭列 (114) SA-60号杭列 (115)
（5）溝……115
SD-92号溝 (115) SD-94号溝 (116)
（6）鍛冶炉……116
SF-41号炉 (116)
（7）土壙……118
SK-1号土壙 (118) SK-9号土壙 (118) SK-23号土壙 (120)
SK-24号土壙 (120) SK-26号土壙 (120) SK-32号土壙 (121)
SK-36号土壙 (121) SK-77号土壙 (122) SK-78号土壙 (122)
SK-81号土壙 (122) SK-82号土壙 (123) SK-86号土壙 (123)
SK-87号土壙 (124) SK-88号土壙 (125) SK-89号土壙 (125)
（8）その他の遺構－焼土・炭化物の集積……125
SX-61号遺構 (125) SX-63号遺構 (125) SX-64号遺構 (125)
SX-65号遺構 (125) SX-66号遺構 (126) SX-67号遺構 (126)
SX-68号遺構 (126) SX-69号遺構 (126) SX-70号遺構 (127)
SX-71号遺構 (127) SX-72号遺構 (127) SX-74号遺構 (127)
（9）柱穴・小穴……127
3 古代以降の遺構と遺物
（1）古代以降の遺構の分布……148
（2）溝……148
SD-2号溝 (148) SD-3号溝 (149)
（3）土壙……157
SK-19号土壙 (157)
（4）柱穴・小穴……157
4 Ⅲ層出土の遺物……159

Ⅳ 自然遺物の同定と検討
1 出土種実……168
2 出土樹種……169
3 出土動物遺存体同定……171

Ⅴ 調査のまとめ……173

調査抄録

挿図目次

Fig. 1　遺構の切り取り作業風景 …… 2
Fig. 2　文京遺跡位置図（縮尺1/75,000、枠線内が道後・城北遺跡群、網掛け部分が文京遺跡）… 6
Fig. 3　愛媛大学城北団地と文京遺跡13次調査周辺の調査地点（縮尺1/2,000）…… 7
Fig. 4　文京遺跡13次調査DB-DC区間の南北土層断面図（縮尺1/100・1/50）……10
Fig. 5　文京遺跡13次調査主要遺構配置図（縮尺1/200）……12－13（折り込み）
Fig. 6　文京遺跡13次調査における弥生時代の遺構（縮尺1/500）……13
Fig. 7　SC-４・５遺構実測図（縮尺1/50）……14
Fig. 8　SC-５上部Ⅲ層出土遺物実測図１（縮尺1/3）……15
Fig. 9　SC-５上部Ⅲ層出土遺物実測図２（縮尺2/3）……15
Fig. 10　SC-６遺構実測図（縮尺1/50）……16
Fig. 11　SC-６埋土出土遺物実測図１（縮尺1/3）…16
Fig. 12　SC-６埋土出土遺物実測図２（縮尺1/2）…17
Fig. 13　SC-６上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）……17
Fig. 14　SC-７、SD-91・94、SK-83・84、SP-309、SX-73遺構実測図（縮尺1/50）……18
Fig. 15　SC-７内SP-357出土遺物実測図（縮尺1/2）……19
Fig. 16　SC-７上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）……19
Fig. 17　SC-８遺構実測図（縮尺1/50）……20
Fig. 18　SC-８埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）…22
Fig. 19　SC-８SK-126出土遺物実測図（縮尺1/3/、1/1）……23
Fig. 20　SC-８上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）……23
Fig. 21　SC-８、SK-126出土遺物実測図（１～５・８～10：SC-８埋土、６・７：SK-126埋土、縮尺2/3、1/2、1/4）……24
Fig. 22　SC-10・11、SD-92遺構実測図（縮尺1/50）……25
Fig. 23　SC-11上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）…25
Fig. 24　SC-27遺構実測図（縮尺1/50）……26
Fig. 25　SC-27埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）…27
Fig. 26　SC-34・35、SK-81、SX-64・65遺構実測図（縮尺1/50）……28
Fig. 27　SC-34埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）…29
Fig. 28　SC-34埋土、柱穴SP-343出土遺物実測図（縮尺1/3）……29
Fig. 29　SC-34出土遺物実測図（縮尺2/3）……29
Fig. 30　SC-35埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）…31
Fig. 31　SC-35・38上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）……32
Fig. 32　SC-38遺構実測図（縮尺1/50）……33
Fig. 33　SC-38埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）…33
Fig. 34　SC-40埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）…34
Fig. 35　SB-51遺構実測図（縮尺1/50）……35
Fig. 36　SB-51柱穴SP-395出土遺物実測図（縮尺1/3）……36
Fig. 37　SD-90・93・95・96・97遺構実測図（縮尺1/50）……37
Fig. 38　SD-91・93・96・97出土遺物実測図（縮尺1/3）……38
Fig. 39　SD-91・95・96・97出土遺物実測図（縮尺1/2）……39
Fig. 40　SK-29・31・39・50・56・75・76・79・80遺構実測図（縮尺1/50）……41
Fig. 41　SK-29埋土および上部Ⅲ層出土遺物実測図（埋土：１～４、Ⅲ層部分：５～９、縮尺1/3）……42
Fig. 42　SK-29埋土出土遺物実測図（縮尺2/3）…42
Fig. 43　SK-31出土遺物実測図１（縮尺2/3）……43
Fig. 44　SK-31出土遺物実測図２（縮尺1/2）……43
Fig. 45　SK-39・76・80出土遺物実測図（縮尺1/3）……44
Fig. 46　SK-50南東壁際床面出土遺物実測図（縮尺1/3）……45
Fig. 47　SK-50・80出土遺物実測図（縮尺2/3・1/2）……45
Fig. 48　SX-48遺構実測図（縮尺1/50）……48
Fig. 49　SX-48出土遺物実測図１（縮尺1/3）……49

Fig. 50　SX-48出土遺物実測図２（縮尺1/3）……50
Fig. 51　SX-48・73出土遺物実測図（縮尺2/3・1/2）……50
Fig. 52　SX-73出土遺物実測図１（縮尺1/3）……51
Fig. 53　SX-73出土遺物実測図２（縮尺1/3）……52
Fig. 54　SX-73出土遺物実測図３（縮尺1/3）……53
Fig. 55　SX-73出土遺物実測図４（縮尺1/3）……54
Fig. 56　文京遺跡13次調査における古墳時代の遺構（縮尺1/500）……61
Fig. 57　SC-10出土遺物実測図１（縮尺1/2）……62
Fig. 58　SC-10出土遺物実測図２（縮尺1/3）……63
Fig. 59　SC-12遺構実測図（縮尺1/50）……64
Fig. 60　SC-12埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）…64
Fig. 61　SC-12上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）……64
Fig. 62　SC-13・14遺構実測図（縮尺1/50）……65
Fig. 63　SC-13埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）…65
Fig. 64　SC-14埋土および貼り床部出土遺物実測図（１～８：埋土、9・10：貼り床部、縮尺1/3）……66
Fig. 65　SC-15埋土出土遺物実測図１（縮尺1/3）…67
Fig. 66　SC-15埋土出土遺物実測図２（縮尺2/3）…67
Fig. 67　SC-15上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）……68
Fig. 68　SC-15・16・21、SX-71～73遺構実測図（縮尺1/50）……69
Fig. 69　SC-16埋土出土遺物実測図１（縮尺1/3）…70
Fig. 70　SC-16埋土出土遺物実測図２（縮尺1/2）…70
Fig. 71　SC-16Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）…71
Fig. 72　SC-17・37遺構実測図（縮尺1/50）……72
Fig. 73　SC-17埋土出土遺物実測図１（縮尺1/3）…72
Fig. 74　SC-17埋土出土遺物実測図２（縮尺2/3・1/2・1/4）……73
Fig. 75　SC-17上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）……73
Fig. 76　SC-18遺構実測図（縮尺1/50）……74
Fig. 77　SC-18埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）…75
Fig. 78　SC-18貼り床部出土遺物実測図（縮尺1/3）……75
Fig. 79　SC-21埋土および上部Ⅲ層部分出土遺物実測図（１～３：埋土、４～９：上部Ⅲ層、縮尺1/3）……77
Fig. 80　SC-21埋土出土遺物実測図（縮尺1/2）…77
Fig. 81　SC-22、SK-26遺構実測図（縮尺1/50）…78
Fig. 82　SC-22埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）…79
Fig. 83　SC-22上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）……79
Fig. 84　SC-25、SX-67遺構実測図（縮尺1/50）…81
Fig. 85　SC-25埋土出土遺物実測図１（縮尺1/3）…82
Fig. 86　SC-25埋土出土遺物実測図２（縮尺2/3、1/2）……83
Fig. 87　SC-25内SK-503、SP-251出土遺物実測図（１：SP-251、２：SK-503、縮尺1/3）…83
Fig. 88　SC-25上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）……84
Fig. 89　SC-15・18・25・27・30、SP-444・497出土遺物実測図（縮尺2/3）……85
Fig. 90　SC-28、SX-68・69遺構実測図（縮尺1/50）…87
Fig. 91　SC-28埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）…88
Fig. 92　SC-28柱穴SP-264出土遺物実測図（縮尺1/3）……88
Fig. 93　SC-28埋土、柱穴SP-264出土遺物実測図（縮尺1/2、1/4）……88
Fig. 94　SC-28上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）……89
Fig. 95　SC-30、SX-66遺構実測図（縮尺1/50）…91
Fig. 96　SC-30埋土出土遺物実測図（縮尺1/3、2/3）……91
Fig. 97　SC-30出土遺物実測図（縮尺2/3）……92
Fig. 98　SC-30貼り床部出土遺物実測図（縮尺1/3）……92
Fig. 99　SC-33、SK-32、SX-63遺構実測図（縮尺1/50）……93
Fig. 100　SC-33埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）…93
Fig. 101　SC-33上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）……94
Fig. 102　SC-37埋土および貼り床部出土遺物実測図（１～６：埋土、７～11：貼り床部、縮尺1/3）……95
Fig. 103　SC-37出土遺物実測図（縮尺1/4）……96
Fig. 104　SB-42・43、SK-86、SA-59・60遺構実測図（縮尺1/50）……98
Fig. 105　SB-42・43・44・46・49出土遺物実測図（縮尺1/3）……99
Fig. 106　SB-44・58、SP-419出土遺物実測図（１：SP-419、２：SB-44柱穴SP-458、３：SB-

58柱穴SP-142、縮尺2/3・1/2）……100
Fig. 107 SB-44・45・52遺構実測図（縮尺1/50）…101
Fig. 108 SB-46・47遺構実測図（縮尺1/50）……103
Fig. 109 SB-49、SX-61遺構実測図（縮尺1/50）…105
Fig. 110 SB-53・57・58遺構実測図（縮尺1/50）…108
Fig. 111 SB-53・58・62出土遺物実測図（縮尺1/3）……109
Fig. 112 SB-54・62、SK-89遺構実測図（縮尺1/50）……110
Fig. 113 SA-20遺構実測図（縮尺1/50）……113
Fig. 114 SA-20・59出土遺物実測図（縮尺1/3）…114
Fig. 115 SD-92・94出土遺物実測図（縮尺1/3）…116
Fig. 116 SF-41遺構実測図（縮尺1/50、1/25）…117
Fig. 117 SF-41上部暗褐色砂質シルト砂礫層出土遺物実測図（縮尺1/3）……117
Fig. 118 SK-1・9・23・24・36遺構実測図（縮尺1/25、1/50）……119
Fig. 119 SK-1・9・23・26出土遺物実測図（縮尺1/3）……120
Fig. 120 SK-36出土遺物実測図1（1～7：埋土、8・9：上部Ⅲ層、縮尺1/3）……121
Fig. 121 SK-36出土遺物実測図2（縮尺2/3、1/4）……121
Fig. 122 SK-77・78・82・87・88遺構実測図（縮尺1/50）……123
Fig. 123 SK-81・86・87・88・89出土遺物実測図（縮尺1/3）……124
Fig. 124 SX-65・68・69出土遺物実測図（縮尺1/3）……126
Fig. 125 立柱痕跡・杭痕跡をもつ小穴ほか遺構実測図1（縮尺1/50）……128
Fig. 126 SP-128・141・154・168・184・221・229・231・239・253出土遺物実測図（縮尺1/3）……130
Fig. 127 SP-128・431・519・531・543・579出土遺物実測図（縮尺2/3・1/2）……132
Fig. 128 SP-226・254・255・263・265・271・287・293・297・300・320・323・340・344・346・353・375・377・380・386・389・405・406・409・416・419出土遺物実測図（縮尺1/3）……133
Fig. 129 立柱痕跡・杭痕跡をもつ小穴ほか遺構実測図2（縮尺1/50）……139
Fig. 130 SP-392・486出土遺物実測図（縮尺1/2）…142
Fig. 131 SP-429・443・444・452・457・461・465・469・472・478・486・488・489・500・502・506・510・519・525・528・529・530・541・544・551・553・555・558出土遺物実測図（縮尺1/3）……143
Fig. 132 SP-561・580・582・583・585出土遺物実測図（縮尺1/3）……147
Fig. 133 文京遺跡13次調査における古代以降の遺構（縮尺1/500）……148
Fig. 134 SD-2出土遺物実測図（縮尺1/3）……149
Fig. 135 SD-2・3土層断面図（縮尺1/50）……150
Fig. 136 SD-3出土遺物実測図1（縮尺1/3）……151
Fig. 137 SD-3出土遺物実測図2（縮尺1/3）……152
Fig. 138 SD-3出土遺物実測図3（縮尺1/3）……153
Fig. 139 SD-3出土遺物実測図4（縮尺1/3）……154
Fig. 140 SD-3出土遺物実測図5（縮尺1/2）……154
Fig. 141 SD-3最下部粗砂層出土遺物実測図1（縮尺1/3）……155
Fig. 142 SD-3最下部粗砂層出土遺物実測図2（縮尺1/3）……155
Fig. 143 SD-3最下部粗砂層出土遺物実測図3（縮尺1/3）……156
Fig. 144 SK-19遺構実測図（縮尺1/40）……157
Fig. 145 SK-19出土遺物実測図1（縮尺1/3）……157
Fig. 146 SK-19出土遺物実測図2（縮尺1/4）……157
Fig. 147 13次調査風景（西から）……158
Fig. 148 Ⅲ層出土遺物実測図1（縮尺1/3）……159
Fig. 149 Ⅲ層出土遺物実測図2（縮尺1/3）……160
Fig. 150 Ⅲ層出土遺物実測図3（縮尺1/3）……161
Fig. 151 Ⅲ層出土遺物実測図4（DG-17-6区、縮尺2/3）……162
Fig. 152 Ⅲ層出土遺物実測図5（縮尺2/3）……163
Fig. 153 Ⅲ層出土遺物実測図6（縮尺2/3）……164
Fig. 154 Ⅲ層出土遺物実測図7（縮尺2/3）……165
Fig. 155 Ⅲ層出土遺物実測図8（縮尺1/2）……165
Fig. 156 Ⅲ層出土遺物実測図9（縮尺2/3）……166
Fig. 157 13次調査SB-51周辺の遺構配置図（縮尺1/400）……174
Fig. 158 18次調査B区SB-740遺構実測図（縮尺1/100）……175
Fig. 159 13次調査出土の坏身の分類（縮尺1/3）…176
Fig. 160 13次調査出土遺構の時間的関係と分期 …177

巻頭図版目次

巻頭図版１－１　13次調査CX～DF-11～15区遺構検出状況（西から）
　　２　13次調査CX～DE-11～15区完掘状況（西から）
巻頭図版２－１　13次調査SB-51（南東から）
　　２　13次調査DB-DC区間の南北土層断面

写真図版目次

Pl. 1－1　SC－４～６、SK－９、SD-93完掘状況（東から）
　　2　SC－７、SK-82～84、SD-91完掘状況（東から）
　　3　DF・DG-12～16区完掘状況（北東から）
　　4　SC－８検出状況（南から）
　　5　SC-10検出状況（南から）
Pl. 2－1　SC－８・10・11、SD-92完掘状況（南から）
　　2　SC-8内SK-126完掘状況と土層断面（東から）
Pl. 3－1　SC-10検出状況（西から）
　　2　DB～DD-13～15区完掘状況（北から）
Pl. 4－1　DC・DD-13～15区遺構検出状況（北から）
　　2　DC・DD-13～15区遺構完掘状況（北から）
Pl. 5－1　SC-15・21完掘状況（西から）
　　2　SC-25完掘状況（南から）
Pl. 6－1　SC-16～18・37完掘状況（北から）
　　2　SC-25・27、SA-20完掘状況（北から）
　　3　SC-33、SK-31・32・39・80完掘状況（北から）
Pl. 7－1　SC-28完掘状況（南から）
　　2　SC-30完掘状況（南から）
Pl. 8－1　CX～CZ-12～15区遺構検出状況（北から）
　　2　CX～CZ-12～15区遺構完掘状況（北から）
Pl. 9－1　SK－１検出状況（南から）
　　2　SK－１土層断面（南から）
　　3　SC－５、SK－９完掘状況（東から）
Pl. 10－1　SK-29完掘状況（南から）
　　2　SK-50完掘状況（南西から）
Pl. 11－1　SD－３土層断面（東から）
　　2　SD－９完掘状況（東から）
　　3　SC－８柱穴SP-133土層断面（東から）
　　4　SB-52柱穴SP-151土層断面
　　5　SB-53柱穴SP-124土層断面
　　6　SB-57柱穴SP-116土層断面
Pl. 12－1　SF-41検出状況（北から）
　　2　SF-41（東から）
　　3　SX-48・73出土状況（北東から）
Pl. 13－1　SX-73出土状況１（北東から）
　　2　SX-73出土状況２（東から）
Pl. 14－1　SX-67・70・71・72出土状況（北から）
　　2　SX-66出土状況（南から）
　　3　SX-61土層断面
　　4　SX-67土層断面
　　5　SX-69土層断面
Pl. 15　出土弥生土器１
Pl. 16　出土弥生土器２
Pl. 17　出土弥生土器３
Pl. 18　出土弥生土器４
Pl. 19　出土土師器
Pl. 20　出土土師器・須恵器１
Pl. 21　出土土師器・須恵器２
Pl. 22　出土土師器・白磁・須恵質土器
Pl. 23　出土土製品・石器
Pl. 24　出土石器１
Pl. 25　出土石器２
Pl. 26　出土石器３
Pl. 27　出土石器・石片
Pl. 28－1　出土石片
　　2　出土炭化種実
Pl. 29　出土炭化材１

Pl. 30　出土炭化材 2
Pl. 31　出土動物遺存体 1
Pl. 32　出土動物遺存体 2

表　目　次

Tab. 1　文京遺跡13次調査周辺の既往調査一覧 …8
Tab. 2　文京遺跡13次調査における主要遺構の時代別一覧 ……12－13（折り込み）
Tab. 3　自然遺物同定一覧 ……167
Tab. 4　文京遺跡13次調査出土種実同定結果 ……168
Tab. 5　文京遺跡13次調査出土樹種同定結果 ……170
Tab. 6　文京遺跡13次調査出土動物遺存体同定結果 ……172

巻末表目次

巻末表 1　文京遺跡13次調査出土遺構一覧 ……178
巻末表 2　文京遺跡13次調査出土土器類・陶磁器類観察表 ……192
巻末表 3　文京遺跡13次調査出土土製品・石器・石製品類観察表 ……212
巻末表 4　文京遺跡13次調査出土金属器・鉄滓類観察表 ……214

付　　図

付図 1　文京遺跡13次調査遺構配置図（縮尺1/100）

序　　説

1　調査にいたる経緯と調査組織・体制

（1）調査にいたる経緯

松山市文京町３番、２番３号、および道後樋又10番13号の愛媛大学城北団地に所在する文京遺跡は、昭和22年（1947）頃から弥生土器や石庖丁が採集されてきた。1962（昭和37）年には工学部本館建設工事中に弥生時代の遺物が大量に出土し、愛媛県の代表的な弥生時代遺跡として全国に知られるようになってきた。その本格的な発掘調査は、1975（昭和50）年の文京遺跡１次調査を皮切りに、2003（平成15）年３月まで、建物建設などに伴う28次の全面調査と、数十ヶ所の営繕工事などに伴う小規模調査が実施され、弥生時代の大規模集落遺跡であることが明らかにされてきた。

さて、城北団地では、1994（平成６）年度以降、再開発計画が具体的に進みはじめ、1995（平成７）年度には地域共同研究センター建物の予算が示達された。７月10日付けの愛大地発第21号で、地域共同研究センター長から建物建設に伴う埋蔵文化財調査の実施が正式に依頼され、７月19日に開催された埋蔵文化財調査委員会で発掘調査の実施が了承された。これを受けて、埋蔵文化財調査室は、施設部と協議しながら発掘計画を立案していった。協議の結果、

①建設予定地内に位置する文京遺跡６次調査１トレンチの調査結果から弥生時代～古墳時代の遺跡の存在が予想され、建設予定地全域（調査面積890㎡）の発掘調査を行うこと、

②1994（平成６）年度から実施していた工学部１号館建設Ｉ期工事に伴う12次調査が、春先と梅雨の長雨のため、７月まで調査期間がずれ込むことから、地域共同研究センター建物建設に伴う発掘調査は10月から着手すること、

③今回の調査地点では遺構の密集が予想され、約５ヶ月間の調査期間を確保すること、

④営繕工事などに伴う小規模調査が今回の発掘調査期間中に予想されるが、１日程度で実施できる調査を８～９月に集中させて実施し、数日間の期間が必要な調査は来年度に行うこと、

⑤調査にあたっては、共同溝を拡張する西側道路部分と東側の建物本体部分に分け、工事を急ぐ西側道路部分の調査を先行させること、

⑥調査範囲内に植えられた松の移植は、表土剝ぎと併行して進めること、

を確認し、文京遺跡13次調査として発掘に着手することとした。なお、調査番号は99506、調査略号はBNK-13とした。

（2）発掘調査の体制

文京遺跡13次調査にかかわる1995（平成７）年度の埋蔵文化財調査委員会の体制は以下の通りである。

〈埋蔵文化財調査委員会〉

（委員長）学長　三木吉治

（委員）法文学部長　溝口兢一、法文学部教授　下條信行、教育学部長　向井康雄、教育学部助教授　川岡　勉、理学部長　水野信彦、医学部長　榊　三郎、工学部長　谷垣禎一、農学部長　西頭徳三、教養部長　小西永倫、教養部教授　松原弘宣、事務局長　小原孜郎、庶務部長　武智泰道、経理部長　黄楊川英了、施設部長　渡邊正雄

〈埋蔵文化財調査室〉

発掘調査を実施する埋蔵文化財調査室の体制は、下條信行（法文学部・教授）が調査室長として調査の総括、実際の調査については調査員として田崎博之（教養部・助教授）があたることとした。宮崎直栄（施設部事務補佐員・調査室技術担当）が調査補助にあたり、考古学専攻生の川口雅之（学部２年生、現鹿児島県埋

蔵文化財センター）・広瀬岳志（学部３年生、現宇和島市教育委員会）・高尾浩司（学部４年生、現鳥取県教育委員会）を調査補助員とした。また、専門員として、松原弘宣、川岡勉、村上恭通（法文学部･助教授）の協力を得た。

発掘調査にかかわる事務には、前田廣志（施設部企画課長）・兵頭幸男（施設部企画課企画係長）、梶谷志郎（施設部企画課企画係）・高原美保（施設部事務補佐員・調査室庶務担当）があたった。

（３）発掘調査の経過

発掘調査は1995（平成７）年10月17日に着手した。天候にも恵まれ、それほど支障もなく進めることができたが、調査の後半には、年度内に着工が必要な工事に対処するため、調査を中断して立会調査を実施することとなった。そのため、今次調査は年度内に終了する予定であったが、調査期間を延長せざるをえなかった。調査の経過は、以下の通りである。

10月６日　既設の国土座標基準点が工事範囲内に入るので、調査に先だって座標点の移動を行う。

10月17日　発掘調査に着手。調査事務所に発掘器材を搬入し、西側道路部分から表土剝ぎを開始。

10月24日　調査区割りを設定。

10月28日　西側道路部分の表土剝ぎ作業を終了し、建物本体部分の東側から、松の移植工事を行いながら、表土剝ぎを始める。

11月６日　測量杭打ち。座標系を基準とする５ｍ方眼の調査区割りを設定。

11月７日　松の移植作業を併行して行ったため、時間が思った以上にかかったが、調査区全域の表土剝ぎ作業を終了。

11月９日　西側道路部分北端と建物本体部分東側から、人力で基本層序のⅢ層を掘り下げ精査を開始。

11月14～16日　調査を中断して、樽味団地、北吉井団地、城北団地の立会調査（調査番号：99507～99509）を行う。

11月23～30日　Ⅲ層掘り下げ中には、調査区の各所で、土器溜りや焼土・炭化物の広がりを確認。これらに伴う掘り込みを確認することに努めたが、掘り形などの確認はできない。また、焼土・炭化物に混じって、鉄滓が出土している。焼土・炭化物を採集して水洗選別を行うこととした。

12月８日　建物本体部分でⅢ層の掘り下げが終わり、基本層序のⅣ層上面で遺構検出作業を開始。竪穴式住居跡、溝、土壙、柱穴などが確認され始める。遺構の重複が著しい地点が多く、切り合い関係の確認に手間取る。縮尺1/100の検出遺構の配置図を作成。

12月25日　遺構検出状況の写真撮影。

1996年（平成８）年１月８日　作成した遺構配置図を用いて遺構番号をつけながら、遺構の埋土の特徴を記録し、遺構の精査を始める。

１月24日　西側道路部分で各遺構の写真撮影。

１月25日　竪穴式住居跡などの大型遺構の精査が本格化。古墳時代後期の遺構は切り合いが著しく、時間的関係の確認を繰り返しながら調査を進める。

１月31日　調査を中断して、城北団地埋蔵文化財調査室改修工事に伴う調査（調査番号：99510）を実施。

Fig. 1　遺構の切り取り作業風景

2月13日～20日　調査を中断して、城北団地基幹整備（電線管等）工事に伴う立会調査（調査番号：99511）を実施。

2月25～27日　弥生時代の竪穴式住居跡（SC-8）の炉跡と周辺から、多くの炭化物が散乱した状態で出土している。食物残滓が含まれている可能性が考えられるので、炉跡埋土と周辺の炭化物片を採集し水洗選別することとした。

3月4日　施設部から設計変更が報告された。急遽、調査区の一部を拡張して追加調査を行うことで対応。その拡張部分で、大型の掘立柱建物の一部であるSB-51が出土。

3月11日　調査を中断して、城北団地事務局ガス管改修工事に伴う立会調査（調査番号：99512）を実施。

3月14日　西側道路部分の調査を完了。以後、建物本体部分の発掘作業に集中することとなる。

4月2日　現地説明会を開催。学内外から多くの見学者があった。

4月3日　調査区全体の完掘状況を写真撮影。調査区の拡張部分からSF-41が出土。

4月8日　重機と人力でⅣ層を掘り下げながら、Ⅳ層中の遺構・遺物の有無を確認した。

4月10日　松山市埋蔵文化財センターの協力を得て、SF-41の遺構切り取り作業を行う。

4月12日　すべての作業が終了。発掘器材等を調査室へ搬入して、発掘調査を完了した。

2　整理作業と報告書刊行の経過と体制

（1）整理作業・報告書刊行の経過

発掘調査を終了したが、1996年度以降も大面積の全面調査が引き続き実施され、整理作業は寸断された。そこで、施設部と協議し、以下の年度計画をたて、遺物の整理と報告書刊行に向けての準備を進めることとした。

1996（平成8）年度：出土遺物の洗浄・注記作業、図面・写真整理

1997（平成9）年度：出土遺物の注記・復元作業、採集土壌からの微細遺物の水洗選別作業

2000（平成12）年度：水洗選別された微細遺物（炭化種子・炭化材・石器製作石片・鉄滓）の選別作業

2002（平成14）年度：出土遺物の実測、図面の再検討と図面浄書。

2003（平成15）年度：出土遺物の実測・写真撮影、報告書刊行に向けての図面浄書・原稿執筆・割付・印刷作業

また、2002・2003年度には、調査員とともに遺物整理を行うため技能補佐員を雇用し、2003年度には、水洗選別された炭化種子・炭化材の一部について㈱古環境研究所に委託して同定を行った。

（2）埋蔵文化財調査委員会および発掘調査・整理体制

以上のように、整理作業は長期にわたったが、各年度ごとにおける埋蔵文化財調査委員会、および整理体制は以下の通りである。

〔1996（平成8）年度〕

〈埋蔵文化財調査委員会〉

（委員長）学長　三木吉治

（委員）法文学部長　溝口競一、法文学部教授　下條信行、法文学部教授　松原弘宣、教育学部長　向井康雄、教育学部助教授　川岡　勉、理学部長　小松正幸、医学部長　榊　三郎、工学部長　柿沼忠男、農学部長　西頭徳三、事務局長　飛彈昌人、庶務部長　武智泰道、経理部長　深谷英夫、施設部長　塚原克己

〈埋蔵文化財調査室〉

整理作業にあたっては、調査室長の下條信行が統括し、調査員の田崎博之（法文学部・助教授）・吉田　広（講師）・三吉秀充（助手）の中で、田崎が宮崎直栄（施設部事務補佐員・調査室技術担当）とともに整理を担当した。整理にかかわる事務には、中岡一男（施設部企画課長）・兵頭幸男（施設部企画課企画係長）、城戸芳夫（施設部企画課企画係）・橋本麻紀（施設部

事務補佐員・調査室庶務担当）があたった。また、専門員として、松原弘宣、川岡勉、村上恭通（法文学部・助教授）から協力を得た。

〔1997（平成９）年度〕

〈埋蔵文化財調査委員会〉

（委員長）学長　鮎川恭三

（委員）法文学部長 小松光三、法文学部教授　下條信行、法文学部教授　松原弘宣、教育学部長　向井康雄、教育学部助教授　川岡　勉、理学部長　小松正幸、医学部長　植田規史、工学部長　柿沼忠男、農学部長　西頭徳三、事務局長　飛彈昌人、庶務部長　山田久仁夫、経理部長　深谷英夫、施設部長　塚原克己

〈埋蔵文化財調査室〉

調査室長の下條信行が統括し、昨年度に引き続き、田崎博之（法文学部･助教授）が宮崎直栄（施設部事務補佐員・調査室技術担当）とともに整理を担当した。また、専門員として、松原弘宣、川岡勉、村上恭通（法文学部･助教授）の協力を得た。整理にかかわる事務には、中岡一男（施設部企画課長）、田中　繁（施設部企画課企画係長）、城戸芳夫（施設部企画課企画係）、橋本麻紀（施設部事務補佐員・調査室庶務担当）が、これにあたった。

〔2000（平成12）年度〕

〈埋蔵文化財調査委員会〉

（委員長）副学長　小松正幸

（委員）法文学部長　藤川研策、法文学部教授　下條信行、法文学部教授　松原弘宣、教育学部長　金藤泰伸、教育学部教授　川岡　勉、理学部長　真鍋　敬、医学部長　前田信治、工学部長　清水　顯、農学部長　白石雅也、事務局長　久保庭伊佐男、庶務部長　久保芳廣、経理部長　野添文男、施設部長　土居昌弘

〈埋蔵文化財調査室〉

調査室長の下條信行が統括し、調査員の田崎博之（法文学部･助教授）が宮崎直栄（施設部事務補佐員・調査室技術担当）とともに整理を担当した。また、専門員として、松原弘宣、川岡勉、村上恭通（法文学部･助教授）の協力を得た。整理にかかわる事務には、大谷　治（施設部企画課長）、氏原　修（施設部企画課企画係長）、沖野錬太郎（施設部企画課企画係）、鈴木優子（施設部事務補佐員・調査室庶務担当）があたった。

〔2002（平成14）年度〕

〈埋蔵文化財調査委員会〉

（委員長）副学長　小松正幸

（委員）法文学部長　藤川研策、法文学部教授　下條信行、法文学部教授　松原弘宣、教育学部長　金藤泰伸、教育学部教授　川岡　勉、理学部長　真鍋　敬、医学部長　小西正光、工学部長　清水　顯、農学部長　白石雅也、事務局長　塩谷幾雄、庶務部長　大和田和平、経理部長　高橋伸一、施設部長　土居昌弘

〈埋蔵文化財調査室〉

調査室長の下條信行が統括し、田崎博之（法文学部･教授）が、宮崎直栄（施設部教務補佐員）、武田尊子（施設部技術補佐員）とともに整理を担当した。また、専門員として、松原弘宣、川岡勉、村上恭通（法文学部･助教授）の協力を得た。整理にかかわる事務には、秦　稔（施設部企画課長）、氏原　修（施設部企画課企画係長）、横本順子（施設部事務補佐員・調査室庶務担当）があたった。

〔2003（平成15）年度〕

〈埋蔵文化財調査委員会〉

（委員長）副学長　小林展章

（委員）法文学部長　今泉元司、法文学部教授　下條信行、法文学部教授　松原弘宣、教育学部長　金藤泰伸、教育学部教授　川岡　勉、理学部長　柳澤康信、医学部長　小西正光、工学部長　鈴木幸一、農学部長　白石雅也、事務局長　田村幸男、庶務部長　大和田和平、経理部長　白石薫二、施設部長　土居昌弘

〈埋蔵文化財調査室〉

調査室長の下條信行が統括し、調査員の吉田　広（助教授）・三吉秀充（助手）の協力を得ながら、田崎博之（法文学部･教授）が、宮崎直栄（施設部教務補佐員）、武田尊子（施設部技術補佐員）とともに整理を担当した。また、専門員として、松原弘宣、川岡勉、村上恭通（法文学部･助教授）の協力を得た。整理にかかわる事務には、堤　達行（施設部企画課長）、冨岡文夫（施設部企画課企画係長）、横本順子（施設部事務補佐員・調査室庶務担当）があたった。

3　調査・整理の方法と遺物・記録類の保管

（1）調査区割の設定と呼称

今回の文京遺跡13次調査では、城北団地内に設置されている平面直角座標Ⅳ系基準点から、座標点を移動し、X=93950、Y=－67175を基点として座標系に沿った5m方眼の調査区割を設定した。ところが、1997年以降、城北団地内での調査が増加し、調査ごとに区割りを設定すると混乱が生じかねない状況となってきた。そこで、1998（平成10）年に、X=93900、Y=－66800を基点として、城北団地全域をカバーする調査区割りとして、東から西へ向かって5mおきにAA・AB・AC・AD……BA・BB・BC・BD……EM・EN・EO・EP、南から北へ向かって5mおきに1・2・3……118・119・120とした5m方眼の調査区割りを設定し直した。本書で報告する13次調査も、この新たな調査区割りに読み替えている。さらに、必要に応じて、5m方眼を、南東隅から西に1～5、その北側列を6～10と、北西隅の25区画にいたる1m方眼に細分している。この1m方眼を示す場合は、「DC-15-14区」などと呼称する（Fig.5）。

（2）遺構・遺物の登録番号と種別の表示

今次調査で出土した遺構の中で、竪穴式住居跡・掘立柱建物・溝・土壙などの大型遺構には1～99、柱穴・杭穴・小穴には101～611の通番の遺構番号を付した。ただし、126・262・503号遺構は土壙であり、60基の欠番を含む。この場合、竪穴式住居跡や掘立柱建物は複数の土壙や柱穴から構成される。これらにも個々に遺構番号を与えているため、竪穴式住居跡や掘立柱建物は複数の番号をもつ遺構から構成される。

遺構番号に加えて、SA：柵列、SB：掘立柱建物、SC：竪穴式住居跡、SD：溝、SF：鍛冶炉、SK：土壙、SP：柱穴・杭穴・小穴、SX：その他の遺構の遺構種別を示す略号を遺構番号に冠している。

出土した遺物には、R-1～4255の通しの遺物登録番号を与え、同じ登録番号をもつ複数の遺物で実測および写真撮影した遺物には、新たにR-5001～6417の遺物登録番号を付与した。遺物には、遺構、出土区・層位と遺物登録番号を注記し、遺物台帳を作成した。本書に掲載した遺物は、巻末にまとめた遺物観察表に遺物登録番号・コンテナ番号の項を設けて表記し、報告書から遺物の検索ができるようにしている。

（3）調査記録類・遺物の整理と保管

発掘調査時の記録類には、遺構・土層の観察所見記録・実測図・写真がある。遺構の観察所見記録は、埋土の土質・色調やメモ類で、遺構台帳を作成し、個々の観察記録とした。調査区内のすべての遺構の全体図と、調査区壁の土層断面図を20分の1の縮尺で作成し、主要な遺構については20分の1、または10分の1の縮尺で個別図を作成した。これらの実測図には、0001からの4桁の通し登録番号を付し、遺構実測図台帳に順次記録して整理・保管している。

遺物実測図には、001からの3桁の登録番号を与えて、順次、遺物台帳に記録した。また、遺物を収納したコンテナ箱には、001からの3桁の登録番号を付して、遺物台帳に記入している。

調査および整理の際には、35㎜モノクロ・カラースライド、6×7モノクロ・カラースライドによる写真を撮影した。写真類は、カットごとに検索用のカードを作成し、写真登録番号を付して、台帳に記録している。各フィルムは、35㎜モノクロに3桁＋2桁（001-01～）、35㎜カラースライドには3桁（001～）、6×7モノクロ・カラースライドには4桁（0001～）の通しの登録番号を付し、検索用カードと写真台帳に併記している。

Ⅰ　遺跡の位置と周辺における既往の調査

瀬戸内でも有数の広さをもつ松山（道後）平野では、数多くの遺跡が知られている。その中で、弥生時代の遺跡は、丘陵の裾や微高地ごとに遺跡群を形成している。松山平野の中では10ヶ所ほどの遺跡群を見出せる。そうした遺跡群の一つが、道後温泉周辺から松山城のある勝山と御幸寺山に挟まれた東西２km、南北１kmほどにひろがる道後城北遺跡群であり、遺跡群中央に位置するのが文京遺跡である（Fig.２）。

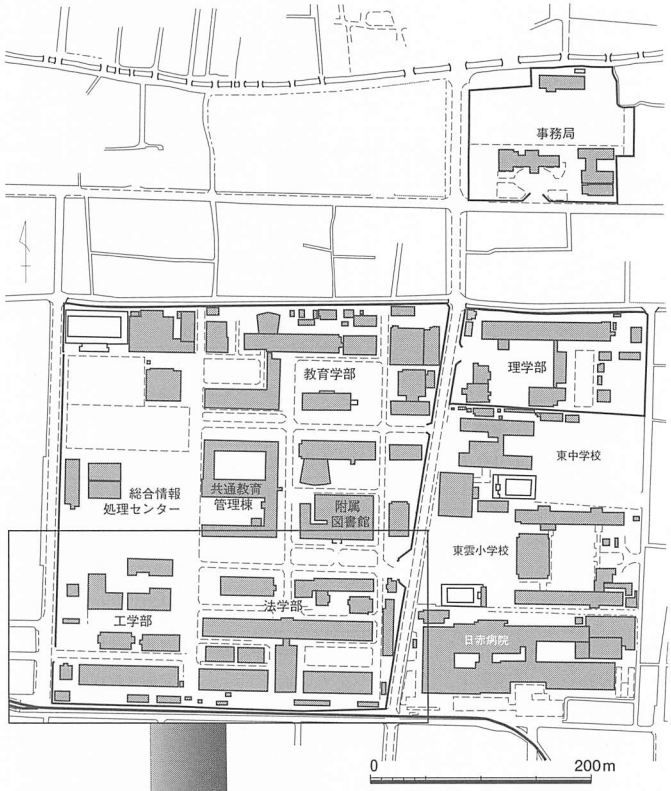
さて、道後城北遺跡群は、東北から流れる石手川が造る扇状地上に展開している。現在は、東から西へ向かって緩やかに低くなり、あまり凹凸のない地形となっている。しかし、各所で行われている発掘調査成果によって、浅い谷状の低地が東西に網目状にのび、その間に微高地が散在する旧地形が復元されている。遺跡は旧地形の微高地を中心として営まれている。文京遺跡では、微高地上で弥生時代前期と中期後葉～後期の竪穴式住居跡・掘立柱建物・土壙・方形周溝遺構・溝、古墳時代前期の竪穴式住居跡・土壙、古墳時代後期の竪穴式住居跡・掘立柱建物・土壙・溝・鍛冶遺構などが発見され、浅い谷状の低地では古代後半期～中世の水田跡・溝・貯水遺構が出土している。さらに、弥生時代以降の遺構が掘り込まれる黄褐色シルト層（後述する基本層序Ⅳ層）の中には、縄文時代前期の遺物溜りや後期の野外炉などが包含される。このように、文京遺跡は縄文時代～中世の複合遺跡である。以下に、城北団地南半の13次調査地点周辺で実施された

Fig. 2　文京遺跡位置図（縮尺１/75,000、枠線内が道後・城北遺跡群、網掛け部分が文京遺跡）

既往の発掘調査成果をまとめているので参照されたい（Fig. 3 ・Tab. 1 ）。

さて、文京遺跡では、これまでの調査で、弥生時代中期後葉～後期に竪穴式住居跡だけでも200棟前後が発見され、東西300m前後、南北200mほどの集落域をもつ大規模集落が営まれていることが明らかにされている。今回の発掘調査地点は、城北団地でも南半部に位置する。浅い谷状の低地に囲まれた微高地の中でも比較的高い場所にあたり、北側の旧工学部本館では1962（昭和37）年の建設工事中に弥生時代の遺物が大量に出土したことが知られている。さらに、北側の法文学部本館建設に伴う３・７次調査地点では弥生時代中期後葉～後期初頭の大型掘立柱建物群が発見されている。西側の工学部３号館建設に伴う２次調査でも、同時期の竪穴式住居跡が出土している。また、南側の工学部機械実習工場を挟んだ５次調査地点でも、弥生時代中期後葉の遺構が発見されている。このように、今回の調査地点は弥生時代の大規模集落の一角にあたり、調査着手以前から弥生時代の遺構が分布する可能性が高いことが考えられた。

加えて、北東側の12・14・16次調査区では、古墳時代後期の竪穴式住居跡群が営まれている。５次調査地点でも古墳時代後期の掘立柱建物が発見されていることから、13次調査地点には当該期の集落も展開している可能性も考えられた。



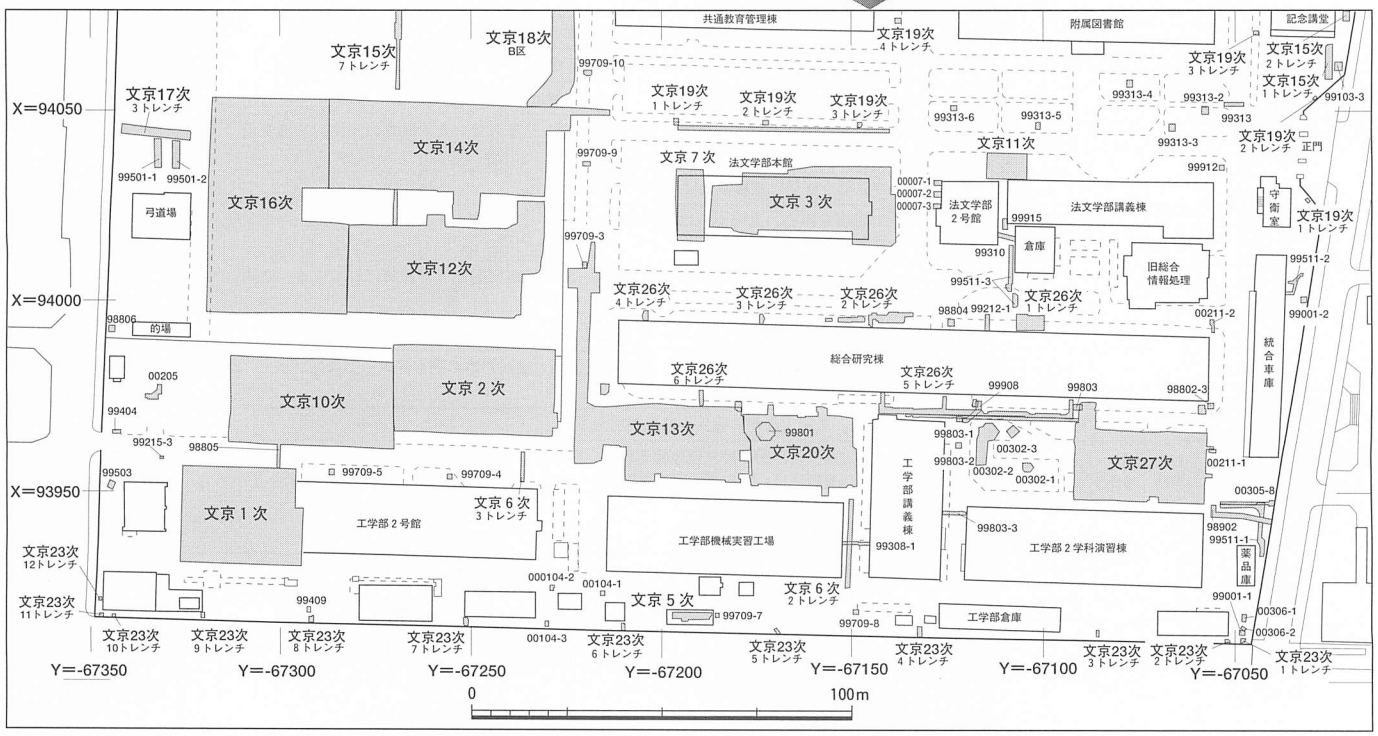


Fig. 3　愛媛大学城北団地と文京遺跡13次調査周辺の調査地点（縮尺１/2,000）

Tab. 1　文京遺跡13次調査周辺の既往調査一覧

調査番号	調査次数	調査種別	面積(㎡)	調査概要		文献
97501	1次	本格	750	弥生中期後葉～後期初頭の竪穴式住居跡4、土壙などが出土。		松山市報11
98001	2次	本格	600	弥生中期後葉～後期初頭の竪穴式住居跡9、掘立柱建物5、土壙5、円形周溝遺構1、土器溜り1が出土。		松山市報28
98101	3次	本格	800	弥生中期後葉～後期初頭の竪穴式住居跡7、方形周溝遺構1、土壙8が出土。		松山市報28
98401	5次	本格	18	弥生中期後葉～後期初頭の土壙？1、古墳後期の掘立柱建物1が出土。		松山市報28
98601	6次	本格	99			未報告
98602	7次	本格	142	弥生中期後葉～後期初頭の大型掘立柱建物などが出土。		未報告
98801	10次	本格	1075	弥生中期後葉～後期前半の竪穴式住居跡4、掘立柱建物2、溝10、円形周溝遺構1、土壙6、土器溜まり12。土器溜まりから中国鏡片・板状鉄器・鉄鏃・ガラス滓が出土。		調査室報告Ⅲ
98802		事前	5	1トレンチ	建物余掘りの攪乱部分。	調査室報告Ⅴ
				2トレンチ	建物余掘りの攪乱部分。	
				3トレンチ	Ⅲ層を確認。	
				4トレンチ	Ⅲ層を確認。	
				5トレンチ	建物余掘り部分。	
98803		事前	2	1トレンチ	地表下40cmでⅢ層を確認。	調査室報告Ⅴ
				2トレンチ	地表下40cmでⅢ層を確認。	
98804		事前	1	攪乱を受けていた。		調査室報告Ⅴ
98805		立会	6	北端部で小穴3基を確認。中央部以南は攪乱部分。		調査室報告Ⅴ
98806		立会	3.4	地表下70cmでⅢ層を確認。Ⅲ層を掘り下げたが、遺物は出土していない。		調査室報告Ⅴ
98901	11次	本格	85	Ⅲ層上面で古墳～中世の溝2が出土。Ⅲ層中位～Ⅳ層上面で弥生中期後葉～後期初頭の溝1・土壙2・小穴を検出、分銅形土製品・板状鉄斧が出土。Ⅳ層中位で縄文後期の野外炉3が検出され、縄文土器・石Ⅲ・磨石が出土。		調査室報告Ⅱ
98902		立会	2	1トレンチ	地表下54cmの表土直下でⅣ層があらわれる。	調査室報告Ⅴ
				2トレンチ	地表下40cmで、Ⅲ層があらわれる。Ⅲ層の厚さは10cmで、出土遺物なし。	
99001		事前	3	1トレンチ	地表下50cmで、Ⅲ層上位面を確認。	調査室報告Ⅴ
				2トレンチ	地表下38cmで、Ⅲ層上位面を確認。	
				3トレンチ	地表下50cmで、Ⅲ層上位面を確認。	
99212		立会	12	1トレンチ	地表下60cmでⅢ層を確認。Ⅳ層上面で円形の竪穴式住居跡の一部が出土。	調査室報告Ⅴ
99215		立会	2	1トレンチ	地表下50cmで、Ⅲ層上位面を確認。	調査室報告Ⅴ
				2トレンチ	地表下65cmで、Ⅲ層上位面を確認。	
99308		立会	8	1トレンチ	地表下70cmまで攪乱部分。	調査室報告Ⅴ
				2トレンチ	地表下32cmでⅢ層があらわれる。Ⅲ層は厚さ15cm、出土遺物なし。	
99310		事前	4	地表下62cmでⅢ層があらわれる。Ⅲ層の厚さは12cm前後、Ⅳ層上面で弥生？の遺構を確認。遺物は出土していない。		調査室報告Ⅴ
99313		事前	15	1トレンチ	地表下68cmでⅢ層があらわれる。Ⅲ層は厚さ25cm、遺物は出土していない。	調査室報告Ⅴ
				2トレンチ	地表下88cmでⅢ層があらわれる。Ⅲ層中位から溝が掘り込まれていた。時期は不明。Ⅴ層上面で落ち込みを確認。	
				3トレンチ	地表下70cmでⅢ層を確認。Ⅲ層からは土器細片が数点出土。	
				4トレンチ	地表下92cmでⅢ層を確認。Ⅲ層からは遺物は出土していない。表土下120～210cmにはⅣ層が堆積。Ⅳ層中位から縄文後晩期の土器片が出土。	
				5トレンチ	地表下95cmでⅢ層があらわれる。Ⅲ層の厚さは20～30cm。南に向かって次第に厚くなる。遺物は出土していない。Ⅲ層以下にはⅣ層が堆積。	
				6トレンチ	地表下70cmで、厚さ10cmほどのⅢ層を確認。攪乱部分から縄文土器の破片が出土。	
99404		立会	1	地表下54cmで、厚さ20cmのⅢ層を確認。Ⅲ層中からは、弥生中期後葉～後期初頭の甕や分銅形土製品が出土。遺構の埋土である可能性あり。		調査室報告Ⅴ
99409		立会	1	地表下115cmでⅢ層上面を確認。Ⅲ層上面から弥生土器片が出土。		調査室報告Ⅴ
99410	12次	本格	1183	弥生中期後葉～後期中頃の竪穴式住居跡30、掘立柱建物5以上、貯蔵穴14、溝1、土壙60以上、古墳後期の溝1が出土。弥生中期後葉～後期中頃の遺物には、石庖丁・扁平片刃石斧・打製石鏃・土製紡錘車・大量の炭化米などがある。古墳後期の溝からは馬の歯顎が出土。		調査室報告Ⅴ
99501		立会	2	2トレンチ	地表下60cmで、Ⅲ層上位面を確認。Ⅲ層からは遺物は出土していない。	調査室報告Ⅶ
99503		立会	3	地表下85cmで、厚さ13cmのⅢ層を確認。さらに、地表下100cmでⅣ層があらわれる。		調査室報告Ⅶ
99506	13次	本格	890	本書報告。		調査室報告Ⅻ
99511		事前	34	1トレンチ	トレンチ北半部では、地表下20cmで、Ⅳ層上面があらわれ、中世～近世の溝1、土壙2が出土。南半部では、地表下25～30cmで、Ⅲ層があらわれた。Ⅲ層は南に向かって次第に厚くなり南端で60cmを超える。弥生中期後葉の高坏や脚台付き鉢が出土。	調査室報告Ⅶ
				2トレンチ	地表下65cmで、自然流路の堆積物と考えられる灰色砂礫層があらわれる。	
				3トレンチ	地表下60cmで、厚さ23cmのⅢ層を確認。	

調査番号	調査次数	調査種別	面積（㎡）	調査概要		文献
99601	14次	本格	1349	弥生中期後葉～後期中頃の竪穴式住居跡46・掘立柱建物・溝・土壙が出土。石庖丁・石斧・打製石鏃・土製紡錘車・分銅形土製品が出土。また、古墳後期の竪穴式住居跡68が出土。		調査室報告Ⅶ
99701	16次	本格	1384	A区	弥生中期後葉～後期中頃の竪穴式住居跡36・溝15・土壙84、古墳後期の竪穴式住居跡２・土壙１・溝３、弥生もしくは古墳後期の掘立柱建物４、古墳後期～中世の柵列１が出土。弥生の遺物には滑石製指輪・南九州系土器がある。	調査室報告Ⅷ
99702	16次	本格	627	B区	弥生中期後葉～後期中頃と古墳後期の竪穴式住居跡35以上、掘立柱建物２以上、土壙18、溝３が出土。	調査室報告Ⅷ
99709		立会	12.2	１トレンチ	地表下130cmまで攪乱を受けている。	調査室報告Ⅷ
				２トレンチ	地表下130cmまで攪乱を受けている。	
				３トレンチ	地表下110cmで、厚さ25cmのⅢ層部分を部分的に確認。	
				４トレンチ	地表下130cmで、Ⅲ層部分を確認。Ⅳ層上面で竪穴式住居跡が部分的に出土。	
				５トレンチ	地表下130cmまで攪乱を受けている。	
				６トレンチ	地表下130cmまで攪乱を受けている。	
				７トレンチ	地表下100cmで、Ⅲ層があらわれ、古墳後期の２基の竪穴式住居跡の重複を確認。	
				８トレンチ	地表下45cmで、Ⅲ層があらわれ、弥生後期終末の土壙ほかを確認。	
99715	17次	確認	154	３トレンチ	弥生中期後葉～後期の遺物を含む自然流路と、竪穴式住居跡６や土壙などを平面検出。	調査室報告Ⅷ
99801		立会	1	１トレンチ	地表下120cmで、Ⅲ層上面を確認。	調査室報告Ⅷ
				２トレンチ	地表下75cmまでⅡ層がつづく。	
99802	18次	本格	1192	B区	弥生中期後葉～後期中頃の竪穴式住居跡９、掘立柱建物１、溝７、土壙16などが出土。	調査室報告Ⅷ
99803		立会	1	建物余掘りの攪乱部分。		調査室報告Ⅷ
99901	19次	本格	31	１トレンチ	地表下70cmで、厚さ17cmのⅢ層を確認。遺物は出土していない。	調査室報告Ⅹ
				２トレンチ	地表下45cmで、自然流路を確認。	
99907		立会	20	地表下110cmで、厚さ10cm前後のⅢ層を確認。遺物は出土していない。		調査室報告Ⅹ
99908		立会	8.4	地表下40～50cmでⅢ層を確認。Ⅲ層は10～15cmの厚さを測る。Ⅳ層上面で竪穴式住居跡１、土壙２、小穴などを平面検出。		調査室報告Ⅹ
99910	20次	本格	588	弥生中期後葉～後期中頃の竪穴式住居跡１、古墳後期の竪穴式住居跡５、中世の溝群が出土。		調査室報告Ⅹ
99912		立会	0.5	地表下62cmで厚さ23cmのⅢ層を確認。Ⅲ層からは遺物は出土していない。		調査室報告Ⅹ
99915		立会	1	建物余掘りの攪乱部分。		調査室報告Ⅹ
00007		立会	5	建物余掘りの攪乱部分。		調査室報告Ⅹ
00103	23次	本格	17.3	１トレンチ	地表下70cmで、厚さ20cmのⅢ層を確認。Ⅲ層から弥生土器片が出土。	調査室報告Ⅺ
				２トレンチ	地表下70cmで、厚さ60cmのⅢ層を確認。Ⅲ層から弥生土器片が出土。	
				３トレンチ	地表下22cmで、自然流路上面を確認。	
				４トレンチ	地表下62cmで、土壙を確認。	
				５トレンチ	地表下100cmで、厚さ６cmのⅢ層を確認。Ⅲ層下面で小穴が出土。	
				６トレンチ	地表下95～100cmで、古墳後期の土壙を確認。	
				７トレンチ	地表下75～80cmでⅢ層があらわれる。Ⅲ層上面で溝を確認。中位からも弥生と古墳の小穴が掘り込まれている。	
				８トレンチ	地表下100～105cmで、自然流路を確認。	
				９トレンチ	地表下82cmでⅢ層を確認。Ⅲ層下面で弥生中期後葉の土器溜りや柱穴を確認。	
				10トレンチ	地表下65cmで、厚さ22cmのⅢ層を確認。Ⅲ層から遺物は出土していない。	
				11トレンチ	地表下70cmで、厚さ20cmのⅢ層を確認。Ⅲ層下部で小穴が出土。	
				12トレンチ	地表下95cmまで攪乱がつづく。	
00104		立会	1	１トレンチ	地表下65cmまで攪乱がつづく。	調査室報告Ⅺ
				２トレンチ	地表下60cmで、厚さ15cmのⅢ層を確認。	
				３トレンチ	地表下65cmまでⅡ層がつづく。	
00204	26次	本格	144.7	Ⅰ区	弥生中期後葉～後期初頭の竪穴式住居跡１、土壙４などが出土。分銅形土製品が出土。	調査室報告Ⅺ
				Ⅱ区	弥生中期後葉～後期の竪穴式住居跡１、土壙３などが出土。線刻絵画土器が出土。	
				Ⅲ区	弥生中期後葉～後期の土壙１などが出土。	
				Ⅳ区	地表下105cmで、Ⅲ層があらわれる。Ⅲ層からは遺物は出土していない。	
				Ⅴ区	弥生中期後葉～後期の竪穴式住居跡１、土壙７などが出土。	
				Ⅵ区	弥生中期後葉～後期もしくは古墳後期の土壙１などが出土。	
00205		立会	3	地表下105cmで、Ⅲ層上面を確認。		調査室報告Ⅺ
00211		立会	1.9	１トレンチ	地表下130cmまで攪乱がつづく。	調査室報告Ⅺ
				２トレンチ	地表下70cmまで攪乱がつづく。	
00301	27次	本格	703	弥生中期後葉～後期中頃の竪穴式住居跡７・溝１・土壙など、中世の溝３が出土。弥生の遺物には分銅形土製品がある。		現地説明会資料

Ⅱ　調査の概要

文京遺跡13次調査の調査地点の所在地、調査面積、調査期間、整理期間ほかは、以下の通りである。

調査地点　松山市文京町３番
愛媛大学地域共同研究センター建設予定地

調査期間　1995年10月17日～1996年４月12日
調査面積　890m²
調査番号　99506
調査略号　BNK-13
整理期間　1996・1997・2000・2002・2003年度

1　基本層序

現在、文京遺跡が所在する城北団地では、既往の調査成果から遺跡全体にわたる基本層序を上位からⅠ～Ⅴ層として区分している。個々の調査地点ごとには、基本層序を構成する土層群の細かな特徴や構成をそれぞれ記録している。

13次調査地区の基本層序は以下の通りである（Fig. 4、巻頭図版２－２）。

Ⅰ層：表土層にあたる瓦礫を含む造成土部分。

Ⅱ層：団地造成以前の灰色系の近世～近代の水田の耕作土層と床土層部分に分層できる。９～11次調査で報告されている赤褐色土層は、Ⅱ層の床土部分にあたる。

Ⅲ層：弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を包含する黒色～黒褐色系の土層である。中世の遺構は、確実にⅢ層を切り込むが、弥生時代～古墳時代の遺構は、Ⅲ層中位から以下でしか掘り込みラインを追うことができない。また、13次調査地点では、上部に砂礫が混じる地点が多い。

Ⅳ層：黄褐色系のシルトおよび砂質シルト層で、下部には礫が混じる。文京遺跡11・21・22次調査で、縄文時代前期～後期中頃の遺構と遺物を包含していることが明らかにされている。13次調査地点DB-DC区間の南北土層では、

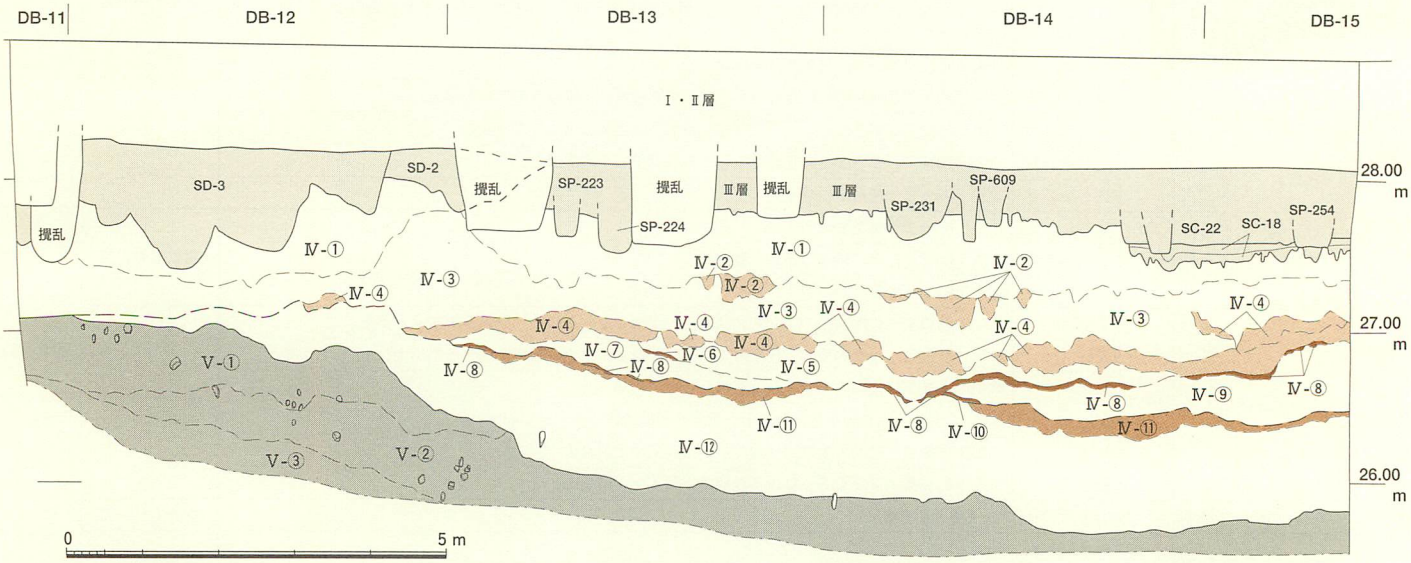


Fig. 4　文京遺跡13次調査DB-DC区間の南北土層断面図（縮尺１/100・１/50）

Ⅳ層は①～⑫層に細分される一方で、Ⅳ-①・②層、Ⅳ-③～⑩層、Ⅳ-⑪・⑫層に大別できる。Ⅳ-③～⑩層は、細砂・小礫混じりの黄褐色砂質土層と、オリーブ灰色やにぶい黄褐色の細砂のレンズ状ブロックの互層堆積である。

Ⅳ-①層：黄褐色シルトで、上部を中心として生物擾乱が多く見られ、Ⅲ層との層界は漸移的である。

Ⅳ-②層：Ⅳ-①・③層に挟まれたオリーブ灰色細砂層で、部分的に黄褐色砂質シルトが混じる。

Ⅳ-③層：黄褐色砂質土。下部には砂礫が混じる。

Ⅳ-④層：Ⅳ-③層内と下面にみられるオリーブ灰色細砂のレンズ状ブロック。部分的に黄褐色砂質シルトが混じる。

Ⅳ-⑤層：細砂・小礫混じりの黄褐色砂質土。Ⅳ-③層に類似。

Ⅳ-⑥層：Ⅳ-⑤・⑦層に挟まれた灰色みをおびたにぶい黄褐色微細砂層の薄いレンズ状ブロック。

Ⅳ-⑦層：細砂・小礫混じりの黄褐色砂質土。Ⅳ-⑤層と類似するが、細砂が目立つ。

Ⅳ-⑧層：灰色みをおびたにぶい黄褐色微細砂層。

Ⅳ-⑨層：細砂・小礫混じりの黄褐色砂質土。Ⅳ-⑤層と類似するが、細砂が目立ち、灰色みをおびた土色である。

Ⅳ-⑩層：灰色みをおびたにぶい黄褐色微細砂層。

Ⅳ-⑪層：にぶい黄褐色シルト。

Ⅳ-⑫層：黄褐色細砂と黄灰色シルトの薄いレンズ状ブロックが薄い縞状に互層堆積。

Ⅴ層：Ⅳ層下の花崗岩を主体とする砂礫ないし礫層で、最終氷期の最盛期に、城北地区から堀江低地へ流れる石手川系の河川堆積物と考えられている。13次調査地点DB-DC区間の南北土層では、Ⅳ層は北へ向かって落ち込む。Ⅴ-①～③層に分層できる。

Ⅴ-①層：拳大以下の花崗岩の円礫がぎっしりつまったオリーブ褐色礫層。

Ⅴ-②層：灰黄色砂礫層。Ⅴ-①層と比べて、花崗岩の円礫は格段に少ない。

Ⅴ-③層：にぶい黄褐色粗砂層。

2　遺構と遺物

出土した遺構のすべてに遺構番号を与えているが、竪穴式住居跡や掘立柱建物を構成する土壙・竈・柱穴にも遺構番号を付している。これを整理すると主要な遺構は以下の通りである。

竪穴式住居跡　26棟（SC-4～8・10～18・21・22・25・27・28・30・33～35・37・38・40）

掘立柱建物　14棟（SB-42～47・49・51～54・57・58・62）

柵列と考えられる杭列　3条（SA-20・59・60）

鍛冶炉　1基（SF-41）

溝　10条（SD-2・3・90～97）

土壙　31基（SK-1・9・19・23・24・26・29・31・32・36・39・50・56・75～89・126・262・503）

その他の遺構　14基（SX-48・61・63～74）

立柱痕跡が残る柱穴や杭痕跡が残る杭穴　94基

この他、小穴が数多く発見されている。

竪穴式住居跡は、調査区の数ヶ所で数軒が重複して営まれ、継続して集落が営まれたことがわかる。掘立柱建物には、桁行や梁間の一部の柱穴だけが確認された建物が多く、全形を明らかにできたもの少ない。土壙には、比較的大型のものと、浅く小型の土壙がある。また、SK-126はSC-8の炉跡、SK-262はSC-28に付設された土壙、SK-503はSC-25の竈対置土壙である。SXの遺構略号を付したその他の遺構で、SX-48・73はⅢ層中で確認できた弥生土器を主とする土器（遺物）溜りである。これ以外のSX-61・63～72・74は、Ⅲ層中や遺構の埋土・貼り床部で出土した焼土・炭化物の集積である。小穴には立柱痕跡が残る柱穴や杭痕跡を検出できた杭穴がある。掘立柱建物や杭列を構成する可能性が高い。これを含めて、前述したように、SP-101～611（ただし、SK-126・262・503は、竪穴式住居跡に付設された炉跡と土壙）を付した小穴については、巻末表1を参照されたい。

また、SD-2・3は、基本層序Ⅲ層にあたる黒褐色

シルト層を人力で掘り下げ中に確認できたが、他は基本層序Ⅳ層上面でようやく検出できた。しかし、調査区壁などで土層を観察すると、ほとんどがⅢ層の中位もしくは下部からしか掘り込みラインを確認できない。時期的には、弥生時代中期後葉～後期前葉、古墳時代中期～後期、古代末～中世前期の遺構に大別できる。

これらの遺構の埋土は、基本的にはⅢ層と類似する暗褐色～黒褐色土であるが、径１～３㎜の砂礫が目立つ埋土の遺構と、砂礫が少量しか混じらない遺構に大別できる。前者の埋土をもつ遺構には、古代末～中世前期のSD-２・３と、切り合い関係や出土遺物から古墳時代後期と判断できる遺構がある。後者の砂礫が少量しか混じらない埋土の遺構のほとんどは、切り合い関係や出土遺物から、弥生時代中期後葉～後期あるいは古墳時代中期までの遺構である。巻末表１の遺構一覧では、砂礫が多く混じる古墳時代後期の遺構埋土をＢ、砂礫が少量しか混じらない弥生時代～古墳時代中期の遺構埋土をＡとして報告する。また、出土遺物、埋土の特徴、切り合い関係から把握できた時代別の遺構の内訳をTab.２に整理しているので、参照されたい。

各遺構の出土遺物には、遺構の重複が著しいため、古墳時代の遺構から弥生時代の遺物が出土するなど、かなりの混入がみられる。さらに、前述したように遺構の多くがⅢ層中位～下部から掘り込まれているが、調査時には遺物をⅢ層として取り上げている。そこで、以下、各遺構の報告では上層Ⅲ層部から出土した遺物も含めて検討を行うこととした。

弥生時代の遺物には、壺・甕・鉢・高坏などの弥生土器、打製石鏃・磨製石鏃・石庖丁・石斧・砥石・磨石・敲石・台石などの石器、鉄鏃などがある。とくに、土器には焼成破裂痕をもつ土器や焼成破裂土器片、層状焼成破裂土器の焼成失敗品が混じっている。加えて、サヌカイトや緑色片岩の小石片が多くみられる。石器製作時に生じる石片の可能性も考えられ、これらもできるだけ図化して報告する。

古墳時代の遺物には、土師器や須恵器、砥石や台石などの石器類、鉄刀子や鉄滓、鞴羽口などがある。基本的には、出土した古墳時代中期～後期に伴い、鉄滓や鞴羽口は後期の遺物である。この他、古墳時代前期～中期の遺物が少量ながら出土している。周辺に当該期の遺構が営まれている可能性が考えられる。

古代末～中世前期の遺物には、土師器の皿・碗・土鍋とともに、黒色土器碗、瓦器皿・碗、中国から招来された白磁皿や碗がある。いずれもSD-２・３から出土している。

さらに、今次調査では遺構の埋土やⅢ層中で炭化物片や焼土が目立った。そこで、遺構単位で埋土を取り上げて水洗選別を行ったところ、コメやオオムギの炭化種子、動物骨などが出土した。これらについては、一部を㈱古環境研究所に委託して同定を行った。

Tab. 2　文京遺跡13次調査における主要遺構の時代別一覧

遺構		時代						総数
		弥生時代		古墳時代		古代以降		
竪穴式住居跡		11棟	SC-4～8・11・27・34・35・38・40	15棟	SC-10・12・13・14・15・16・17・18・21・22・25・28・30・33・37			26棟
掘立柱建物		1棟	SB-51	13棟	SB-42・43・44・45・46・47・49・52・53・54・57・58・62			14棟
柵列（杭列）				3条	SA-20・59・60			3条
鍛冶炉				1基	SF-41			1基
溝		6条	SD-90・91・93・95～97	2条	SD-92・94	2条	SD-2・3	10条
土壙		13基	SK-29・31・39・50・56・75・76・79・80・83～85・126	17基	SK-1・9・23・24・26・32・36・77・78・81・82・86・87・88・89・262・503	1基	SK-19	31基
性格不明の遺構		2基	SX-48・73	12基	SX-61・63・64・65・66・67・68・69・70・71・72・74			14基
小穴	立柱痕跡・杭跡をもつ小穴	30基	SP-226・259・273・293・294・301・309・330・332・342・374・397・401・402・437・453・454・456・457・459・482・486・487・537・548・550・571・581・584	61基	SP-128・168・223・228・229・231・239・243・254・255・256・258・260・261・263・265・270・275・280・287・292・296・297・300・316・320・321・324・326・331・333・339・340・341・344・375・377・386・389・398・403・405～407・409・411・416・419・420・429・443・444・461・464・500・502・519・534・535・553・561	3基	SP-510・528・529	94基
	その他	SP-271・346・380・392・485・582・602ほか		SP-141・323・336・359・379・491・497ほか		SP-509ほか		
欠番の遺構		SK-55 SP-112・138・140・152・163・170・174・175・193・185・202～204・209・212・217～219・222・227・233・234・236・238・240・247・257・276・277・303・317・319・337・348・349・355・356・364・366・390・410・422・424・445・448・450・478・489・494・498・521・539～541・551・552・558・569・585・600						

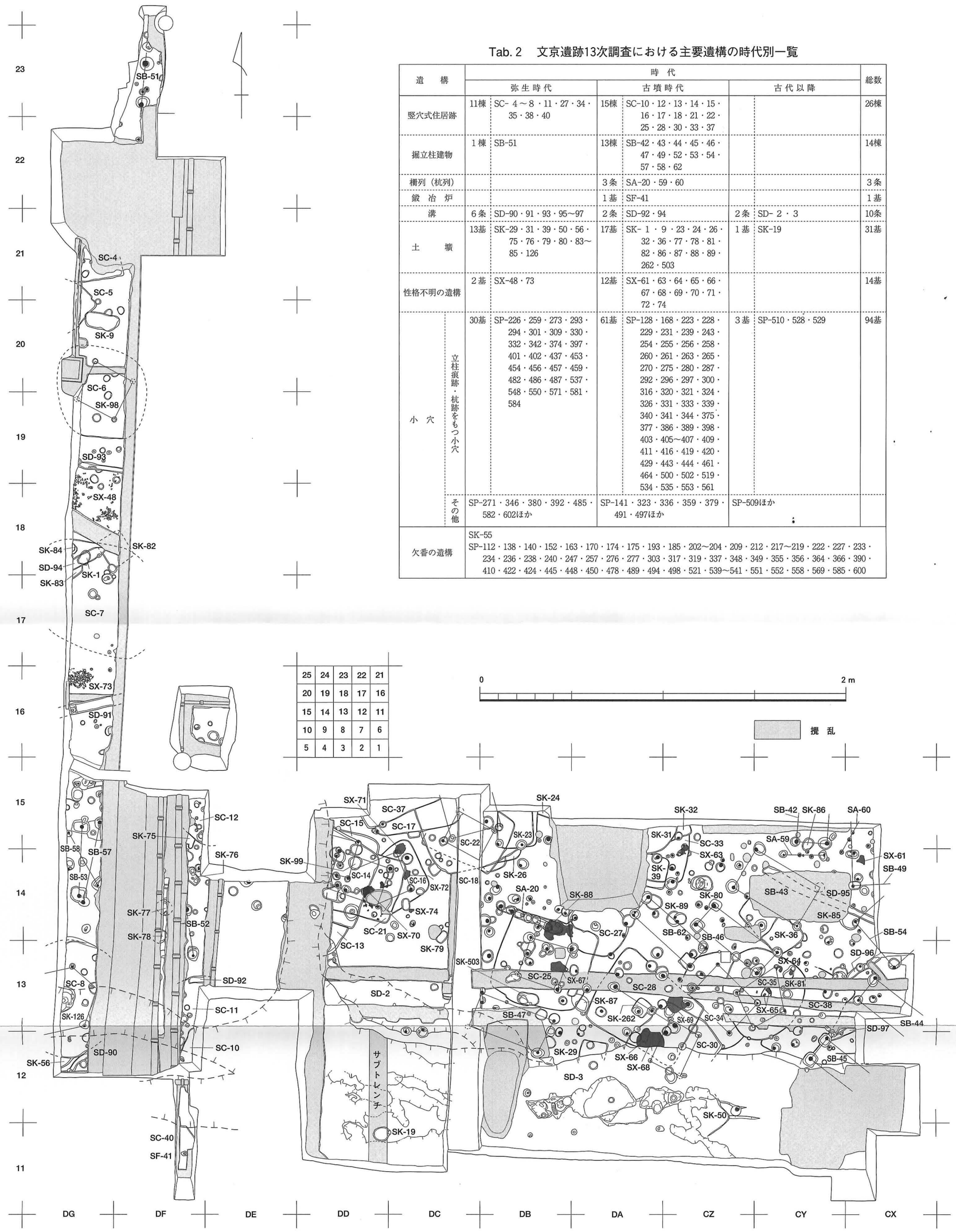


Fig. 5　文京遺跡13次調査主要遺構配置図（縮尺 1 /200）

Ⅲ　遺構・遺物の調査記録

1　弥生時代の遺構と遺物

（1）弥生時代遺構の分布

本節では、遺物およびその出土状況と、埋土の特徴から、弥生時代と判断できた遺構と出土遺物を報告する。

弥生時代の遺構は、竪穴式住居跡11棟（SC-4～8・11・27・34・35・38・40）、掘立柱建物1棟（SB-51）、溝6条（SD-90・91・93・95～97）、土壙12基（SK-29・31・39・50・56・75・76・79・80・83～85）、性格不明の遺構2基（SX-48・73）、そして柱穴および小穴がある。

この中で、その他の遺構であるSX-48・73は、Ⅲ層中で確認できた土器や花崗岩塊などが集中する土器溜りである。Ⅲ層掘り下げ中やⅣ層上面で、遺構の掘り形の輪郭を確認できず、その他の遺構としたものである。SK-75・79・83・85は出土遺物の時期比定が困難で、弥生時代中期～古墳時代前期の時間幅で捉えることしかできない土壙である。また、柱穴および小穴については、出土遺物と埋土の特徴から、弥生時代と判断でき、立柱痕跡や杭痕跡を確認できたものを報告する。

これらは、SC-38が弥生時代中期中葉に遡る可能性があるが、いずれも弥生時代中期後葉～後期中葉の遺構で、後期後葉～終末期のものはみられない。

遺構の分布をみると、建物本体東半部のCX～DB-11～15区と、共同溝部分のDF・DG-11～23区の13次調査区の東西に偏る傾向が認められる。また、遺構数も限られ、3・7次調査区や12・14・16次調査区のように当該期の遺構が密集した状態とは対照的である。

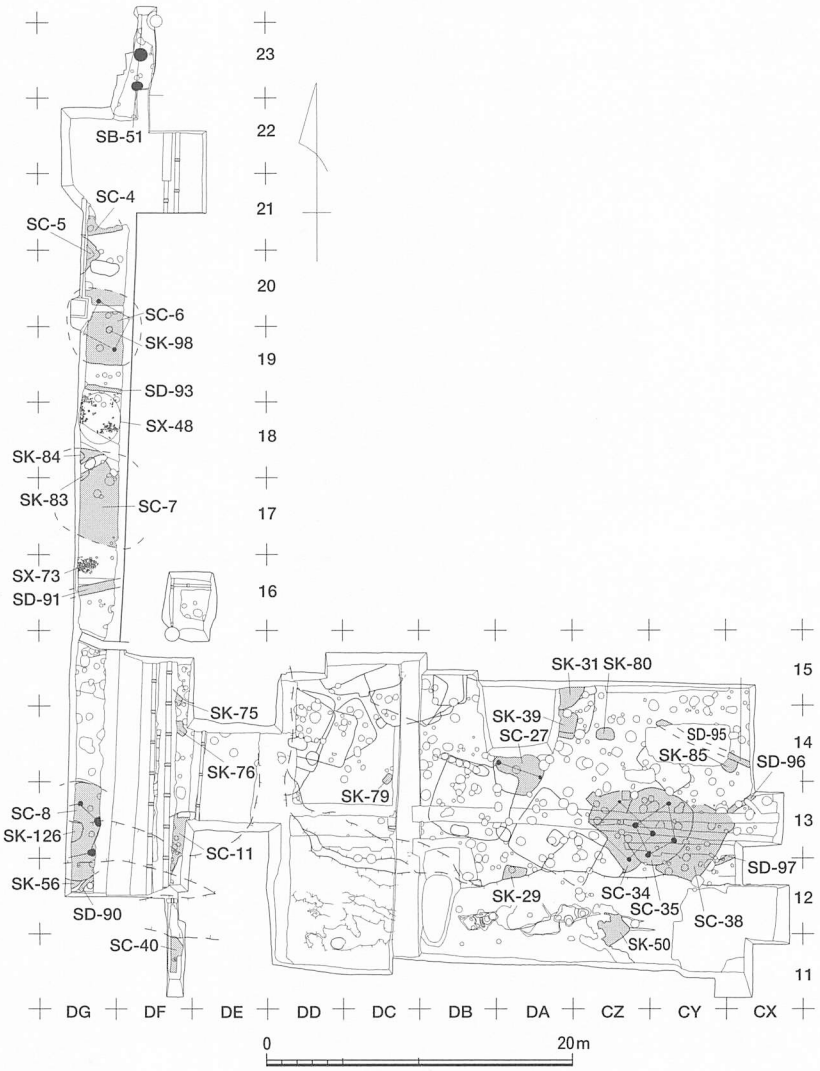


Fig. 6　文京遺跡13次調査における弥生時代の遺構（縮尺1/500）

（2）竪穴式住居

SC-4号竪穴式住居（Fig. 7、Pl. 1）

共同溝部分北端近くのDF・DG-21区で出土した竪穴式住居跡である。攪乱のために大部分が破壊されているが、南東隅のコーナー部分を検出することができた。方形または長方形の平面形をもち、東西残存長2.22m、南北残存幅1.22mを測る。小型の竪穴式住居跡と考えられる。

埋土は、壁際に④層が流れ込み、中央部にも⑤層が堆積し、残る窪み部分を②・③層が覆う。②・④層は、径3cmほどの褐色シルトの楕円形のブロックをごく少量含む黒褐色砂質土で、やや粘性をおびる。③層は褐色シルトに暗褐色砂質土が混じる。⑤層は、径1cmほどのにぶい黄褐色砂質土の薄いレンズ状ブロックをごく少量含む暗褐色砂質土である。①層はSP-103の埋土。SC-4の埋土を切り込んでいる。

床面ではSP-101・102を検出した。黒褐色砂質土で、薄いレンズ状や小さな塊となったにぶい黄褐色や褐色土が混じる。ともに、立柱痕跡は確認できず、5～10cmと浅いので、SC-4の柱穴とは考えられない。

埋土からだけではなく、SC-4上部のⅢ層からも遺物は出土していない。

ただし、埋土は、古墳時代後期の遺構埋土とは異なり、砂礫が混じらない暗褐色砂質土ないしは黒褐色砂質土を基本として

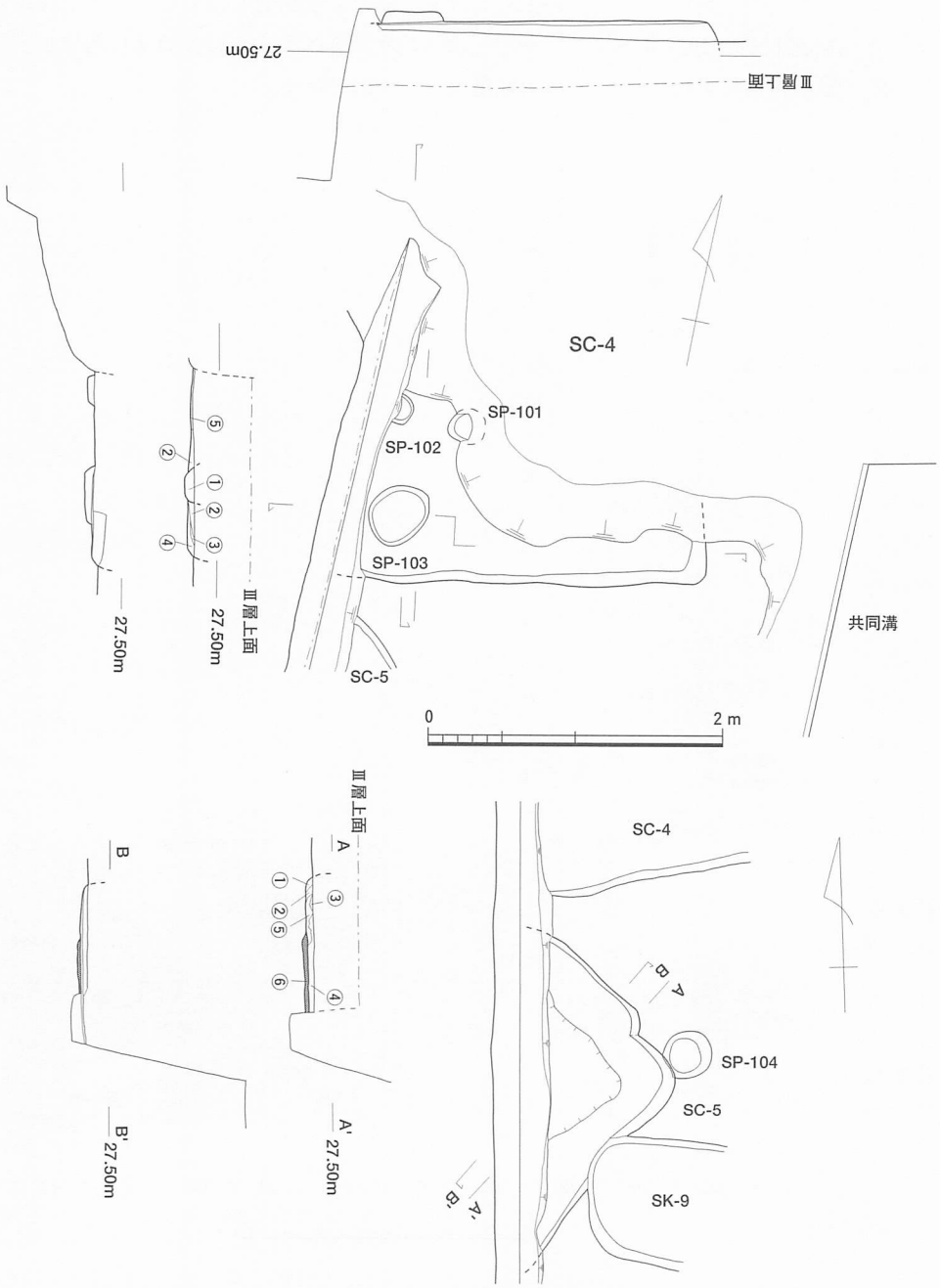


Fig. 7　SC-4・5遺構実測図（縮尺1/50）

おり、周辺の調査区の遺構埋土とも比較し、SC-4は弥生時代中期後葉～後期の遺構である可能性が高い。

SC-5号竪穴式住居

(Fig.7～9、Pl.1・9・23)

共同溝部分北端近くのDG-20・21区の境界部で出土した竪穴式住居跡である（Fig.7）。SP-104を切り、SK-9に切られる。北壁部分が張り出すため、当初、2棟の竪穴式住居跡の重複を考えた。しかし、土層断面の観察では、そうした切り合い関係は確認できず、1棟と判断した。大部分が調査区外にのびているが、周壁の東隅のコーナー部分を検出したので、平面形が方形または長方形の竪穴式住居跡と考えられる。また、床面はほぼ平坦であるが、周壁に沿うように方形の窪みがみられる。窪みの底面にはかなり凹凸がある。埋土は均一で、貼り床部分と判断した。

埋土は、周壁沿いに、砂礫混じりのにぶい黄褐色砂質土の①層と、暗褐色砂質土の②層がみられる。床面には、径2～3cmのにぶい黄褐色砂質土のレンズ状ブロックがやや多く混じる⑤層が、東側から流れ込む。埋土の主体である③・④層は黒褐色砂質土で、とくに④層には、にぶい黄褐色シルトの薄いレンズ状ブロックがごく少量であるが混じる。⑤層と同じく、東側からの流入土である。貼り床部分の⑥層は、均一の黒褐色砂質土である。

③・④・⑥層で炭化物片がみられた以外、埋土中から出土した遺物はない。ただし、上層のⅢ層部分から、少量の土器片が出土した。いずれも細片であるが、複合口縁壺の口縁部破片（Fig.8－1）と、甕の肩部破片（Fig.8－2）を図化できた。1は複合口縁部の箍部の破片で、粘土接合面で剥離している。2は緩やかに屈曲する「く」字形口縁がつくものと考えられる。ともに弥生時代後期前葉に比定できる。また、赤色頁岩製の打製石鏃が1点出土している。基部の一部に調整剥離が及んでおらず、未成品と考えた（Fig.9－1、Pl.23-⑥）。

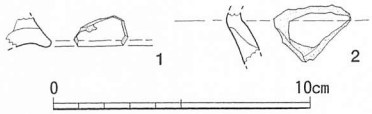


Fig.8　SC-5上部Ⅲ層出土遺物実測図1（縮尺1/3）

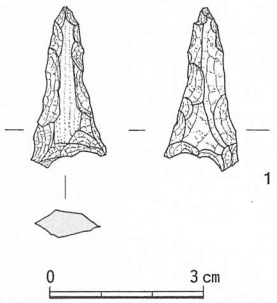


Fig.9　SC-5上部Ⅲ層出土遺物実測図2（縮尺 2/3）

これらはSC-5上部のⅢ層からの出土遺物であるが、埋土の主体を占める③・④層が砂礫がほとんど混じらない黒褐色砂質土であるので、SC-5は弥生時代後期前葉の竪穴式住居跡と考えた。

SC-6号竪穴式住居（Fig.10～13、Pl.1）

共同溝部分北半部で、既設の共同溝の余掘り部分を掘り上げ、その壁面で土層堆積状況の観察中、DF-19区でⅢ層と共通する黒褐色砂質シルトが急に落ち込む部分を確認した。DF-20区でも対応する立ち上がり部分がみられた。この黒褐色砂質シルトの落ち込み底面は、わずかに凹凸があり、南側に向かってわずかに傾くが、ほぼ平坦である。そこで、竪穴式住居であることを意識しながら、Ⅲ層を掘り下げていった。しかし、Ⅳ層上面では、南側の周壁を確認できたが、北側の周壁は検出できなかった。

埋土を除去した後、床面にあたる部分を精査して柱穴の確認に努めた。その結果、SP-110・111・113～115、SK-98を検出できた。その中のSP-110・115が対角線上に配置された柱間2.3mほどの4本柱構造の竪穴式住居跡を推定し、SP-110と南壁との間隔を考慮して、径5m弱の胴張りが強い方形、または隅丸方形の平面形を復元した。また、SP-110・115のほぼ中央に位置するSK-98もSC-6に伴う土壙と考えた(Fig.10)。

ただし、柱穴としたSP-110は、径45～48cm、深さ10cm、SP-115は径30cm、深さ10cmと不揃いで、SP-110は径1～2cmの輪郭がぼやけた楕円形のにぶい黄褐色シルト塊がまばらに混じる暗褐色砂質土の埋土

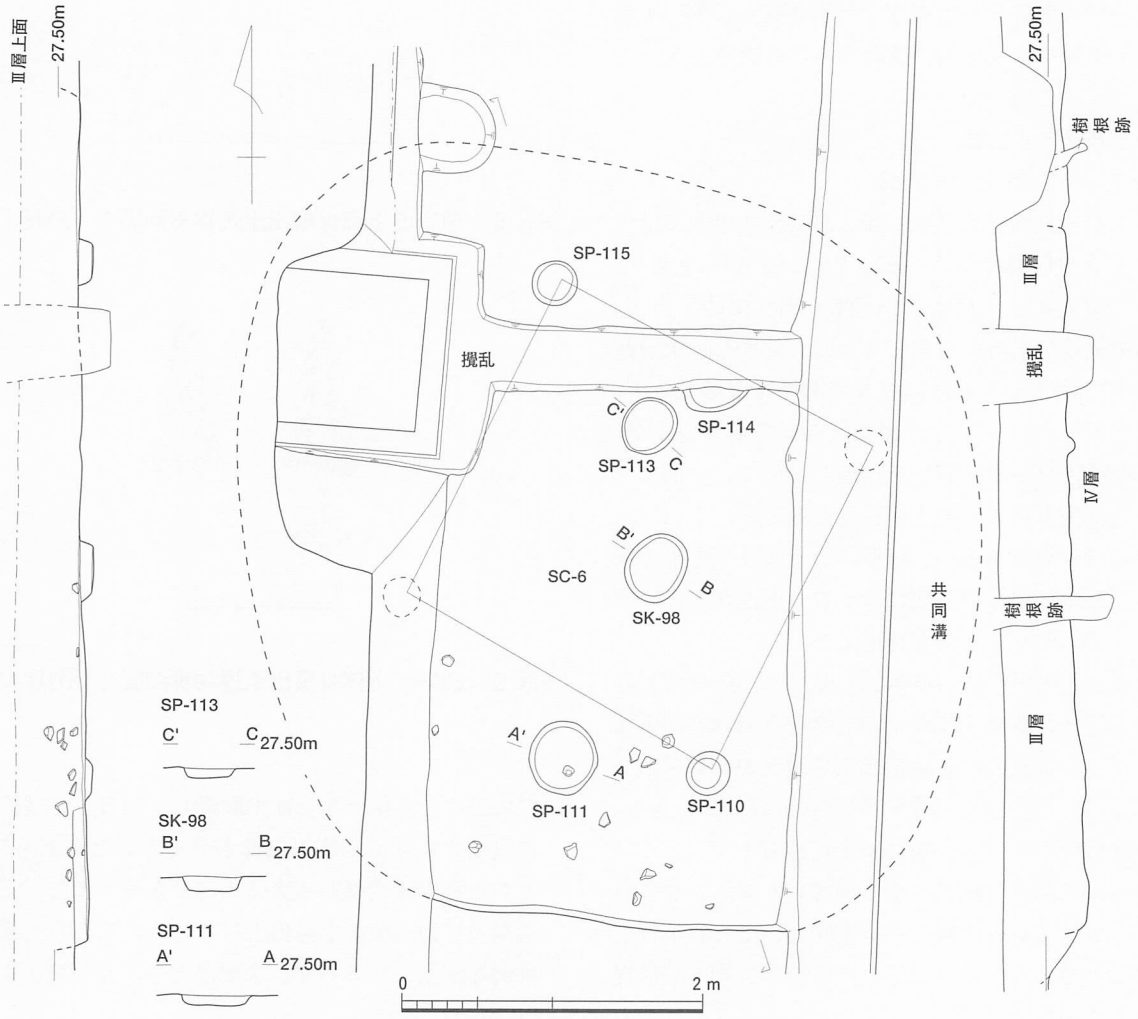


Fig. 10　SC-6遺構実測図（縮尺1/50）

で、SP-115はにぶい黄褐色シルトが混じる黒褐色砂質土であり、立柱痕跡も確認できなかった。

SK-98は、長径47cm、短径39cm、深さ9cmと小型で浅い。埋土は、径1～5cmの楕円形の褐色シルト塊が少量混じる黒褐色砂質土で、径0.2～0.3cmの粒状の炭化物片がごく少量混じる程度である。炉跡とは言い難い。この他、SP-111・113・114と、SC-6との関係は不明である。

遺物は、埋土中や床面近くでもやや浮いた状態で出土したものばかりである。出土量もわずかである。上げ底の甕底部片（Fig. 11-1）、小型の深鉢型の鉢（Fig. 11-2）、坏部底に粘土円盤を充塡した高坏破片（Fig. 11-3）を図示したが、他に、外面にミガキ調整を施した壺の胴部破片、外面に縦方向の刷毛目調整を施した壺の胴部下半部の破片、「く」字形口縁と考えられる甕の肩部片、外面に縦方向のミガキ調整を施した甕の胴部下半部片、その他胴部小片がある。いずれも弥生時代中期後葉の土器である。また、端部に敲打痕が集中する拳大の礫塊（Fig. 12-1）が出土している。

SC-6上のⅢ層部分からは、比較的多くの遺物が出土している。弥生時代中期中葉～後期中葉の壺（Fig.

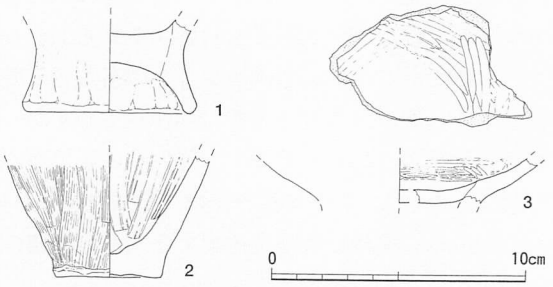


Fig. 11　SC-6埋土出土遺物実測図1（縮尺1/3）

13-1～5）・甕（Fig. 13-6～11）・高坏（Fig. 13-12～14）があり、いずれもⅢ層でも中位～最下部から出土している。その中で、Fig. 13-5は、広口壺の口縁部破片で、口縁端部上面に粘土を貼り付け肥厚させ、口縁端面に篦状工具で羽状文を施文する。口縁形態や口縁端面の文様は、東部九州の別府湾沿岸でみられる弥生時代後期初頭～前半期の広口壺に類似する。また、在地の土器とは違和感のある胎土をもつ。

この他、古墳時代後期の須恵器坏蓋の口縁部細片（Fig. 13-15）や、古代末～中世初頭の土師器皿（Fig. 13-16）がある。量はごくわずかで、Ⅲ層でも上層部分から出土している。

埋土出土の遺物はいずれも弥生時代中期後葉の土器である。また、Ⅲ層でも中～下層部分出土の遺物は、時期幅がややあるが、弥生時代中期中葉～後期中葉のものである。以上の出土遺物と、埋土が砂礫がほとんど混じらない黒褐色砂質シルトであることから、弥生時代中期後葉の竪穴式住居跡と判断できる。

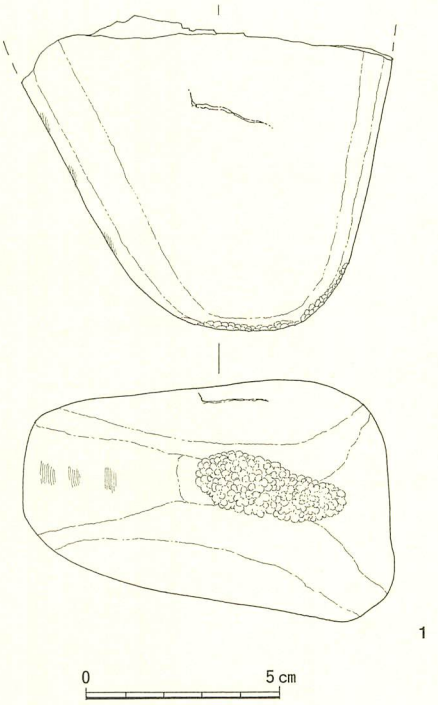


Fig. 12　SC-6埋土出土遺物実測図2（縮尺1/2）

SC-7号竪穴式住居（Fig. 14～16、Pl. 1・15）

DG-18区南端部のⅣ層上面で確認した落ち込みは、東西にほぼ直線的にのび、壁はほぼ垂直に立ち上がる。竪穴式住居跡の周壁の北側部分と考え、これに対応する南側の周壁を精査したが、そうした痕跡は検出できなかった。また、調査区西壁の土層観察でも、北側周壁の立ち上がりは観察できたが、南側の周壁は確認できなかった。しかし、東側の共同溝余掘り壁の土層断面を観察すると、DF-18区南端～DF-16・17区境界

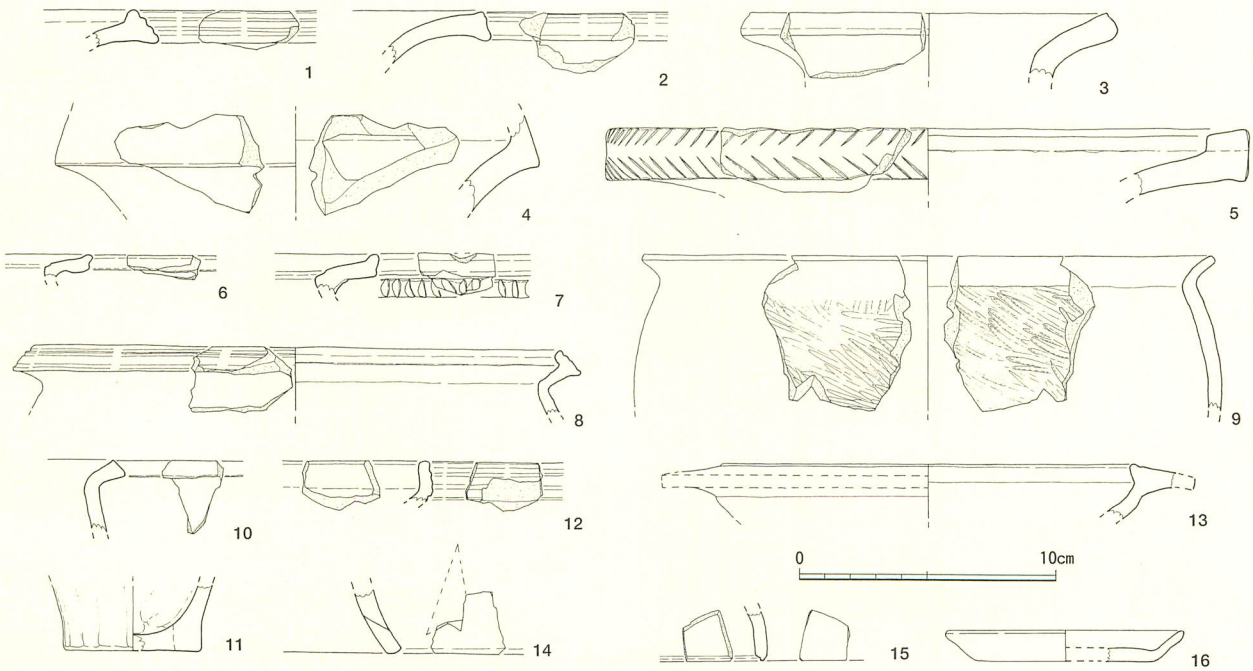


Fig. 13　SC-6上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）

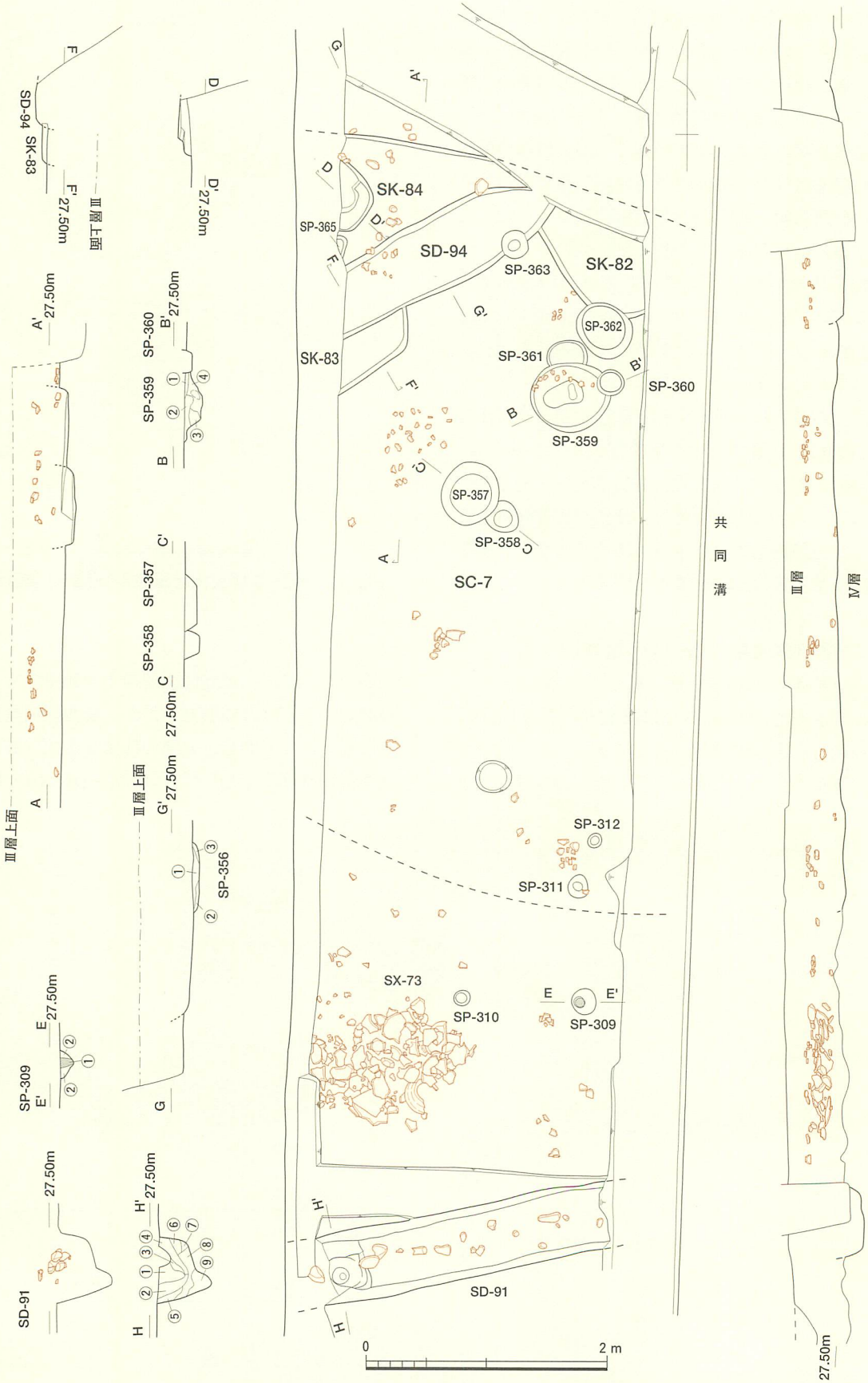


Fig. 14　SC-7、SD-91・94、SK-83・84、SP-309、SX-73遺構実測図（縮尺1/50）

部分から北へ1.8mの地点までは、Ⅳ層上面はほぼ平坦で、遺構埋土の可能性が高いⅢ層最下部とⅣ層上面は明確に分層できる。ところが、それよりも南側では、Ⅳ層上面はかなりの凹凸がみられ、Ⅲ層からⅣ層への変化は漸移的である。こうした点から、東西長5～5.5mの楕円形もしくは隅丸方形の竪穴式住居跡を推定し、SC-7とした（Fig. 14、Pl. 1-2）。

床面では、SK-82～84、SD-94、SP-311・312・357～363・365・366を検出した。小穴では、いずれも立柱痕跡が確認できず、配置関係からもSC-7の柱穴とは考え難い。ただし、SP-357は、推定されるSC-7の東西長軸上に位置する。平面形が長円形を呈する鍋底状で、長径52cm、短径48cm、深さ8cmを測る。埋土は、暗褐色砂質土で、径5cmのやや拉げた楕円形のにぶい黄褐色シルト塊が多く混じる。配置関係から、SC-7に伴うと考えておきたい。

床面から、ごくわずかの弥生土器の細片が出土した。しかし、時期を明らかにできるものはない。SC-7に伴うと考えたSP-357からは、両端の敲打痕が残る砂岩の円礫を用いた敲石が出土している（Fig. 15-1）。

SC-7上部のⅢ層からは、比較的多くの遺物が出土している。弥生土器が主体を占める。ごく少量の古墳時代後期の須恵器が混じる（Fig. 16-18）が、Ⅲ層でも上部から出土し、中位～下部では弥生時代中期後葉～後期初頭に限られている（Fig. 16-1～8・10～13・16・17）。これらは、SC-7の埋土部分の遺物である可能性が高い。

その中で、Fig. 16-5・6は、砲弾形の胴部がつくと考えられる直口縁の甕である。5は口縁部下に断面

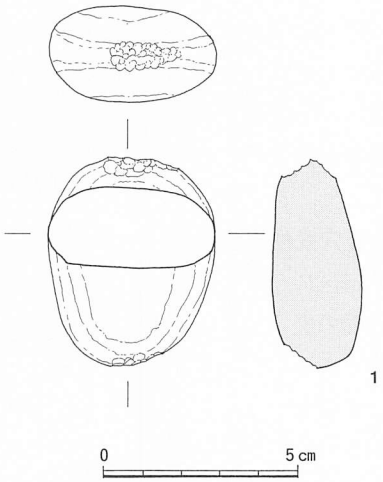


Fig. 15　SC-7内SP-357出土遺物実測図（縮尺1/2）

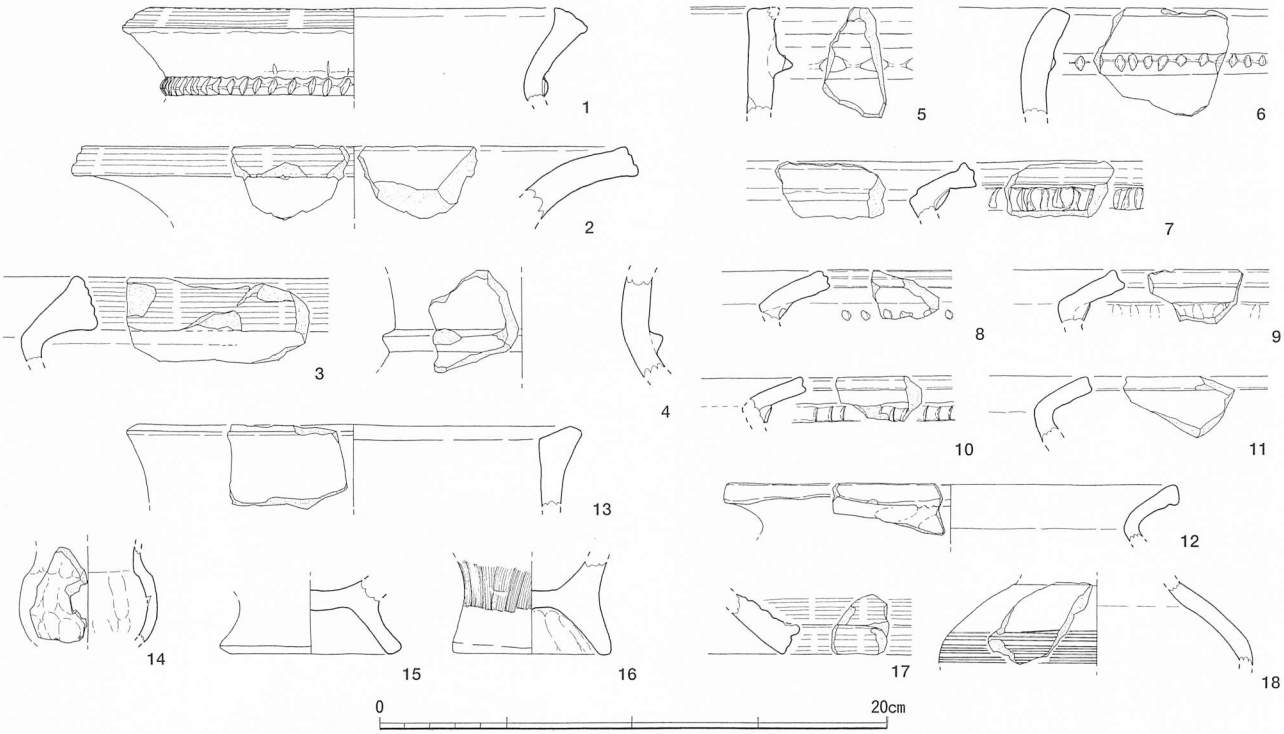


Fig. 16　SC-7上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）

三角形突帯を貼付し、棒状工具で跳ねるように刻目を施す。6（Pl. 15-①）は、口縁部がわずかに外反し、口縁部からやや離れた位置に、小さく細い断面三角形の突帯を巡らし、棒状工具で刺突して刻目を施す。こうした特徴は東部九州に分布する下城式土器の甕と共通する。14は手捏ねの壺のミニチュア土器。

以上、砂礫がほとんど混じらない埋土の特徴と、上部Ⅲ層でも中位～下部から出土した弥生土器を参考として、SC-7の時期は弥生時代中期後葉～後期初頭の時間幅で捉えておきたい。

SC-8号竪穴式住居（Fig. 17～21、Pl. 1・2・15・23・25・26）

DG-12～14区に位置する円形の竪穴式住居跡である（Fig. 17）。Ⅲ層上面からSD-3の一部が切り込まれている。大部分は調査区外へのび、東端部は共同溝の余掘り部分で破壊されていた。北壁の一部が崩れているが、直径約6.5mの規模と考えられる。床面で検出できたSP-129とSP-130は、立柱痕跡をもち、主柱穴と考えた。SP-133も、残存部分では立柱痕跡を確認できなかったが、SP-129・130との配置関係から、主柱穴の一つと判断できる。規模と、SP-129・130・133が主柱穴であることから、6本柱構造の竪穴式住居跡を復元できる。

SK-126は、床面中央に位置する不整楕円形の土壙で、土壙内や周辺には炭化物片や灰

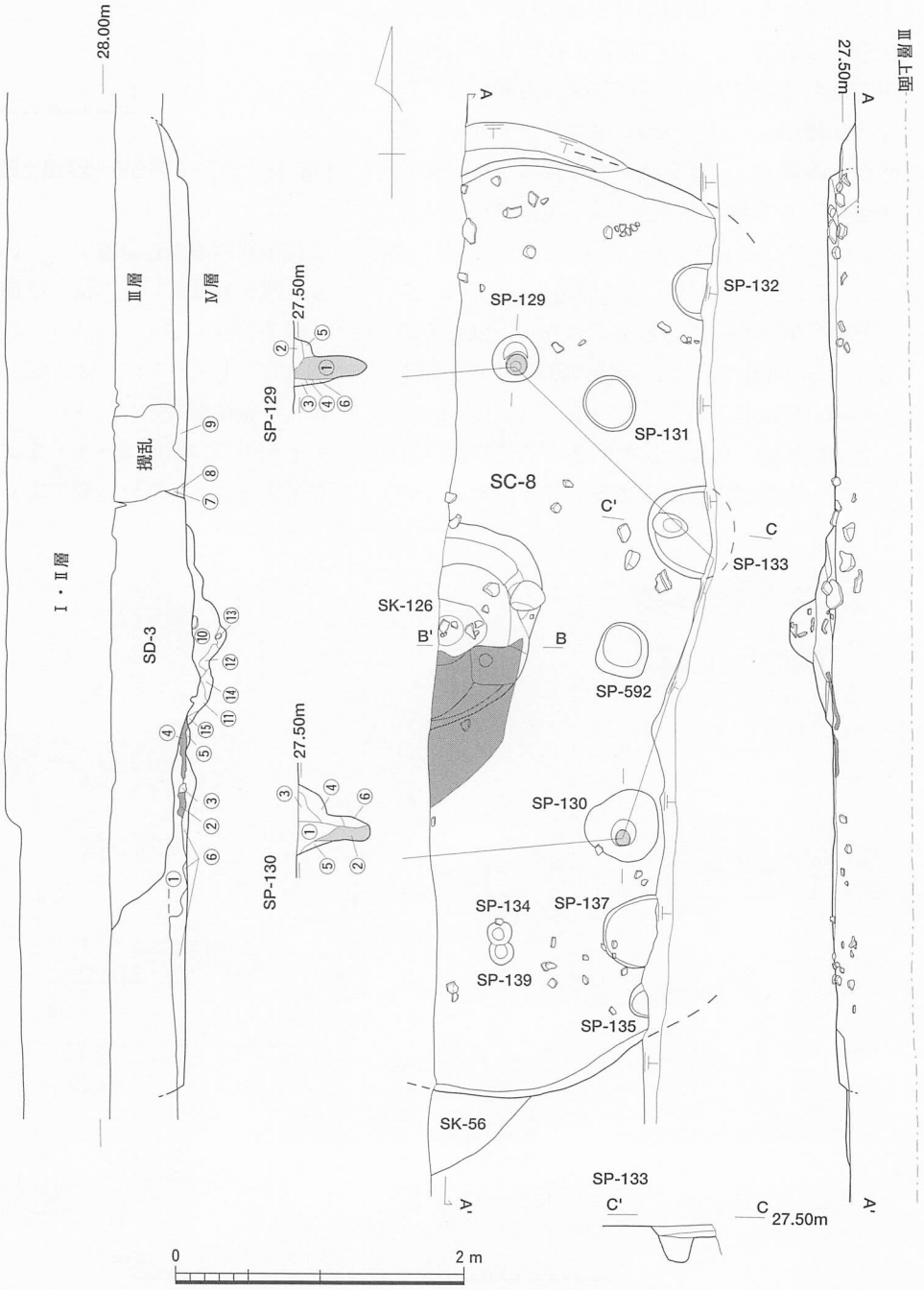


Fig. 17　SC-8遺構実測図（縮尺1/50）

が散乱していた。炉跡である。

この他、床面でSP-131・132・134・135・137・139・592を検出できた。ただし、SP-592は、埋土に砂礫が多く混じる特徴から、古墳後期の小穴である。

埋土を調査区西壁の土層断面で観察すると、SC-8の埋土にあたる①～⑨層、炉跡であるSK-126埋土の⑩～⑮層に大別できる。

SC-8の埋土にあたる①～⑨層の中で、⑥・⑨層は、床面直上～埋土下部の暗褐色砂質土層で、径1～3㎝の楕円形の褐色シルト塊が混じる。南半部には、その上部に、幅3㎝ほどの褐色シルトのレンズ状ブロックが少量混じる暗褐色砂質土である①層が流れ込む。この他、⑦層は径2～3㎜の礫が混じる褐色砂質土。⑧層は⑦層と同じく礫が混じる褐色砂質土であるが、礫はかなり少ない。

②～⑤層は、炉跡SK-126の南側に掻き出されたと考えられる炭化物片が多く混じる土層（②・④層）と、その際に削り取られたⅣ層の塊部分（③・⑤層）である。②層は、暗褐色砂質土で、径1㎝ほどの角張った炭化物片と粒状の炭化物がばらまかれたように薄く広がる。③層は、にぶい黄褐色で、②層と④層の間にブロック状に入り込む。④層はレンズ状の炭化物層。⑤層は、にぶい黄褐色シルトと褐色シルトが混じり合う。

炉跡であるSK-126は、擂り鉢状に窪む不整楕円形の土壙で、西半部は調査区外へのびる。底面および壁部分には、かなり凹凸がある。埋土の⑩～⑮層は、暗褐色砂質土で、炉跡の大部分が掻き出されているためか、焼土や炭化物はそれほど多くみられない。⑩層は、径2～3㎜の角礫が少量混じる暗褐色砂質土。⑪層は、長さ2㎝ほどの細長い炭化物片がごく少量混じる暗褐色砂質土。⑫層は、暗褐色砂質土で、上部に炭化物片がかたまって含まれる。⑬層も、暗褐色砂質土であるが、礫はほとんど混じらず、きめ細かい。⑭層は、暗褐色砂質土で、上部に褐色シルトが多く混ざり込む。径2～3㎜の粒状の炭化物片がごく少量含まれる。⑮層は、径3㎝の楕円形のにぶい黄褐色シルト塊が少量混じる暗褐色砂質土である。

主柱穴のSP-129は、径32㎝、深さ52㎝の略円形の掘り形をもち、中央南よりで径15㎝ほどの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の先端は尖り、柱を打ち込んだような状態である。立柱痕跡の上部が極端に細いので、住居廃絶時に柱が折り取られたものと考えられる。立柱痕跡にあたる①層は、暗褐色砂質土で、上部は砂質が強いが、下部は粘性をおびる。また、幅1～2㎝のにぶい黄褐色砂質土のレンズ状ブロックが少量含まれる。掘り形埋土は、中部に暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色シルトが混じり合う⑥層、その上部に褐色砂質シルトの④層、きめの細かい黄褐色シルトの⑤層が詰め込まれている。埋土上部の②層は、径5㎝ほどの楕円形の褐色シルト塊がごく少量混じるにぶい黄褐色砂質土。③層は、径2㎝ほどの楕円形のにぶい黄褐色シルト塊がごく少量混じる暗褐色砂質土である。

SP-130は、お握り形に近い平面形の柱穴で、径50㎝、深さ50㎝ほどを測る。中央やや南よりで径13㎝ほどの立柱痕跡を検出した。②層が立柱痕跡にあたり、上部の①層が南に大きくずれ込んでいるので、住居廃絶時に柱の根元近くまで折り取られたものと考えられる。①層はやや黄色みをおびた暗褐色砂質土。立柱痕跡の②層は黒みがある暗褐色砂質土で、下部には径1～3㎜の礫が少量混じる。掘り形埋土の下部にあたる⑥層は、幅1㎝ほどの褐色シルトのレンズ状ブロックが少量混じる暗褐色砂質土。④層は、褐色シルトで、径1～3㎝の楕円形や拉げた不整形の暗褐色砂質土塊が多く混じる。④・⑥層ともに、きめが細かくしまっている。埋土上部の③・⑤層は、暗褐色砂質土で、幅1～3㎝の褐色シルトのレンズ状ブロックが混じる。

SP-133は、径65㎝、深さ6㎝ほどの略長円形の掘り形をもつ。底面で西側壁に接する25×15㎝、深さ16㎝の小穴を確認できた。立柱痕跡の可能性もあるが、平面的には痕跡を確認できなかった。むしろ、立柱痕跡は攪乱で破壊された東半部にあった可能性が高い。埋土は、径2～5㎜の礫が多く混じる暗褐色砂質土で、径2～4㎝の円形や楕円形のにぶい黄褐色シルト塊が多く混じる。

住居跡の埋土からは、比較的多くの遺物が出土している（Fig. 18-1～19、Pl. 15-②～⑬）。その中で、14はⅢ層から出土した破片と接合した。いずれも、SC-8が廃絶した後に埋没する過程で流れ込んだ遺物である。また、19は古墳時代後期の須恵器坏蓋で、取り上げ時の混入品と考える。これを除くと、出土土器はいずれも弥生時代後期初頭のものばかりである。また、10（Pl. 15-②）は「く」字形口縁で、口縁屈曲部のやや下方に高さのある大きな断面三角形の突帯を貼り付ける。胎土は在地の土器と変わらないが、突帯や口縁部の形状は、宮崎県を中心とする地域に分布する甕に類似する。

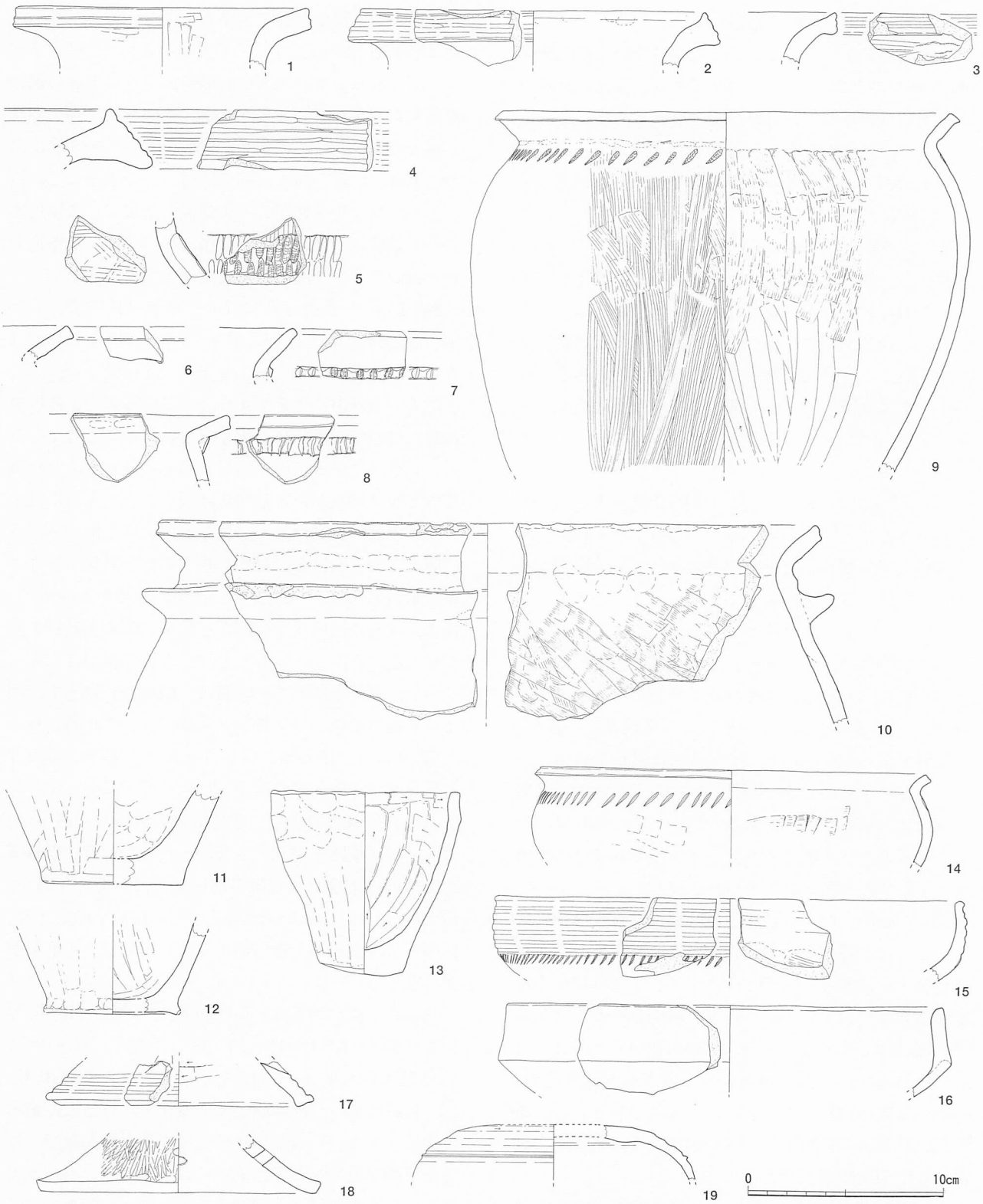


Fig. 18　SC－8埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）

この他、埋土中からは、サヌカイト製の打製石鏃（Fig. 21－1、Pl. 23-⑦）、石庖丁の破片（Fig. 21－5）、自然風化面を残す緑色片岩の石片（Fig. 21－2～4）、両端の擦痕や微細な敲打痕が残る緑色片岩の棒状円礫を利用した敲石（Fig. 21－8、Pl. 26-⑦）、上面に敲打痕と端部に擦痕が残る円礫を用いた敲石（Fig. 21-

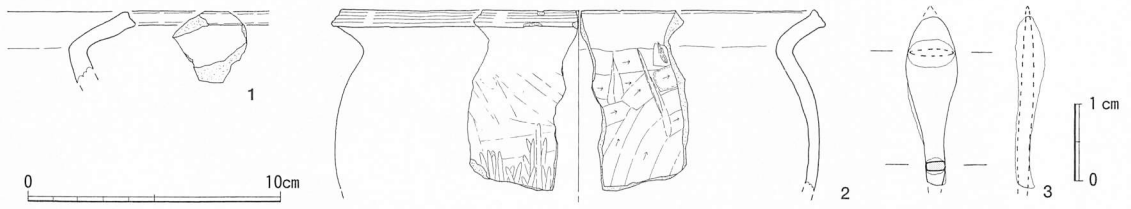


Fig. 19　SC－8 SK-126出土遺物実測図（縮尺1/3、1/1）

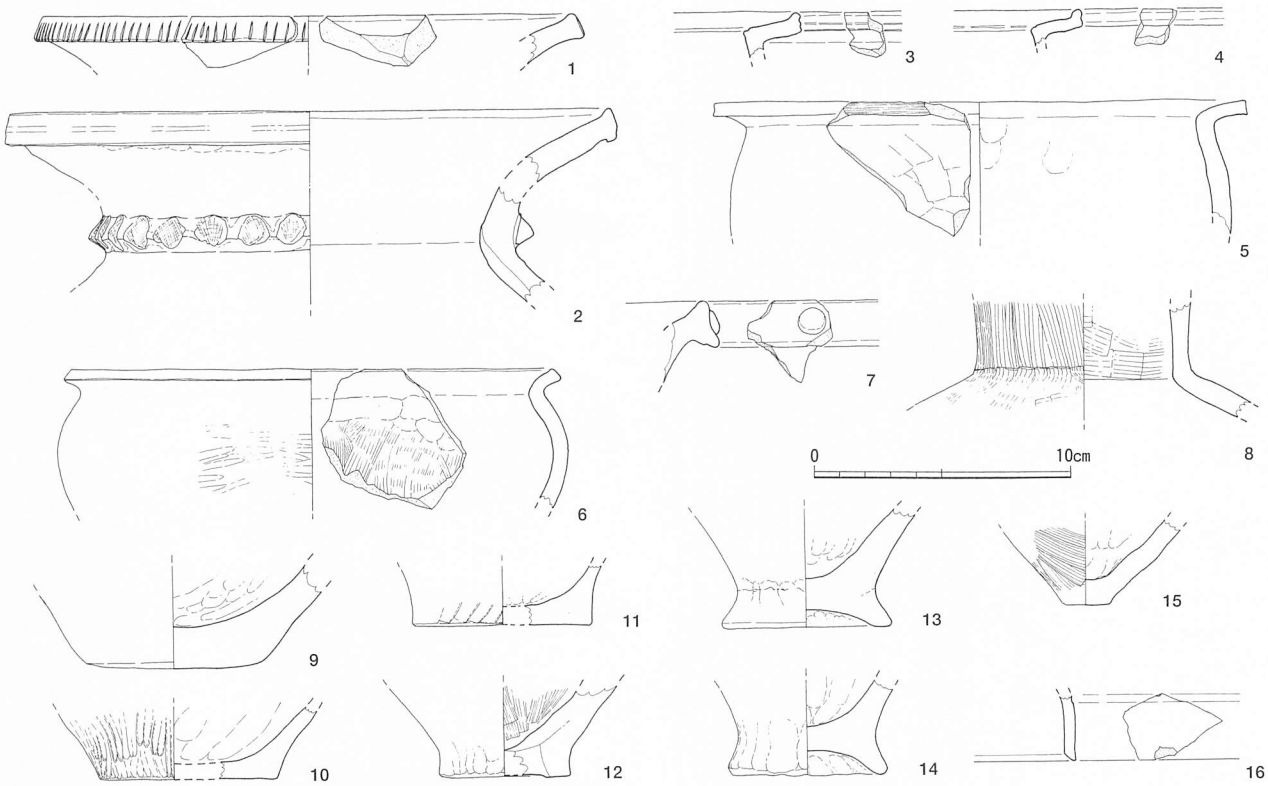


Fig. 20　SC－8 上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）

9、Pl. 25-⑦）、扁平な砂岩塊の台石（Fig. 21-10、Pl. 25-⑥）が出土している。

主柱穴のSP-133からは、内外面をナデ調整した弥生時代の甕の胴部破片が1点が出土したが、細片のため時期は不明である。SP-129①層とSP-130②層からは、土器細片や、炭化材の破片がごく少量出土した。

炉跡のSK-126からは、弥生土器、鉄器、石器および石片が出土している。土器で図化できたのは甕の口縁部2点（Fig. 19-1・2、Pl. 15-⑪）だけである。弥生時代後期初頭に比定できる。石器には、厚さから石庖丁の破損品と考えられる破片（Fig. 21-6）、緑色片岩の石片（Fig. 21-7）、径5㎜以下で厚さ0.5～1㎜のサヌカイトの微細石片がある。鉄器には、鉄鏃（Fig. 19-3、Pl. 23-③）と細片化した鉄器細片がある。ともに埋土の水洗選別で出土。3は、刃幅1㎝、茎幅3.6㎜、厚さ1.2㎜と、鉄鏃にするには小型で、ヤスなどの漁労具の可能性も残す。また、SK-126の埋土と南側へ掻き出された土層を採集して水洗選別を行ったところ、イネ、オオムギ、ブドウ属の炭化種子が出土した。

SC-8上部のⅢ層から出土した遺物は、古墳時代後期の須恵器（Fig. 20-16）、弥生時代後期中頃の壺や甕の底部（Fig. 20-9・15）などが混じるが、大半は弥生時代中期後葉～後期初頭の時間におさまる。その中で、口縁端面に円形浮文を貼り付けた器台（Fig. 20-7）は、弥生時代後期以降に登場する器台と比べて、口縁部が大きく開かず、口縁端部を下方へ小さく拡張させる。以上の出土遺物と、砂礫がほとんど混じらない埋土の特徴から、SC-8は弥生時代後期初頭の竪穴式住居跡と判断した。

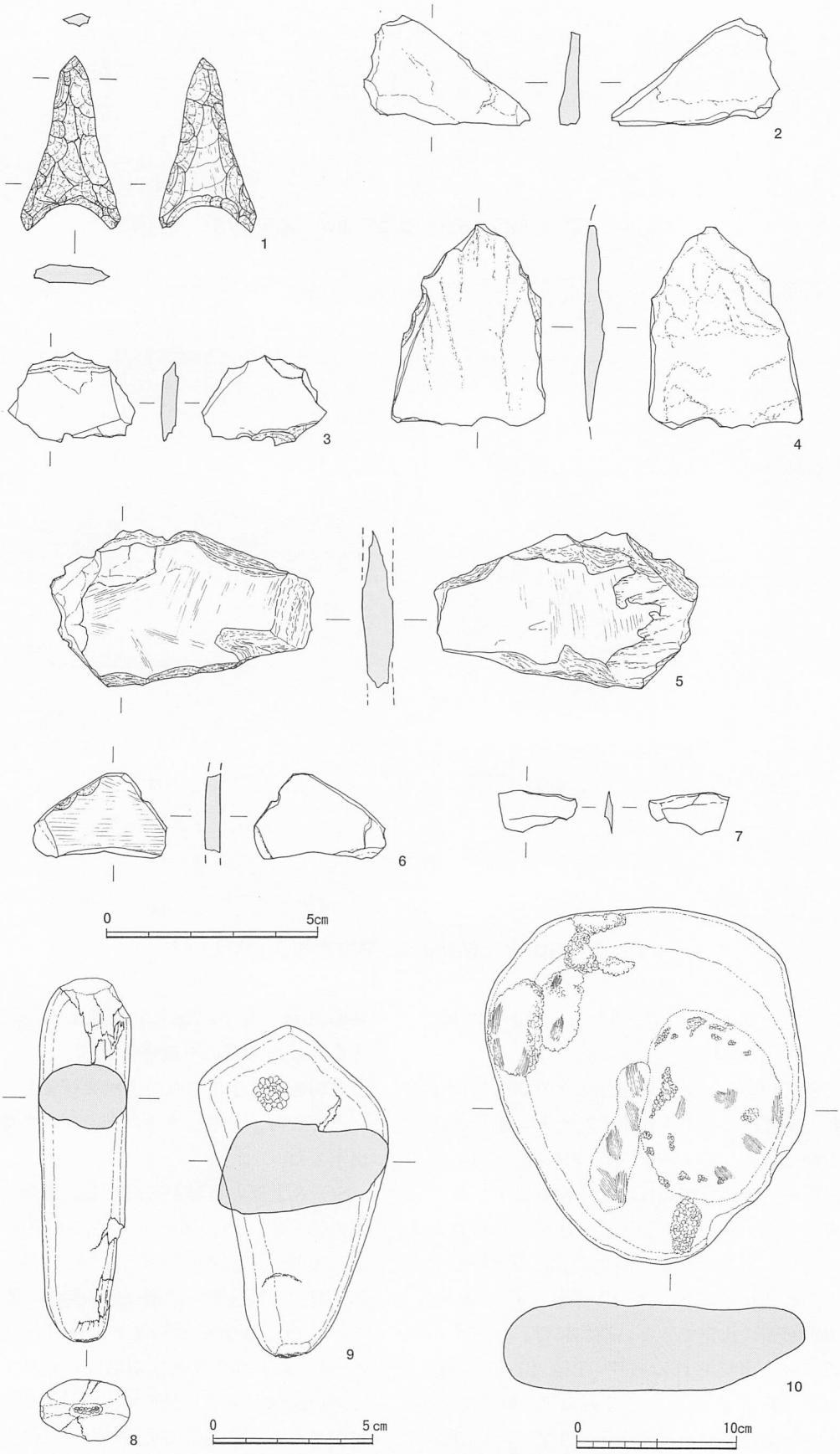


Fig. 21　SC－８、SK-126出土遺物実測図
（１～５・８～10：SC－８埋土、６・７：SK-126埋土、縮尺２/３、１/２、１/４）

SC-11号竪穴式住居（Fig. 22・23、Pl. 1）

DF-12・13区に位置する竪穴式住居跡で、SC-10に切られる。幅1mほどしか調査できておらず、規模は不明である。ただし、周壁がわずかに弧を描くことから、胴張りが強い方形もしくは円形の竪穴式住居跡である可能性がある（Fig. 22、Pl. 1－5）。

埋土は黒褐色砂質土である。

床面で、SD-92とSP-178～186を検出した。北壁沿いで検出したSD-92は、当初、SC-11の周壁溝の可能性を考えたが、埋土に砂礫が多く混じる埋土で、土師器が出土していることから、SC-11を切る溝と判断した。また、SP-178・181～184も、砂礫が多く混じる埋土で、本来はSC-11を切り込む古墳時代後期の小穴である。SP-179・180・185・186は、SC-11の埋土と類似する暗褐色砂質シルトや暗褐色シルトの埋土をもつが、立柱痕跡は確認できなかった。また、SP-179は深さ4cmほどの浅皿状の小穴、SP-185も深さ6cmほどと浅く、SP-180・186も配置関係から、SC-11の主柱穴とは考え難い。

埋土中からは、内面にナデ調整を施す壺の胴部破片、内面にケズリ調整、外面にミガキ調整を施した甕の胴部下半の破片が出土したにすぎない。ともに、器面調整の特徴から、弥生時代中期後葉のものと考えられるが、細片であり図化できなかった。

SC-11上部のⅢ層部分から出土した遺物も少ない（Fig. 23－1～5）。1・2は弥生時代中期後葉の壺。1は、口縁部に粘土を貼り付けて拡張して4条の凹線文を施す。2も5条の沈線文が巡る。3は、「く」字形口縁をもつ甕の口縁部破片で、弥生時代後期中頃に比定できる。4は、弥生時代中期後葉の甕の底部破片で、粘土接合面で剥がれている。5は、弥生時代後期中頃の直口縁の鉢である。他に、細片のため図示しな

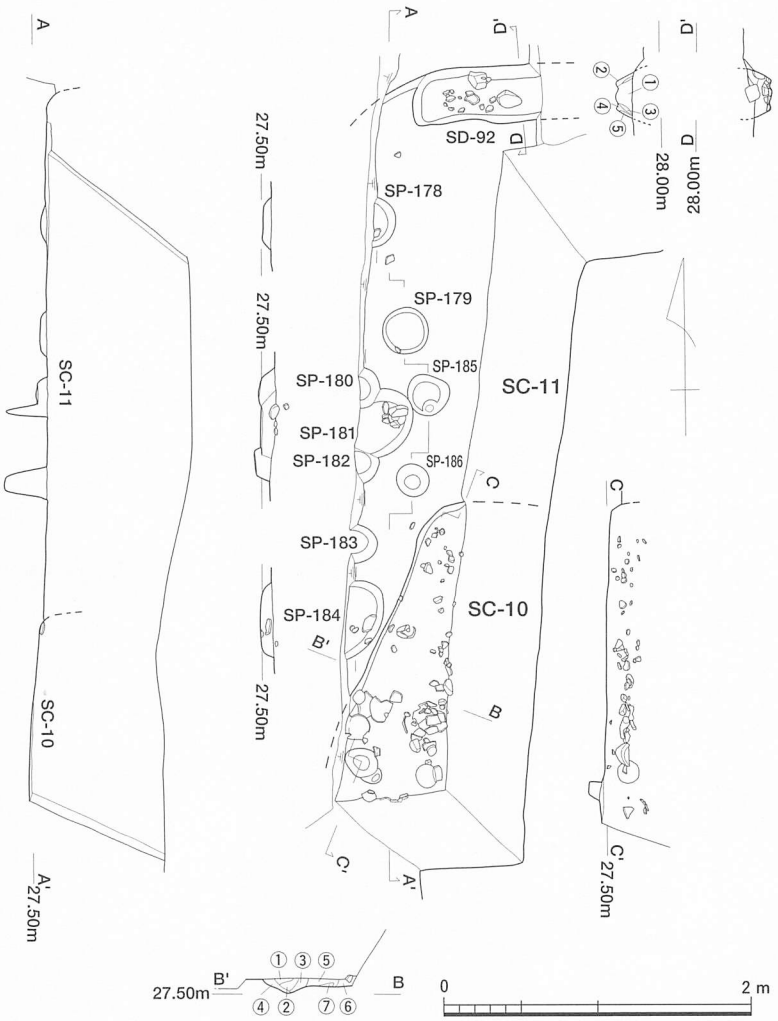


Fig. 22　SC-10・11、SD-92遺構実測図（縮尺1/50）

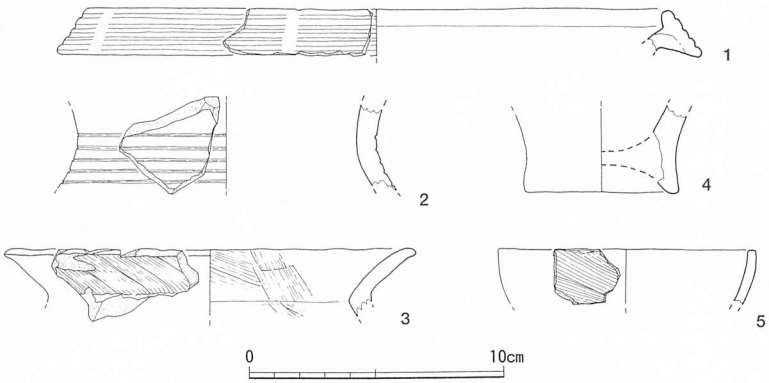


Fig. 23　SC-11上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）

かったが、内外面ともにナデ調整された無文の壺の頸～胴部上半部の破片、内外面ともに刷毛目調整を施した壺の胴部上半の破片、内外面ともにナデ調整を施した「く」字形口縁甕、「く」字形口縁の甕の口縁屈曲部の破片、外面を刷毛目調整、内面をケズリ調整した甕の胴部破片、平底の甕の底部破片、壺や甕の胴部の細片50点がある。

このように、上部Ⅲ層から出土した遺物には、弥生時代後期中葉の甕や鉢が混じるが、以外は弥生時代中期後葉の土器であり、埋土からも当該期に比定できる壺や甕の胴部破片が出土している。これに砂礫がほとんど混じらない埋土の特徴から、SC-11は弥生時代中期後葉の竪穴式住居跡と考えておきたい。

SC-27号竪穴式住居（Fig. 24・25、Pl. 6）

DA・DB-13・14区に位置する不整な長円形の竪穴式住居跡である（Fig. 24、Pl. 6－2）。SC-25、その柱穴であるSP-250、SP-296・297に切られる。また、SP-590はSC-27の床面で確認したが、土層ベルト断面の観察でSC-27を切ることが明らかになった。北側は攪乱で破壊され、SC-25との切り合い部分では壁の一部が倒壊しているが、東西径3.3m、南北径2.8m前後、深さ20cmを測る。床面はほぼ平坦である。東西の壁際でSP-304・589を検出した。それぞれの検出時に、径14～15cmの立柱痕跡を確認した。SC-27の柱穴である。柱間隔は、2.9mを測る。

埋土は、中位～上半部に、黒褐色ないし暗褐色の砂質土である①層が堆積する。東側には、褐色砂質土のレンズ状ブロックがやや多くみられる。周壁沿いの床面近くには、②～④層が流れ込む。②層は、やや灰色みをおびたにぶい黄褐色砂質土。①層よりわずかに小石が少なく、灰色みをおびる。③層は、黒褐色砂質土で、径5mmの楕円形のにぶい黄褐色砂質土塊がごく少量混じる。④層は、褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土が混じり合う。⑤～⑧層は、床面の各所でブロック状に堆積した土層。⑤層は灰黄褐色砂質土、⑥層は褐色砂質土、⑦層はにぶい黄褐色砂質土と褐色砂質土が混じり合い、⑧層は暗褐色砂質土でわずかに灰色みをおびる。

柱穴であるSP-304の埋土は、暗褐色砂質土で、褐色シルトの薄いレンズ状ブロックがごく少量みられる。SP-589の埋土は黒褐色砂質シルトで、周囲に灰色砂が混じる。ただし、調査時に混乱し、土層断面を記録することを失念してしまった。

埋土からは比較的多くの遺物が出土しているが、細片化した土器片ばかりである。埋土の上～下層から散漫に出土している。住居が廃絶し埋没過程で流入した

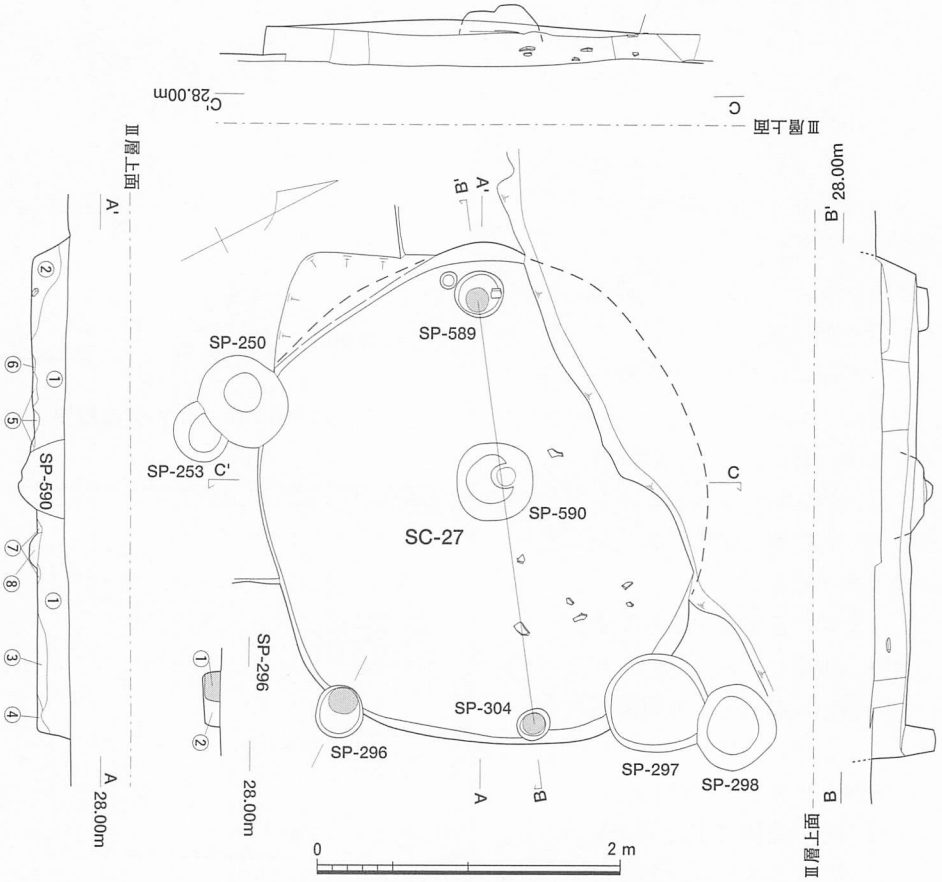


Fig. 24 SC-27遺構実測図（縮尺1/50）

遺物と考えられる（Fig. 25-1～11）。1は、口縁端面に3条の凹線文を巡らす広口壺。2は、端部が上方に摘み上げられた逆「L」字形口縁をもつ甕。3・4も、「く」字形口縁をもつ甕。3は、口縁端部を上方に摘み上げる。5・6は、口縁部に凹線文を巡らす高坏。7・8は脚台付き大型鉢の口縁部の破片で、9は壺の底部破片である。いずれも、弥生時代中期後葉～後期初頭の土器である。この他、SC-25との重複部分の埋土上面から、10の古墳時代後期の須恵器の坏身、11の土師器甕の口縁部破片が出土しているが、取り上げ時の混入品である。また、径3～5㎜の角張った細長い炭化物片が少量出土している。

柱穴のSP-304・589からは遺物は出土していない。

以上、SC-27の埋土から出土遺物は、細片化したものばかりであるが、混入した古墳時代後期の遺物を除くと、弥生土器はいずれも弥生時代中期後葉～後期初頭に限定される。SC-27の埋没時期は、弥生時代後期初頭と考えられる。

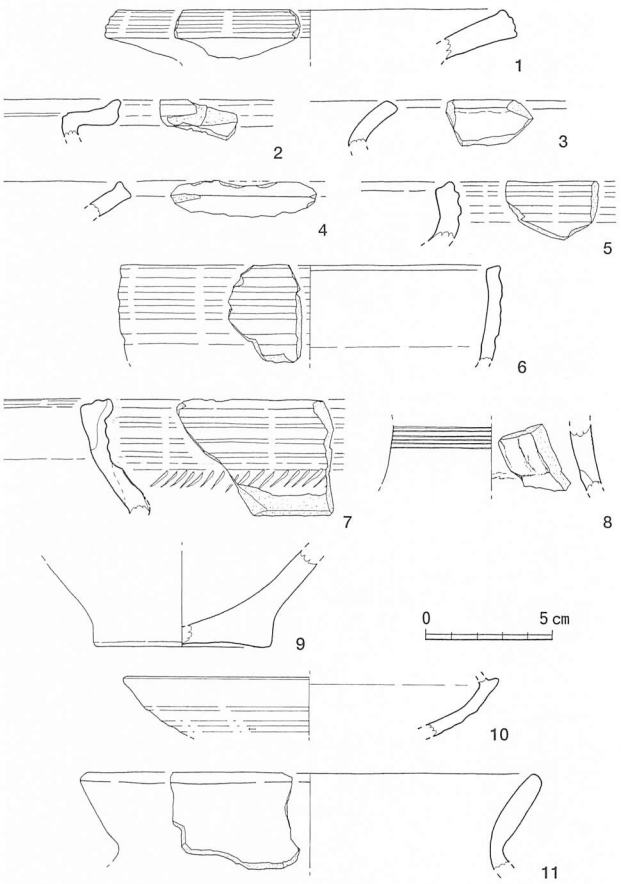


Fig. 25　SC-27埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）

SC-34号竪穴式住居

（Fig. 26～29、Pl. 8・16・24・25）

CZ-12・13区で確認した長径5.3mの長円形の竪穴式住居跡である（Fig. 26）。SC-28・30に切られる。SC-35との先後関係は、検出時にはSC-34がSC-35に切られていると考えたが、土層断面の再確認や遺物の出土状況の検討から、逆にSC-34がSC-35を切り、後出の住居跡と判断した。

床面では、SP-343・344・345・386・388・522・523・524・574が検出できた。しかし、SP-344・386・574は埋土に砂礫が多く混じり、須恵器なども出土していることから、本来はSC-35を切ると考えられる。これらを除き、SC-35の床面で検出したSP-354を加え、SP-343・354の柱間が3.07m、SP-345・354間の柱間が2.26mであることを考え、西側の攪乱溝で破壊された柱穴を想定して、SP-343・345・354を主柱穴とする4本柱構造を考えた。また、北西側に幅68㎝、長さ70㎝前後の張り出し部分が付属する。4本柱中央の軸線上に位置し、出入り口部と判断した。

埋土は黒褐色砂質シルト～砂質土である。

柱穴のSP-343は、径19～20㎝、深さ9㎝の掘り形内に、径13㎝の立柱が打ち込まれていた。立柱痕跡の①層は、褐色シルトで、径5㎜ほどの丸いにぶい黄褐色シルト塊が所々に混じる。先端部分は暗褐色シルトに変化する。掘り形埋土の②層は、にぶい黄褐色シルトの中に、褐色シルトの小塊が混じる。

SP-345は、長径29㎝、短径25㎝、深さ14㎝の長円形の掘り形をもち、径14㎝の立柱痕跡を検出した。立柱痕跡にあたる①層は黒褐色シルト。掘り形埋土上半の②層は、径5㎜ほどの丸いにぶい黄褐色シルト塊が所々に混じる黒褐色シルト、下半の③層は、暗褐色シルトで、にぶい黄褐色シルトの小塊が多く混じる。

SP-354は、径34～37㎝の略円形の掘り形をもつ。径11㎝の立柱痕跡が確認できた。①層は、立柱痕跡で、褐色シルト。所々に砂礫がみられる。掘り形埋土の②層は、暗褐色シルトで、下部に径5㎜の丸いにぶい褐色シルト塊が混じる。

遺物は、床面上や、床面からやや浮いた状態で出土した。出土量は少なく、弥生土器の甕と壺があり、甕の一部は、上部のⅢ層部分から出土した破片と接合したり、比較的大型の破片に復元できた。これらはSC-34の埋没過程で流れ込んだ遺物である（Fig. 27-1～4、Fig. 28-1～3）。

Fig. 27-1は、口径が20～26㎝の中型の甕で、胴部

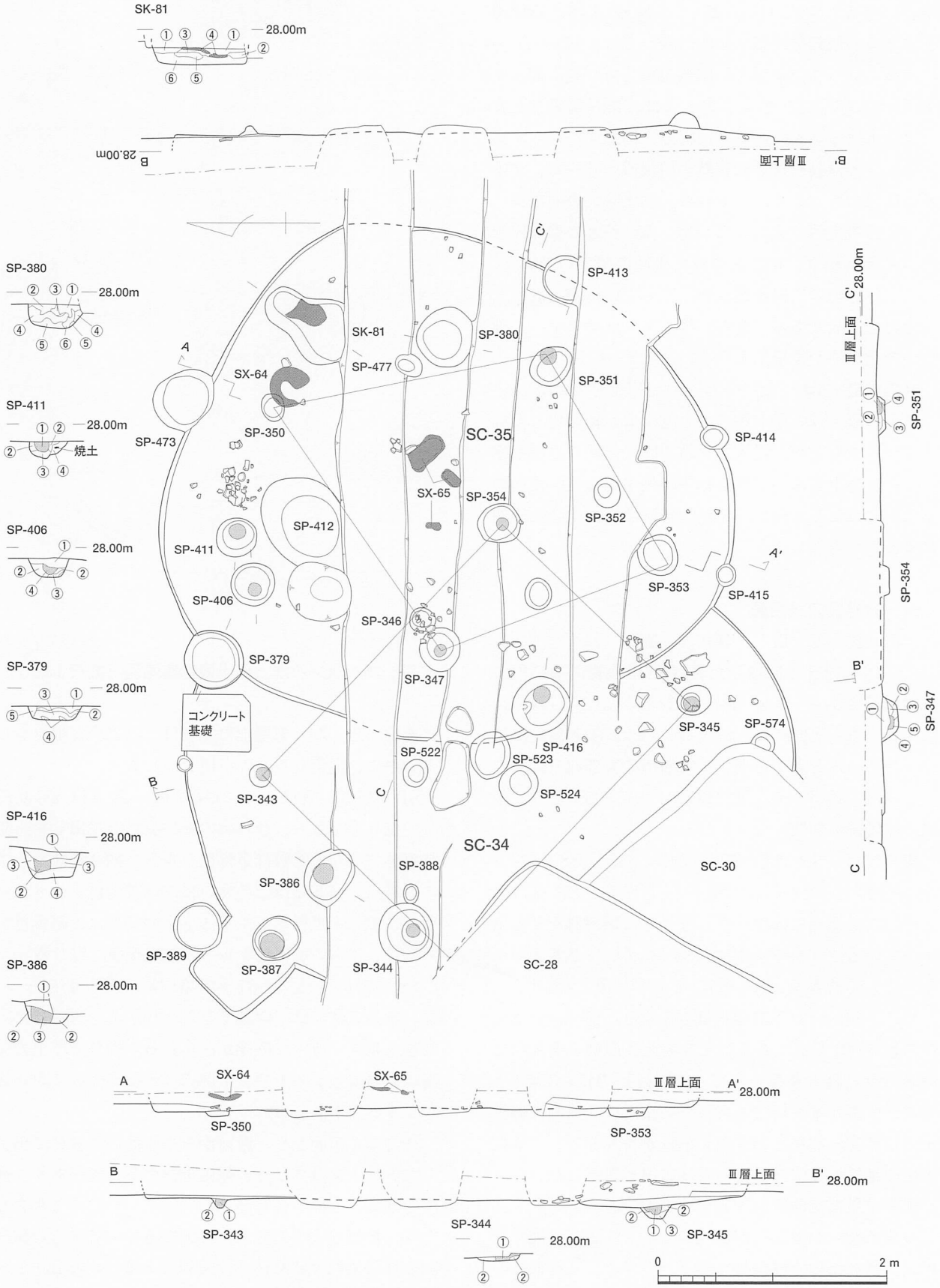


Fig. 26　SC-34・35、SK-81、SX-64・65遺構実測図（縮尺 1 /50）

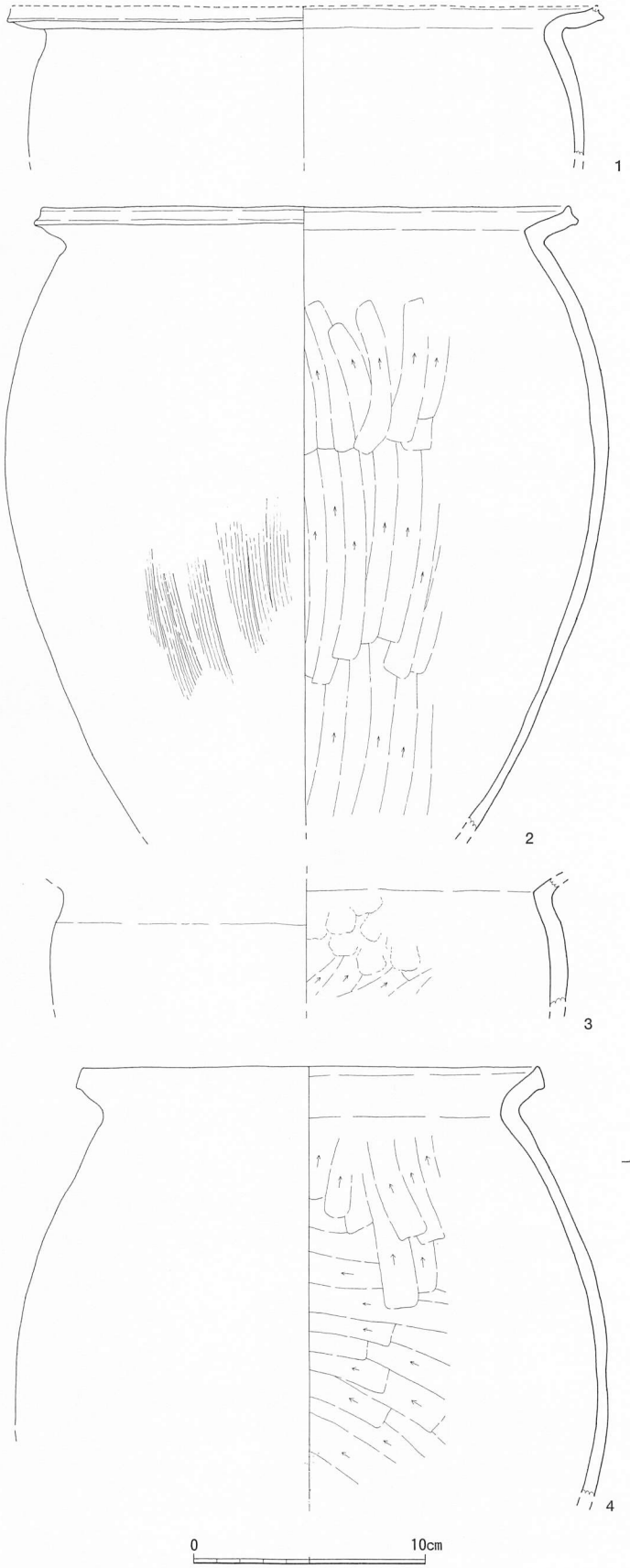


Fig. 27　SC-34埋土出土遺物実測図（縮尺１/３）

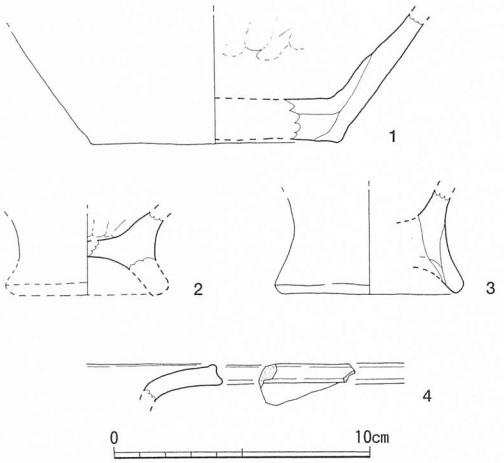


Fig. 28　SC-34埋土、柱穴SP-343出土遺物実測図（縮尺１/３）

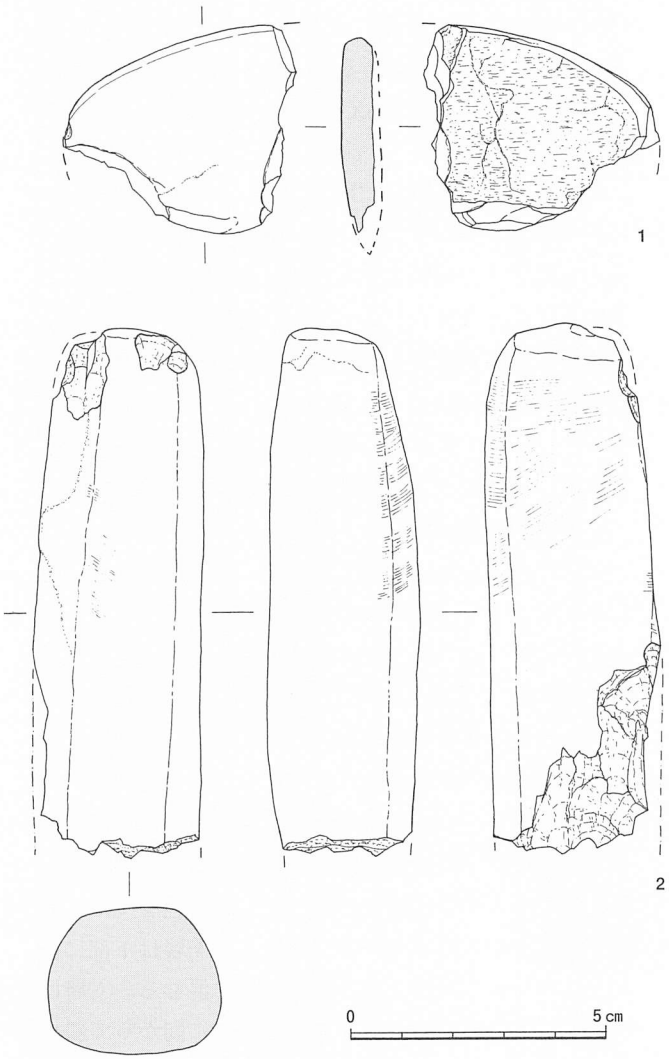


Fig. 29　SC-34出土遺物実測図（縮尺２/３）

の張りが弱く口縁部を強く逆「L」字形に屈曲させる。胴部上半まで縦方向のケズリ調整を施している。弥生時代中期後葉に比定できる。2～4（Pl. 16-①・②）は、胴部の張りが強く「く」字形口縁の甕である。いずれも口縁端部を上方に摘み上げるように横ナデを施す。弥生時代後期初頭に比定できる。底部の中で、Fig. 28-1は大型壺。2・3は甕の底部破片で、ともに上げ底で、裾部が「ハ」字形に大きく広がる。3は、粘土接合面で剥離破損している。いずれも、弥生時代中期後葉～後期初頭のものである。

また、Fig. 29-1（Pl. 24-⑦）は、緑色片岩製の杏仁形石庖丁の背部破片、2（Pl. 25-④）は柱状片刃石斧と考えられる石斧の基部破片で、埋土中から出土した。1はⅢ層中部から出土した破片と接合した。

この他、柱穴のSP-343からは、弥生時代後期の甕の口縁部破片（Fig. 28-4）が出土している。

埋土中から出土した遺物には、弥生時代中期後葉と後期初頭の遺物がある。砂礫がほとんど混じらない埋土の特徴もあわせて、SC-34は弥生時代後期前葉の竪穴式住居跡と考えてよい。

SC-35号竪穴式住居（Fig. 26・30・31、Pl. 8）

CY・CZ-12・13区に位置する不整な楕円形の平面形をもつ竪穴式住居跡である（Fig. 26）。長軸長4.9m、短軸長4.33mを測る。Ⅳ層上面で検出したが、周壁はほとんど残っていない。

SC-38を切り、前述したようにSC-34に切られる。また、SB-46の柱穴であるSP-412に切られる。SC-35北半部上面のⅢ層中でSX-64、中央部でSX-65が出土した。

床面では、SP-347・350～353・380・406・411・477、SK-81を検出した。SP-406・411は砂礫が多く混じる埋土で、須恵器が出土しており、本来はSC-35を切る柱穴と考えられる。また、SK-81からは小型丸底壺などが出土しており、SC-35に伴うとは考えられない。これらを除いて、SP-347・351で立柱痕跡が確認でき、柱間が変則的で矩形となるが、配置関係からSP-350・353加えた4本柱構造を考えざるをえない。

埋土は暗褐色砂質シルトである。

柱穴のSP-347は、径37cm前後、深さ14cmの楕円形の掘り形の中で、径12cmの立柱痕跡を確認できた。立柱は、痕跡が掘り形中位で確認されたことから、住居廃絶に伴って先端を残して折り取られたと考えられる。立柱の折り取り後に流入した①層は、暗褐色シルトで、径1mmの小礫が所々に混じり、径3mmの丸い褐色シルト塊がごく少量含まれる。立柱痕跡の②層は暗褐色シルトで、縦長の楕円形の褐色シルト小塊が点々混じる。③～⑤層は掘り形埋土で、暗褐色シルト。③層は褐色シルトの小塊が多く混じる。④層は下部に径1cmの楕円形の褐色シルト塊が所々に混じる。⑤層は径1cmの楕円形の褐色シルト塊が中央に向かって斜め方向に多くみられる。

SP-350は、径21～27cm、深さ5cmを測る不整円形の掘り形をもつ。埋土は、にぶい黄褐色砂質シルトを主体とするが、暗褐色シルトがシミのように混じる。立柱痕跡は確認できなかった。

SP-351は、長径39cm、短径33cm、深さ7cmの不整な長円形の掘り形をもち、径15cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡にあたる①層は、褐色砂質シルトで、径1～2cmの小礫が所々に混じる。②～④層は掘り形埋土。②層は褐色シルトで、径1cmの楕円形のにぶい黄褐色シルト塊が中央に向かって落ち込むような状態でみられる。③層は暗褐色シルトで、にぶい黄褐色シルト塊がほぼ水平に堆積する。④層は暗褐色シルトである。

SP-353は、不整円形の掘り形で、径35～37cm、深さ7cmを測る。埋土には黄褐色シルトや褐色シルトの塊が斑文状にみられ、立柱痕跡は確認されていない。

SC-35の埋土部分から出土した遺物は弥生土器がほとんどである（Fig. 30-1～15）。

その中で、壺の頸部破片（1）と、底部破片（6）は、床面に密着した状態で出土し、SC-35に伴う遺物である。1は、頸部の付け根に断面三角形突帯を貼付し、頸部が立ち上がり緩やかに開く。弥生時代後期初頭のものである。

また、8は大型壺の底部破片で、床面から出土したが、下層のSC-34に伴う可能性を残す。胴部下半に周縁が弧を描きながらクレーター状に窪む剥離面が観察できる。形状的な特徴に加えて、剥離面が器面と同じ色調に焼き上がることから焼成破裂痕と考えられる。

以外は、床面から浮いた状態で出土した遺物で、SC-35に伴うかは確実でない。その中で、7の胴部下半には焼成破裂痕が残る。2・5は、甕の口縁部破片で、逆「L」字形に強く屈曲させ、口縁端部を上方に

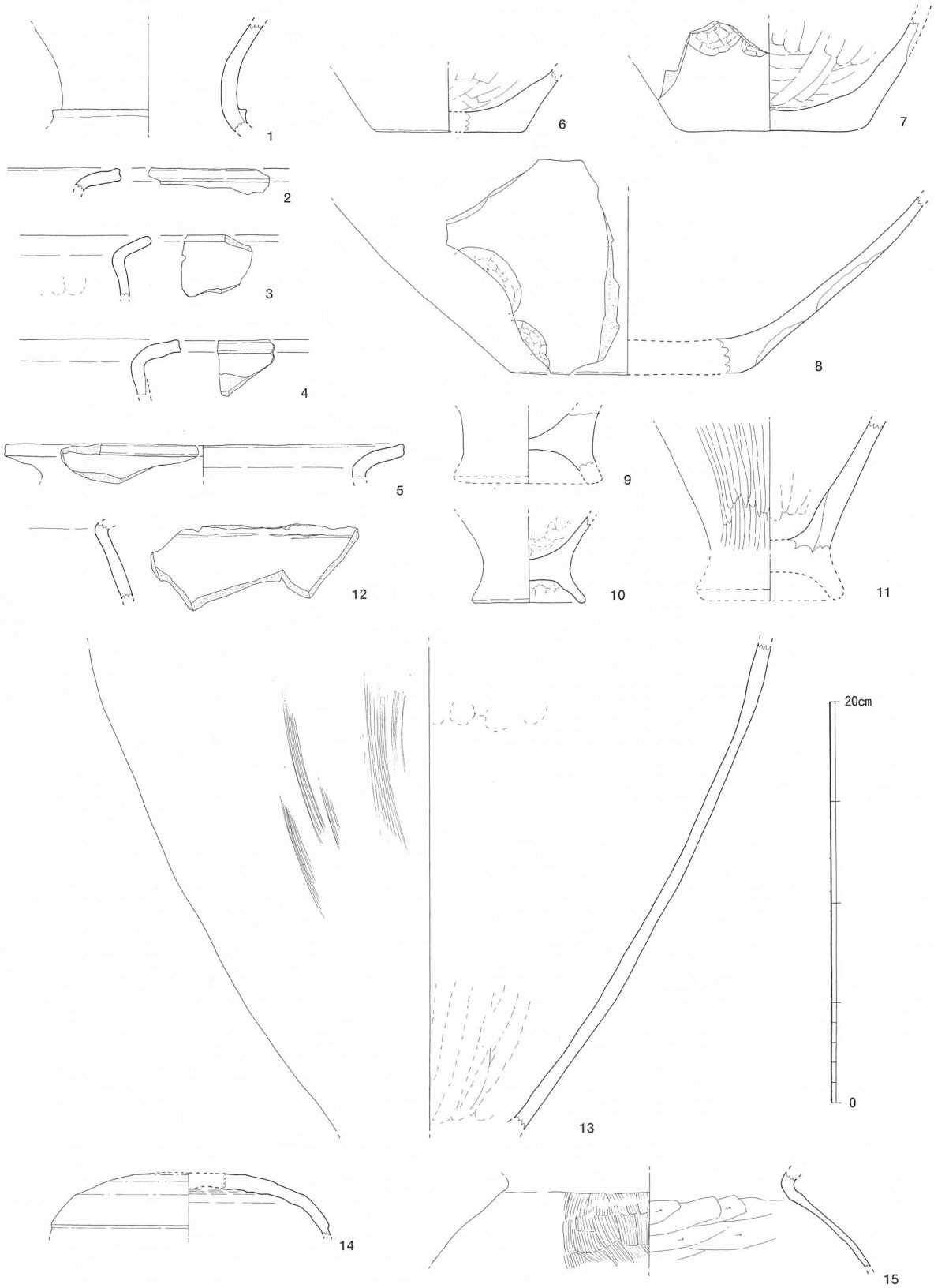


Fig. 30　SC-35埋土出土遺物実測図（縮尺１/３）

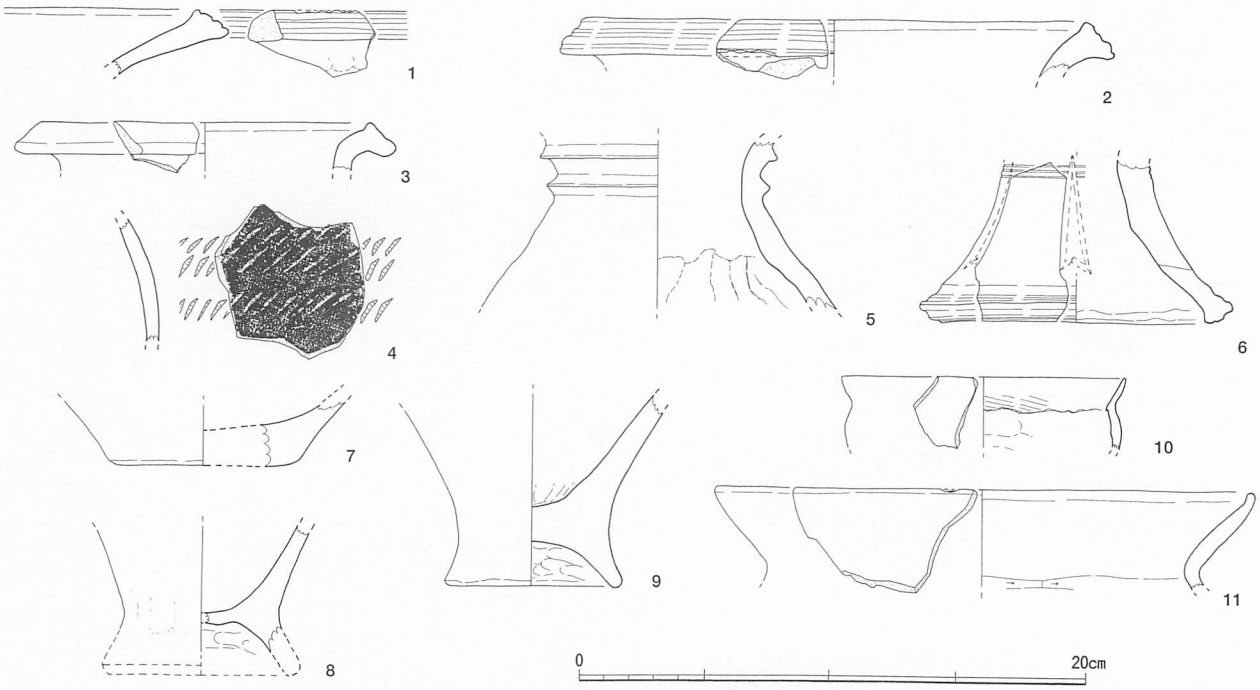


Fig. 31　SC-35・38上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）

わずかに摘み上げられるように、強い横ナデ調整を施す。13は埋土中の遺物であるが、北壁近くの比較的狭い範囲でまとまって出土している。これらは、弥生時代後期初頭に比定できる。この他、古墳時代後期の須恵器の坏蓋（14）や、古墳時代前期の土師器の甕（15）が混入している。

柱穴であるSP-347からは、弥生土器の胴部細片が3点、上部流入土①層から径5㎜の細長い炭化物片が出土。SP-351では、径7㎜の角張った炭化物片がみられただけで、他に遺物は出土していない。また、SP-353からは、弥生後期初頭～前葉の甕口縁部の細片、径5㎜の細長い炭化物片が出土した。

SC-38号竪穴式住居（Fig. 31・32・33、Pl. 8）

砂質シルトが長方形に広がる範囲を確認でき、竪穴式住居跡と考え、SC-38とした（Fig. 32）。南北長5.25m、東西幅3mほどの長方形の平面形であるが、床面付近しか残存していない。SC-35に切られる。

床面では、SP-419・421・440～442・459・465・472・476・501・527・536・596を検出した。当初、配置関係から、立柱痕跡が確認できたSP-420とSP-440を柱穴と想定していた。しかし、SP-420は、SP-419・476とともに、砂礫が多く混じる埋土で、本来SC-38を切る古墳時代後期の柱穴および小穴である。

また、SP-421は、底面の凹凸が著しく、樹木根の

SC-35上部のⅢ層部分から出土した遺物には、外面に3段にわたって刷毛目工具の小口を押捺して短斜線文を施文する壺の胴部破片（Fig. 31-4）、弥生時代中期中葉～後葉の頸部の付け根に断面三角形突帯を2条貼り付けた壺の肩部破片（Fig. 31-5）がある。また、古墳時代前期の土師器である小型丸底壺（Fig. 31-10）や、甕の口縁部破片（Fig. 31-11）が出土している。

以上の床面に密着して出土した遺物が弥生時代後期初頭に比定できることから、SC-35は当該期の竪穴式住居跡と考えた。

調査区東端近くのCX・CY-12・13区では、暗褐色

跡と考えられる。埋土に砂礫が混じらない壁際のSP-442・459・527・596などが柱穴となることも考えたが、SP-459で確認したのは径が小さな杭痕跡で、他も小さく浅い小穴ばかりである。ここでは、立柱痕跡を確認できたSP-440が主柱穴の一つと考えるが、主柱構造は不明とせざるをえない。

このSP-440は、径50～55㎝、深さ10㎝の略円形の掘り形をもち、径14㎝の立柱痕跡を確認できた。掘り形埋土の①・②層は黒褐色シルトで、黄褐色シルトの小塊が混じる。その量は①層と比べて②層が多い。立柱痕跡にあたる③層は黒褐色シルト。

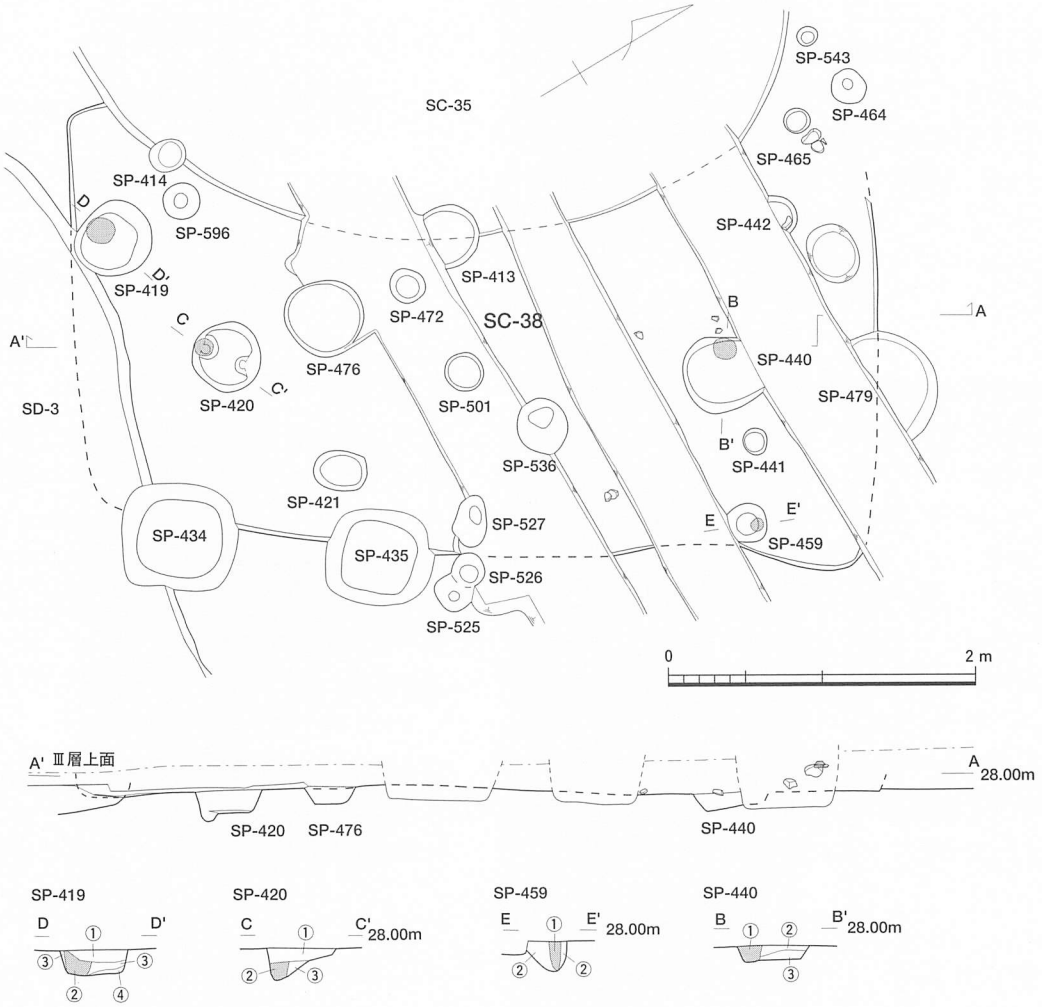


Fig. 32　SC-38遺構実測図（縮尺1/50）

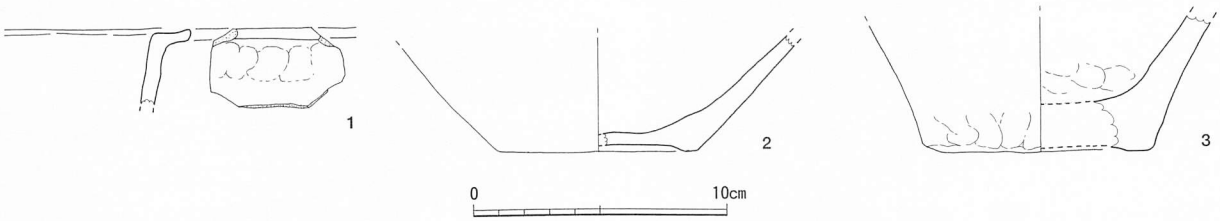


Fig. 33　SC-38埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）

部分的にしか残存していなかったSC-35の埋土部分からは、点々と小片が出土しているにすぎないが、いずれも弥生土器である（Fig. 33-1～3）。1・3は床面に貼り付いた状態で出土し、SC-38に伴う遺物である。1は、甕の口縁部で、逆「L」字形に強く屈折する。こうした特徴をもつ甕は、弥生時代中期後葉以降にはみられず、文京遺跡周辺では祝谷六丁場遺跡で出土する中期中葉の甕に類似する。3は、大型甕の底部で、厚底で、胴部下半が直線的にひろがる。やはり中期後葉以降にはほとんど出土しない底部である。2は床面からやや浮いた状態で出土した壺の底部破片である。

柱穴と考えたSP-440では、掘り形埋土から二次的な火熱をうけて赤変した弥生土器胴部細片と、径4.8㎝、厚さ1.5㎝の含礫細岩の円礫、径3㎝、厚さ0.8㎝の扁平な円盤状の花崗岩円礫が出土した。

また、SC-38上部のⅢ層部分から出土した遺物も少ない（Fig. 31-1・3・8・9）。1は弥生時代中期

後葉の口縁部に凹線文を施す広口壺の口縁部破片、8・9は上げ底の甕の底部破片で、これらに混じり、3の下垂口縁壺の口縁部破片がある。口縁端部を下方に引き伸ばす特徴から、弥生時代中期中葉と考えられる。

以上の出土遺物と、弥生時代後期初頭のSC-35との切り合い関係から、SC-38は弥生時代中期中葉に遡る可能性が高い竪穴式住居跡である。

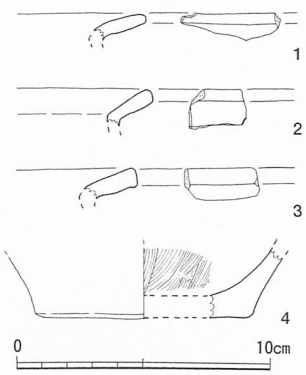


Fig. 34　SC-40埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）

SC-40号竪穴式住居（Fig. 34・116）

DF-11区の管路部分で、基本層序のⅡ層下のSD-3埋土の砂礫を非常に多く含む暗褐色砂質シルトを取り除いた後にSF-41が検出できたが、SF-41の下層にも暗褐色砂質シルトを埋土とする遺構を確認できた（Fig. 116）。周囲を攪乱で破壊され全体像は明らかでないが、15cmほど残存する壁面がほぼ垂直に立ち上がり、底面がほぼ平坦であることから、竪穴式住居跡と判断した。壁が直線的にのびることから、方形もしくは長方形の平面形が想定される。埋土は、上部から下部で均一な暗褐色砂質シルトで、炭化物の小片が点々と混じる。廃絶後に一気に埋められたと考えられる。

埋土から出土した遺物は弥生土器ばかりである（Fig. 34-1～4）。胴部破片がほとんどで、1～3甕の口縁部と、4の壺もしくは鉢の底部を図化できただけである。甕は、いずれも屈曲が強い「く」字形口縁部をもち、弥生時代後期初頭に比定できる。これら以外の時期の遺物は含まれておらず、SC-40は弥生時代後期初頭の竪穴式住居跡と考えた。

また、埋土に多くの炭化物が混じっていたので、一部を採集し、水洗選別作業を行ったところ、炭化米や、アカガシ亞属やヤマグワの炭化材、サヌカイトや緑色片岩の微細石片が出土した。

（3）掘立柱建物

SB-51号建物（Fig. 35・36、巻頭図版2）

調査区北端のDF-23区で出土したSP-395・399では、径26～30cmの立柱痕跡を確認でき、これらが構成する掘立柱建物を想定した（Fig. 35）。柱間は2.25mを測る。調査区が狭いために、掘立柱建物の全体像は不明である。

SP-395・399の延長線上には、SP-392・398・401が位置する。その中で、SP-398は、砂礫が多く混じる埋土をもつので、古墳時代後期の杭跡である。SP-392は、SP-395の北側30cmほどに位置するが、深さが異なり、立柱痕跡も検出されなかった。SP-401は、SP-399から1.95mほど南へ離れた位置にあり、径10～11cmほどの杭痕跡が確認できた。しかし、大きさも深さもSP-395・399とは異なる。そのため、SP-392・401はSB-51に伴うものかは判然としない。

柱穴のSP-395は、径72～75cmを略円形の掘り形をもつ。掘り形のほぼ中央で径30cmの立柱痕跡を確認できた。掘り形と立柱痕跡は、Ⅲ層下部で検出できた。立柱痕跡にあたる①層は、径2～3㎜の砂礫が少量混じる暗褐色砂質土で、にぶい黄褐色シルトと褐色シルトが混じり合う径1～3cmの塊が多く含まれる。SP-399と比べて20cmほど深い掘り形であるが、底面に、径2～3cmの褐色シルト塊がごく少量混じる暗褐色砂質土の⑧層と、径1cmの楕円形の褐色シルト塊がやや多く混じる暗褐色砂質土の⑦層を敷き、その上に柱を据えて、②～⑥層で固定する。②・③層は、黒褐色砂質土で、幅1～2cmのにぶい黄褐色砂質シルトのレンズ状ブロックがやや多くみられる。④～⑥層は暗褐色砂質土である。④層には径3～5cmの輪郭がぼやけた楕円形の褐色シルト塊が比較的多く混じる。⑤層には径2cmの楕円形の褐色砂質シルト塊、⑥層には径1cmほどの楕円形の褐色シルト塊が少量混じる。

SP-399は、SP-395とは異なり、Ⅲ層上面では検出できず、Ⅳ層上面まで掘り下げて、ようやく確認できた。長径73cm、短径65～70cmの長円形の掘り形をもつ。

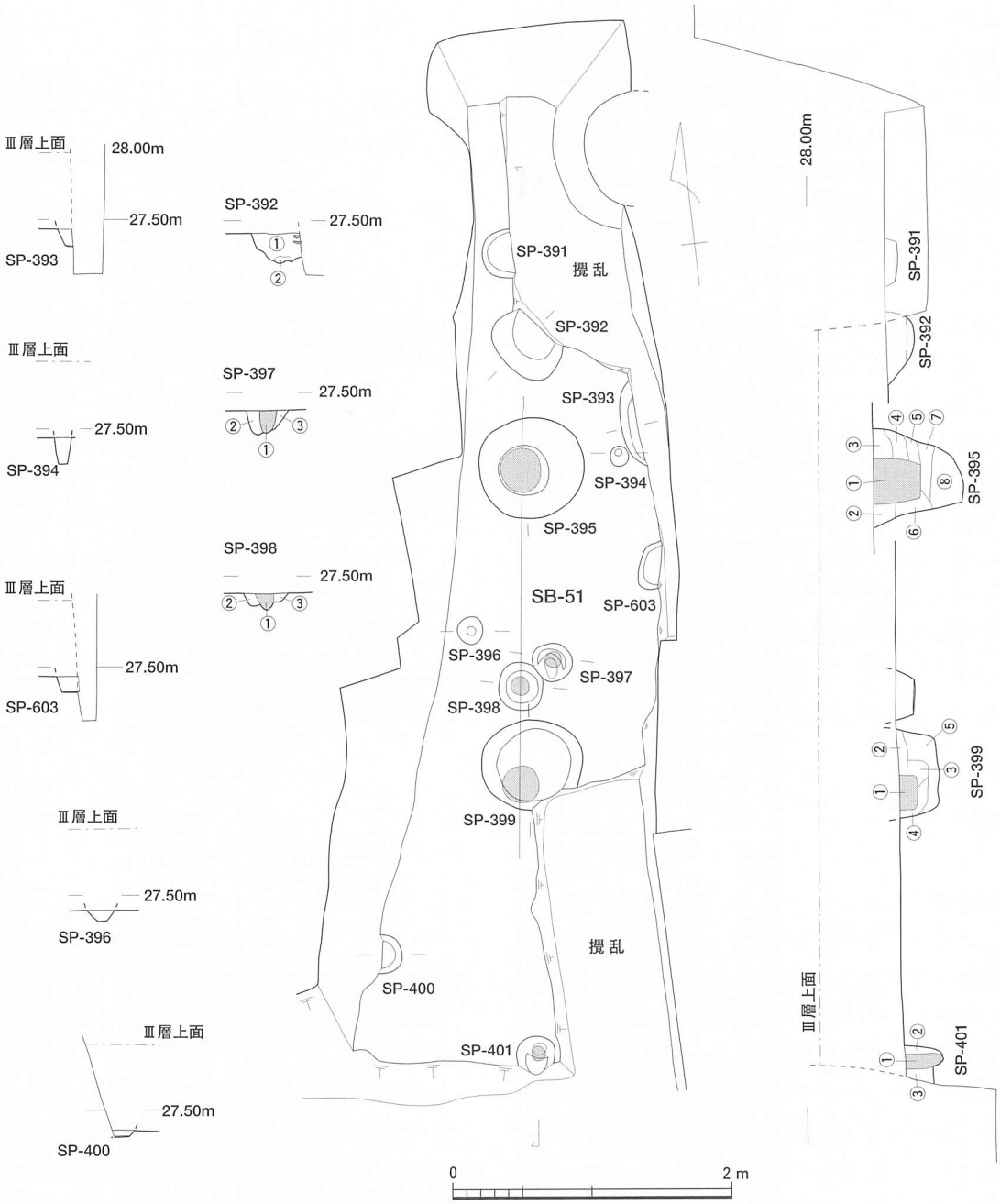


Fig. 35　SB-51遺構実測図（縮尺1/50）

立柱痕跡は南壁よりで確認され、径は25～27cmを測る。SP-399と比べて、掘り形は浅いが、立柱痕跡の底面の標高はほとんどかわらない。立柱痕跡である①層は、径2～3cmの角礫が少量混じる黒褐色砂質土で、径5cmの楕円形の褐色シルト塊がやや多く含まれる。掘り形底には、径1～2cmの楕円形の褐色シルト塊がやや多く混じる黒褐色砂質土の⑤層が詰め込まれている。③層は幅5cmほどの褐色砂質シルトのレンズ状ブロックがごく少量混じる黒褐色砂質土、④層は径1～5cmの輪郭がぼやけた楕円形のにぶい黄褐色シルト塊が多く混じる暗褐色砂質土である。③・④層は平面での広がりが不整な楕円形で、立柱の抜き跡の可能性もあり、その場合、柱がたて直されていることになる。②層は、暗褐色砂質土で、径3～5cmの楕円形のにぶい黄褐色砂質土塊がかなり多く混じる。

出土遺物は、SP-395の立柱痕内から甕口縁部破片と胴部小片2点、径2～3mmの粒状の炭化物片が少量出土した。掘り形埋土からは、弥生土器の壺の底部破

片（Fig. 36-２）、ジョッキ形土器の把手と考えられる破片（Fig. 36-１）、弥生土器の甕や壺の胴部細片～小片10数点、径１㎜ほどの粒状の炭化物片がごく少量出土。その他、弥生土器の胴部細片～小片３点がある。

SP-399でも、立柱痕跡の①層と③層から土器片が出土しているが、細片であり、時期は不明。②層には径５㎜の角張った炭化物片、⑤層には径１㎜の粒状の炭化物片がごく少量混じる。

以上、出土遺物は少なく、時期の明らかな土器も限られている。しかし、砂礫が目立たない埋土の特徴から、弥生時代中期～古墳時代中期と考えられる。しかも、柱穴のSP-395・399からは弥生土器しかない。とくに、SP-395から出土したジョッキ形土器は、弥生時代中期後葉～後期初頭にみられることが多く、壺は外底面がやや上げ底気味の安定した平底であることから、やはり弥生時代中期後葉～後期初頭に比定できる。SB-51は当該期の掘立柱建物である可能性が高い。

また、SB-51の柱穴の掘り形は直径は70㎝前後で、立柱痕跡の直径は25～30㎝を測る。13次調査区に限らず、文京遺跡で確認されている１×１間や１×２間の小型掘立柱建物や竪穴式住居跡の立柱痕跡が直径15～20㎝であるのに対して、約２倍の大きさである。しかし、３・７次調査区で確認されている大型掘立柱建物は、掘り形の大きさは共通するが、立柱痕跡の直径は30～40㎝で、今回出土したSB-51と比べてさらに一回り大きい。ほぼ同じ大きさの掘り形や立柱痕跡が確認されているのは、18次調査B区南端で出土したSB-740である。18次調査SB-740は、３×３間の掘立柱建物で、四隅の柱穴がほぼ同じ規模をもち、大型の高床倉庫と考えられる。今回出土したSB-51も、同様な掘立柱建物と考えられる。

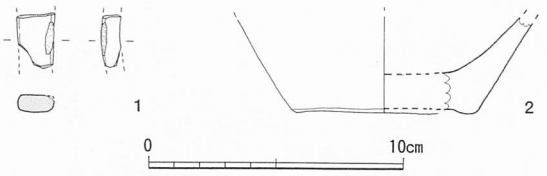


Fig. 36　SB-51柱穴SP-395出土遺物実測図（縮尺1/3）

（４）溝

SD-90号溝（Fig. 37）

DG-12区のSC-８の南側で出土した北東－南西方向に弧を描きながらのびる溝である（Fig. 37）。調査中にはSD-138としていたが、調査後に遺構番号をSD-90に振り替えた。SC-８を切り、SP-136・598に切られる。幅25～32㎝、深さ５～８㎝を測り、底面は凹凸があるが、断面の全体形はほぼ逆台形である。

埋土は暗褐色砂質土である。

埋土中からは、径２㎜の粒状、径５㎜の角張った炭化物片が少量出土したのみで、遺構の時期を決定できる遺物はない。

しかし、SD-90に切られるSC-８が弥生時代後期初頭に比定される。また、SD-90を切るSP-136は、砂礫が混じらない暗褐色砂質土で、弥生時代中期後葉～後期前葉の甕の胴部破片が出土している。こうした遺構の切り合い関係から、SD-90は弥生時代後期初頭～前葉の溝と判断した。

SD-91号溝（Fig. 14・38・39、Pl. 16）

DG-16区で検出した東西方向にのびる溝である（Fig. 14）。調査中にはSD-140としていたが、調査後に遺構番号をSD-91に振り替えた。幅57～60㎝を測り、深さは15～30㎝で、断面逆台形を呈する。西端の溝底で小さな小穴を検出した。

埋土は、全体としてはシルト質土である。⑨層は、溝底で確認した小穴状の窪みにつまった埋土で、やや粘性のある暗褐色砂質土で、径２㎝の輪郭がぼやけた楕円形のにぶい黄褐色シルト塊が少量混じる。その上面の溝底には⑥～⑧層が溜まる。⑥層は、径２～３㎜の角礫が混じる暗褐色砂質土で、径３㎝の楕円形のにぶい黄褐色シルトがごく少量含まれる。⑦層はにぶい黄褐色砂質シルト。⑧層は褐色シルトで、南半部には径１㎝の楕円形の暗褐色砂質土塊が少量混じり、北半部には径３～５㎝の楕円形の塊が多く混じる。

埋土中部～上部には①～⑤層が堆積する。①層は径３～５㎜の砂礫混じりの暗褐色砂質土。②層は暗褐色砂質土で、上部に径１～５㎝の拉げた楕円形のにぶい

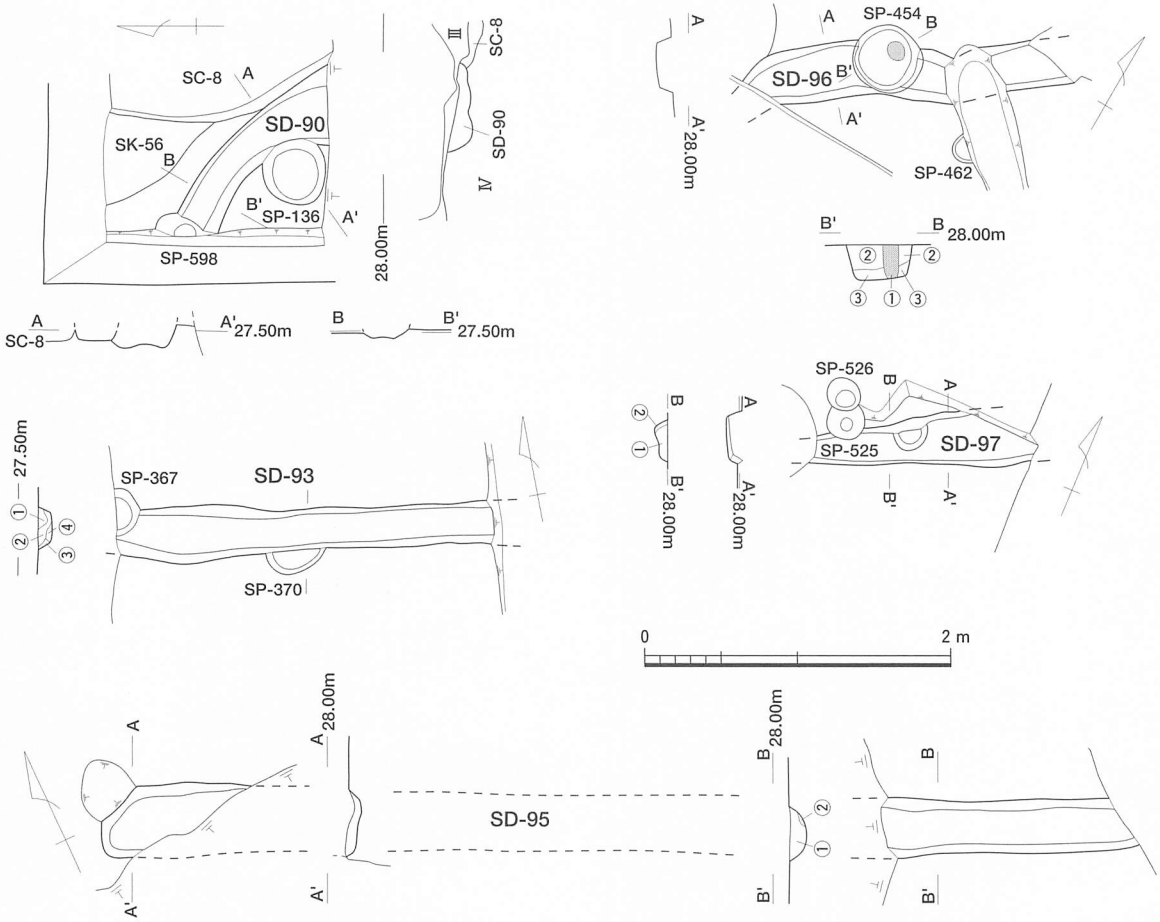


Fig. 37　SD-90・93・95・96・97遺構実測図（縮尺１/50）

黄褐色シルト塊が多く混じる。③層は褐色シルトで、径１～２cmの暗褐色砂質土塊が少量混じる。④層は径３～５mmの角礫が混じるにぶい黄褐色砂質土で、下部は暗褐色砂質土に変化する。また、幅１cmほどの褐色シルトのレンズ状ブロックがごく少量混じる。⑤層は暗褐色砂質土で、径１cmほどのにぶい黄褐色シルト塊が少量混じる。

埋土からは、弥生時代中期後葉～後期初頭の甕・壺・高坏の比較的大形の破片が出土している（Fig. 38-１～６）。この中で、１（Pl. 16-⑤）の壺は、SD-91上部のⅢ層部分から出土した破片と接合復元できた。口縁端上部に粘土を貼り付け拡張し、４条の凹線文を施す。頸の付け根には篦状工具で時計回りに螺旋状に短斜線文を巡らす。３は口縁端部を拡張して３条の波板状の凹線文を巡らす。膨らみのある肩部が一旦直線的にすぼまり、強く「く」字形に屈折させる口縁部につながる。他の土器も含めて、いずれも弥生時代中期後葉に比定できる。また、握り拳大の扁平な亜円礫の端部に敲打痕や擦痕が残る敲石（Fig. 39-１）と、径６cmの球状に近い砂岩の円礫が出土している。

以上の出土遺物から、SD-91は弥生時代中期後葉の溝と考えた。

SD-93号溝（Fig. 37・38）

DG-19区南端で出土した東西方向にのびる溝である。Ⅳ層上面で検出した（Fig. 37）。SP-367に切られ、SP-370を切る。調査中にはSD-319としていたが、調査後に遺構番号をSD-93に振り替えた。

幅26～36cm、深さ10cmほどで、断面は逆台形を呈する。埋土は、南側から、暗褐色砂質土の③層、厚さ１cmほどの褐色シルトのレンズ状ブロックがごく少量混じる暗褐色砂質土の④層が流れ込む。埋土上部は、にぶい黄褐色砂質土塊が混じるにぶい黄褐色砂質土の①層、径0.1～0.2cmの角礫が混じる暗褐色砂質土の②層が覆う。②層には径２cmの楕円形のにぶい黄褐色砂質シルト塊がごく少量含まれていた。

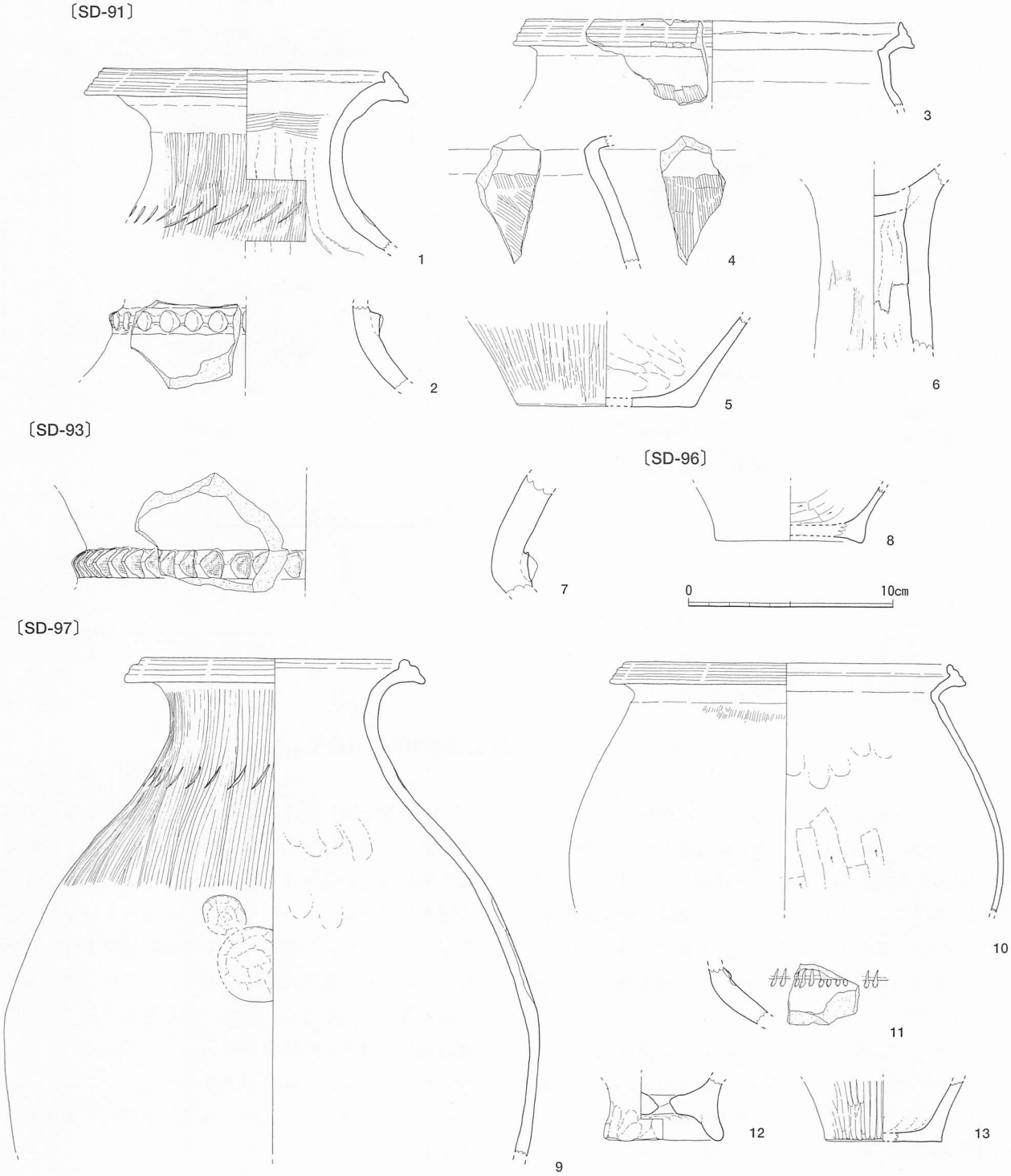


Fig. 38　SD-91・93・96・97出土遺物実測図（縮尺 1 / 3 ）

埋土中からは遺物は出土していない。SD-93上部のⅢ層最下部から、図示した弥生土器の大型壺の頸部破片（Fig. 38- 7 ）、壺や甕の胴部細片が50点ほどが出土している。7は頸部が「く」字形に屈曲して逆「ハ」字形に開く。頸部の付け根に太めの断面三角形突帯を貼り付け、平織りの布を巻いた棒状工具を押捺して刻目を施す。こうした特徴をもつ大型壺は、弥生時代でも後期初頭～前葉にみられるものである。最下部に堆積する埋土に砂礫が目立たないことと、Ⅲ層出土ではあるが7の大型壺の破片を参考資料として、SD-93は

弥生時代後期初頭～前葉の幅の中で捉えることができる。

SD-95号溝（Fig. 37・39）

調査区東半部のCX・CY-14区で出土した北西－南東方向にのびる溝である（Fig. 37）。調査中にはSD-424としていたが、調査後に遺構番号をSD-95に振り替えた。

攪乱壙を挟み、東端は調査区外にのび、6.8mほどを確認した。溝幅は36～50cm、深さ8～10cmで、断面形はU字形を呈し、溝底には凹凸がある。

埋土は暗褐色砂質土で、砂礫はほとんど目立たない。径1cmほどの楕円形の褐色シルト塊がごく少量混じり、溝底付近では、にぶい黄褐色シルトが塊で混じる。

埋土中から、弥生土器の胴部細片～小片3点、花崗岩の凹石の半折品（Fig. 39-2）が出土した。

出土した土器は細片化しているために時期は不明であるが、埋土に砂礫が目立たないことから、弥生時代中期後葉～後期に埋没する溝と考える。

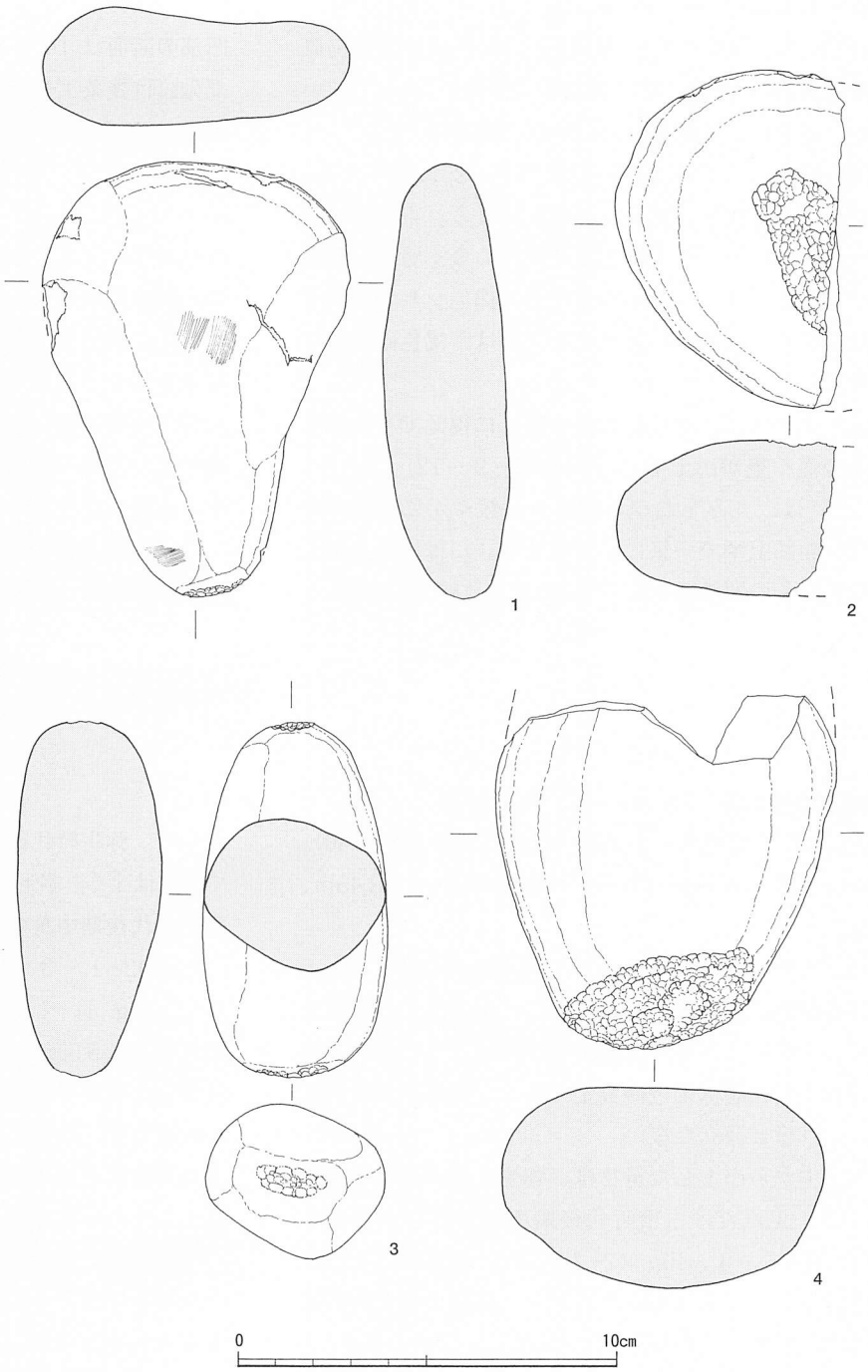


Fig. 39　SD-91・95・96・97出土遺物実測図（縮尺1/2）

SD-96号溝（Fig. 37～39）

調査区東端部のCX-13区に位置する（Fig. 37）。調査中にはSD-478としていたが、調査後に遺構番号をSD-96に振り替えた。SP-454に切られる。

幅27cm、深さ10cmを測り、断面は逆台形である。南端は攪乱で破壊され、東北側は調査区外にのびる。埋土は黒褐色砂質シルトである。

埋土中からは、弥生時代中期後葉～後期初頭の甕底部（Fig. 38-8）、弥生土器の胴部細片～小片10点前後、円柱状の円礫の両端に敲打痕が残る敲石（Fig. 39-3）が出土した。

出土土器と、SD-96を切るSP-454の埋土が黒褐色シルトおよび黒褐色砂質シルトであること、SD-96自体も埋土に砂礫が混じらないことから、弥生時代中期後葉～後期初頭の時期幅で捉えておきたい。

SD-97号溝（Fig. 37～39、Pl. 16）

調査区東端部のCX・CY-12・13区の境界部に位置する溝である（Fig. 37）。調査中にはSD-521としていたが、調査後に遺構番号をSD-97に振り替えた。

SB-45の柱穴であるSP-435、SP-525に切られる。幅19～35cmを測り、南西側が幅が狭まる。東北側は調査区外にのびる。埋土の大部分を占める①層は、暗褐色砂質土で、径１～２cmの楕円形の褐色シルト塊が少量含まれる。北側から流れ込む②層は暗褐色砂質土である。

埋土中からは、比較的大型の破片に復元できる弥生土器の壺や甕が出土した（Fig. 38-９～12）。９（Pl. 16-③）は、丸みをおびる胴部から緩やかに頸部が窄まり、頸部上半で一気に反転させる。口縁端部を肥厚させて２条の凹線文を巡らす。凹線文は幅が広く深い。凹部の断面は「U」字形で沈線に近い。頸部の付け根部分には篦条工具で短斜線文を施文する。また、胴部上半には径２cm、深さ２mmと、径3.7cm前後、深さ２～３mmのクレーター状に窪む円形の焼成破裂痕が残る。10（Pl. 16-④）の甕は、「く」字形口縁を持ち、口縁端部を上方に拡張し３条の凹線文を施す。凹線文の凹部の断面は「U」字形で、沈線に近い。SD-93と比べて、胴部上半が弱く膨らむ点が異なり、後出的な要素を持つ。これらを含めて、出土土器はいずれも弥生時代中期後葉～後期初頭に比定できる。この他、含礫砂岩の円礫の端部が敲打で潰れた敲石（Fig. 39-４）や、少量の径５mmの細長い炭化物片が出土している。

以上の出土土器から、SD-97は弥生時代中期後葉～後期初頭の溝と判断した。

（５）土壙

SK-29号土壙（Fig. 40～42、Pl. 10・18）

DA-12区に位置する長方形の土壙である（Fig. 40）。SD-３とSP-495に切られる。残存長0.95m、幅1.45m、深さ15cmを測る。

埋土上半部には暗褐色砂質土の①層が堆積する。下半部の②層は径２～３mmの礫がごく少量混じる黒褐色砂質土、③層は径３～５mmの角礫が混じるにぶい黄褐色砂質土、④層は褐色砂質土である。砂礫が含まれるが、それほど目立たない。

埋土中から出土した遺物は、弥生土器がほとんどであるが、１点だけ古墳時代後期の須恵器坏が混じる（Fig. 41-１～４、Fig. 42-１～３）。須恵器（４）は埋土でも最上面から出土しており、Ⅲ層の掘り残し部分の遺物と考えられる。

Fig. 41-１a・１b（Pl. 18-①・②）は接合できなかったが、同一個体の壺である。器壁が薄く層状に剥離した破片で、層状焼成破裂の好例である。頸部の付け根に低い幅広のベルト状の突帯を貼付し、刷毛目工具の小口部を上下２段に押捺して刻目を施す。口縁端面には、３条の沈線状の凹線文を施す。２（Pl. 18-⑥）は比較的大きな破片に接合復元できた甕である。胴部はあまり膨らまず、緩やかに反転して外反する口縁部がつく。弥生時代後期前葉に比定できる。これに対して、３は「く」字形口縁の甕で、口縁部が立ち上がり、弥生時代後期中葉のものである。

Fig. 42-１～３（Pl. 18-③～⑤）は、壺の胴部の破片で、Fig. 41-１と同一個体である可能性が高い。本来は径５～5.5cmの円形もしくは楕円形の胴部外面が剥離した破片である。剥離面の中央が厚い凸レンズ状の断面形で、残存した周縁は鋭く尖る。とくに、２・３は剥離面が器表面と同じ色調に焼き上がる。焼成破裂土器片の好例である。

土器以外には、径２～３mmの粒状、径５mmの角張った炭化物片がごく少量出土しているだけで、焼土や灰もみられなかった。

SK-29上部のⅢ層部分からは、古墳時代後期の遺物が出土している（Fig. 41-５～９）。５・６は須恵器の坏蓋、７は平瓶の口縁部、８は広口壺の口縁部、９は土師器の甕である。４とともにSK-29に伴う遺物ではない。

以上、出土遺物と埋土に砂礫が目立たないことから、SK-29は弥生時代後期前葉～中葉の時期幅の土壙と捉えておく。

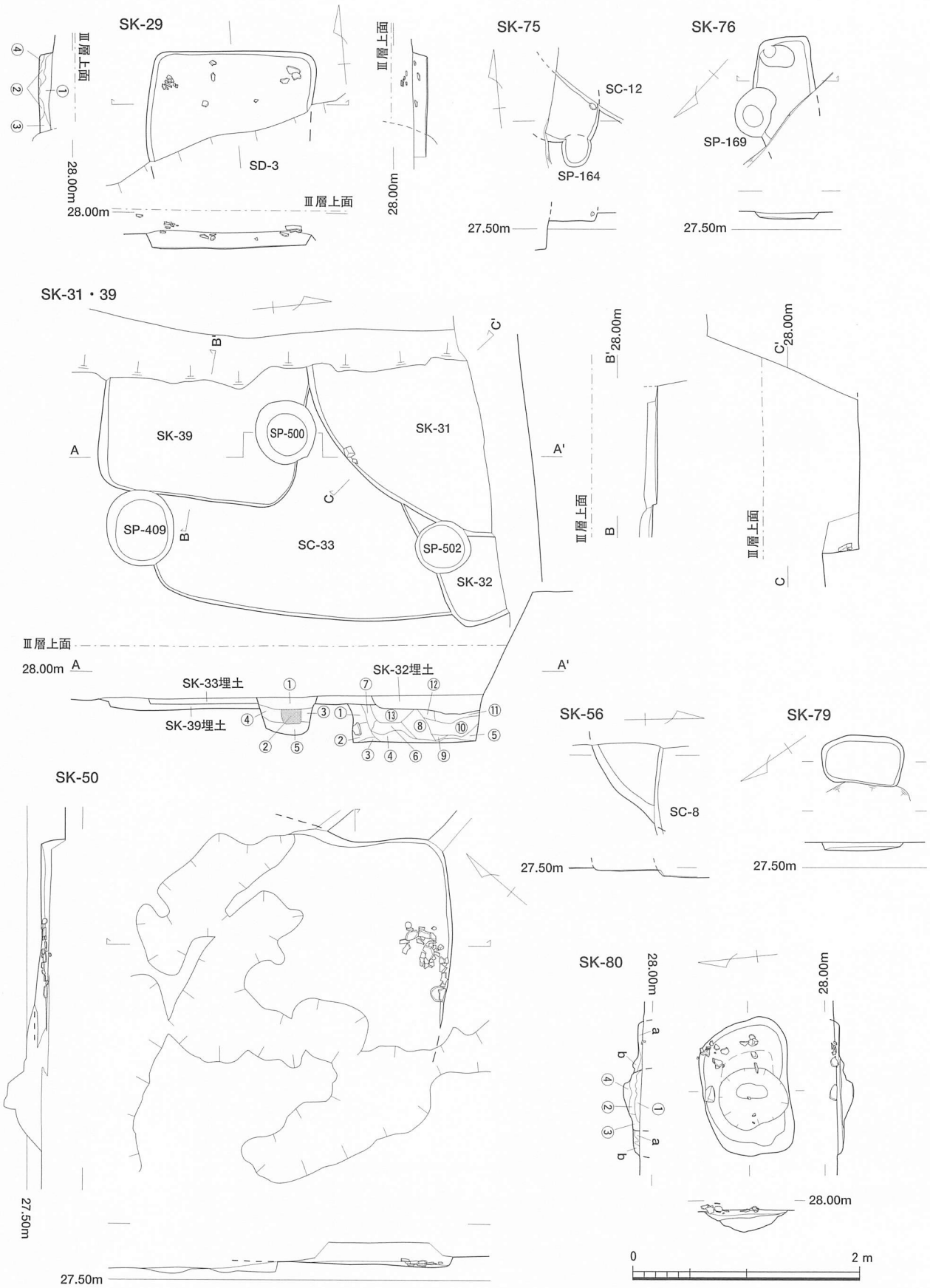


Fig. 40　SK-29・31・39・50・56・75・76・79・80遺構実測図（縮尺 1 /50）

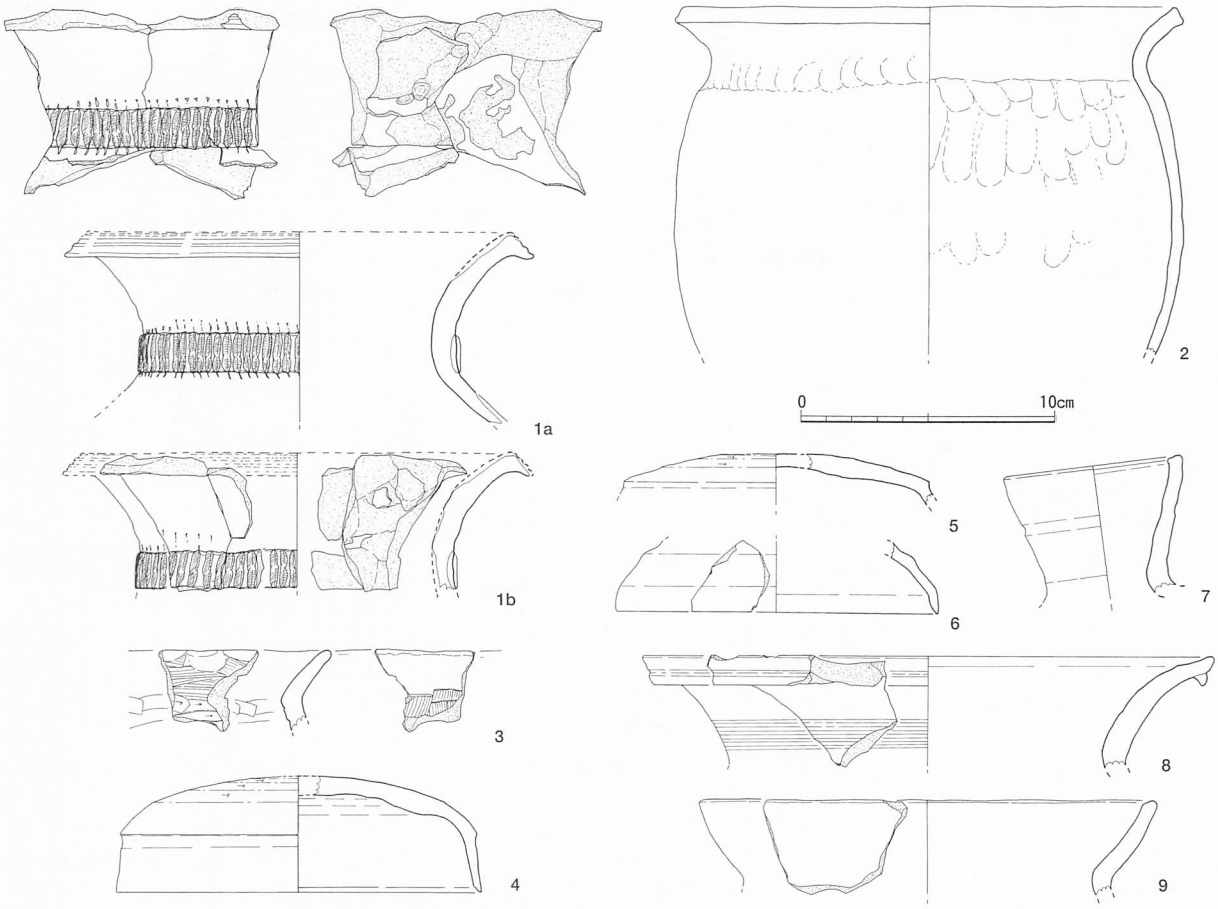


Fig. 41　SK-29埋土および上部Ⅲ層出土遺物実測図
（埋土：１～４、Ⅲ層部分：５～９、縮尺１/３）

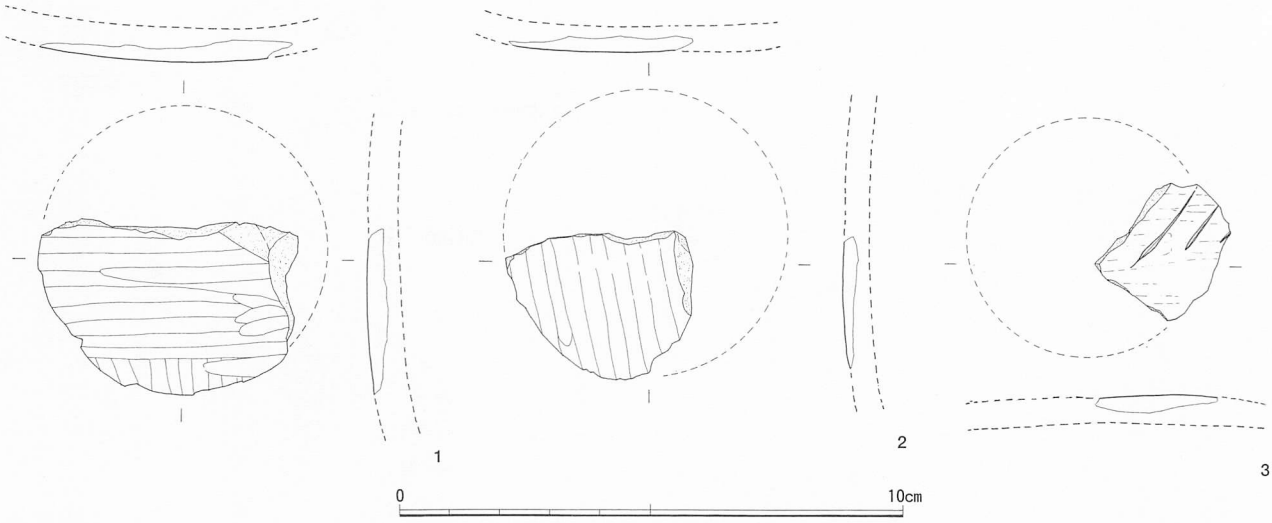


Fig. 42　SK-29埋土出土遺物実測図（縮尺２/３）

SK-31号土壙（Fig. 40・43・44、Pl. 6・24）

調査区北壁沿いのCZ・DA-14・15区に位置する楕円形の土壙である（Fig. 40）。SC-33、SK-32・39、SP-502に切られている。当初は、円形の竪穴式住居跡と考えたが、周辺で出土した竪穴式住居跡と比べて深

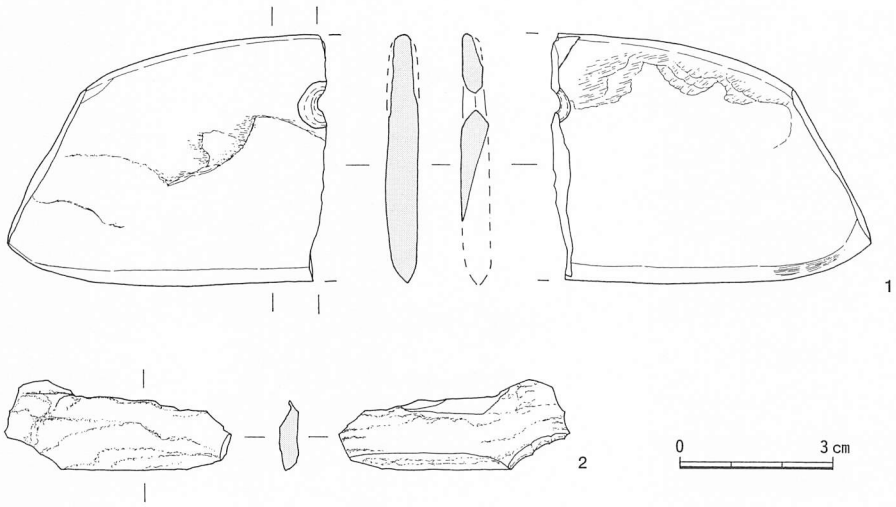


Fig. 43　SK-31出土遺物実測図１（縮尺２/３）

いこと、推定径が3.5～3.6mと小さいこと、床面で柱穴がみられないことから、楕円形の貯蔵穴と判断した。

埋土は、南壁沿いに流れ込んだ①～③層、その後に床面全体を覆う④層、人為的に埋め戻されたと考えられる⑤～⑬層に分層できる。

①層は黒褐色砂質シルトで、径２cmの輪郭がぼやけた楕円形の褐色シルト塊が多く混じる。②層は暗褐色砂質シルトで、径１cmまでの楕円形の褐色シルト塊が多くみられる。③層は褐色砂質シルトである。

④層は、黒褐色砂質シルトで、部分的にわずかに粘性がある。径0.5～１cmの楕円形の褐色シルト塊が多く混じる。

⑤層は黒褐色砂質シルト。わずかに粘性をおび、径５mmの楕円形の褐色シルト塊が少量混じる。⑥層は暗褐色砂質土。径１～４cmの楕円形の褐色シルト塊が多くみられる。⑦・⑫層は径２mmの礫がまばらに混じる暗褐色砂質土で、径１cmの輪郭がぼやけた楕円形の褐色シルト塊が少量含まれる。⑧層は暗褐色砂質土。径0.5～１cmの輪郭がぼやけた楕円形の褐色シルト塊が多く混じる。⑨層は褐色シルトで、径１cmの楕円形の黒褐色砂質土塊がごく少量含まれる。⑩層は黒褐色砂質シルトで、径１cmまでの大小の褐色シルト塊が多く混じる。⑪層は暗褐色砂質土と褐色シルトの混合土。⑬層はにぶい黄褐色砂質シルトで、径１～２cmの輪郭がぼやけた楕円形の褐色シルト塊が少量含まれる。

出土遺物は、⑥・⑬層から弥生土器が出土した。しかし、細片化した胴部破片ばかりである。他に、緑色片岩の直線刃外湾形の石庖丁（Fig. 43-１、Pl. 24-③）の半折品と石英粗面岩の砥石（Fig. 44）の破片が周壁に密着して出土している。１は側辺部が折れているが、

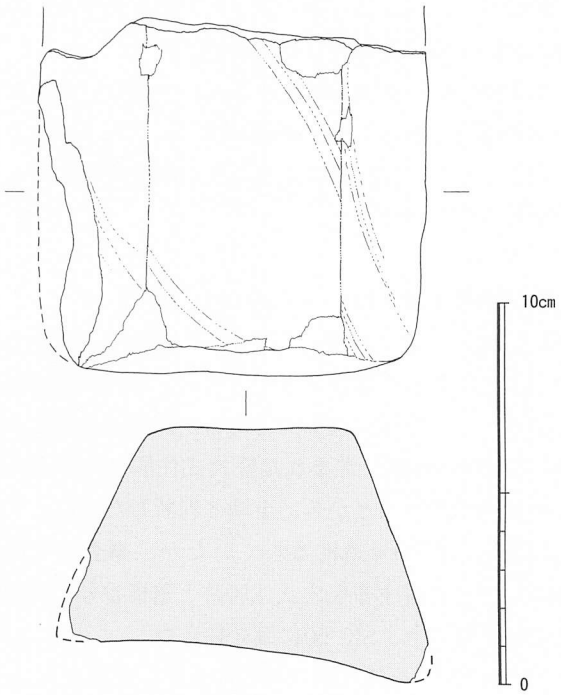


Fig. 44　SK-31出土遺物実測図２（縮尺１/２）

その後も使用され、破面の稜角は磨滅し光沢痕が観察できる。また、緑色片岩の小石片（Fig. 43-２）が遺構検出面から出土した。この他、⑧・⑩・⑬層には、径0.2～0.5cmの丸い炭化物片がごく少量ずつ含まれていた。

出土遺物からは、遺構の時期の決め手を欠くが、後述するように弥生時代中期後葉と考えられるSK-39に切られること、砂礫が目立たない埋土であること、周辺では中期前葉よりも古い遺構が発見されていないことから、SK-31は弥生時代中期中葉～後葉の時間幅の中で捉えることができる。

SK-39号土壙（Fig. 40・45、Pl. 6）

CZ・DA-14区に位置する隅丸長方形の土壙である（Fig. 40、Pl. 6－1）。SC-33、SK-31、SP-409・500に切られ、SK-31を切る。西側は攪乱壙で大きく削られている。残存長1.33m、幅1.8m、深さ10cm前後を測る。

埋土は、暗褐色砂質シルトで、径1～2cmの拉げたにぶい黄褐色シルト塊が含まれる。上部に営まれたSC-33と近似していたが、小礫が目立たないこと、埋土に混じる炭化物片の量で切り合いを判断した。

埋土の下・上部からは、遺物は出土していない。床面近くで採集した土壌を水洗中に、図示した弥生土器の甕の口縁部（Fig. 45－1）と、胴部の細片が出土したのみである。甕は、逆「L」字形に強く屈曲させた口縁部で、口縁端部を強い横ナデで摘み上げる。弥生時代中期後葉の特徴的な甕である。

出土遺物は弥生土器の細片1点にすぎないが、床面からの出土であること、砂礫がほとんど埋土に混じらないことから、SK-39は弥生時代中期後葉の土壙として捉えることができる。

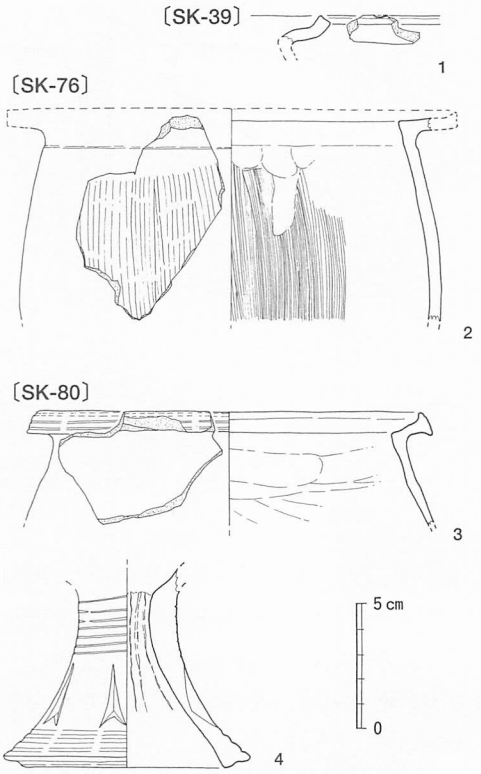


Fig. 45　SK-39・76・80出土遺物実測図（縮尺1/3）

SK-50号土壙（Fig. 40・46・47、Pl. 16）

CZ-11・12区境界部のSD-3の下底面で、隅丸方形の掘り形の隅部を確認できた。当初、竪穴式住居跡の可能性も考えたが、部分的であるが深さ20cmほどが残存し、SD-3北側に営まれた竪穴式住居跡の床面の高さと比べて深いことから、土壙と判断した（Fig. 40）。

調査時には40号遺構としていたが、調査終了後にDF-11区に位置する竪穴式住居跡と遺構番号が重複することに気づき、SK-50に振り替えた。

SD-3に大半を削り取られているが、南西側ではSD－3底面がやや高くなっていることから、一辺2m前後の規模を推定できる。周辺の竪穴式住居跡と比べて深く、底面が平坦であることから、貯蔵穴と考えた。

埋土は暗褐色シルトである。

底面近くまでSD－3の埋土である砂礫が混じり込む部分が多く、埋土最下部として取り上げた遺物にも、古墳時代後期の須恵器や土師器、古代末～中世の土師器碗や瓦器皿が混じる。埋土中から出土した遺物は、SD－3による削平と再堆積でかなり混乱していると考えられる。

しかし、東南壁際の床面に貼り付いた状態で、壺類の破片がかたまって出土した（Fig. 46－1～6）。出土状況から、これらがSK-50に確実に伴う遺物群である。1（Pl. 16-⑥）は、長頸壺の口頸部の破片で、口縁部に3条の沈線状の凹線文を巡らし、頸部の付け根に小さな断面三角形突帯を貼り付ける。2は浅い沈線文を8条以上巡らす頸部破片である。いずれも弥生時代後期初頭に比定できる。5・6は中型壺の底部破片で、そのいずれかに4の胴部破片や2が接合するものと考えられる。

また、埋土上面から両端に擦痕が残る緑色片岩の扁平な円礫を用いた磨石（Fig. 47－1）、埋土下部から緑色片岩の破片（Fig. 47－2）が出土している。2は、最大厚0.5cmほどで、直線刃の石庖丁の可能性があるが、両面とも研磨痕も残っておらず、石庖丁であっても未成品の破損品と考えられる。また、これらは確実にSK-50に伴う遺物であるかは確実でない。

確実にSK-50に伴う壺類は弥生時代後期初頭のものであり、当該期の貯蔵穴と考えてよい。

SK-56号土壙（Fig. 40）

DG-12区、SC－8の南側で確認した（Fig. 40）。SC－8に切られる。平面形が弧を描くことから、円形

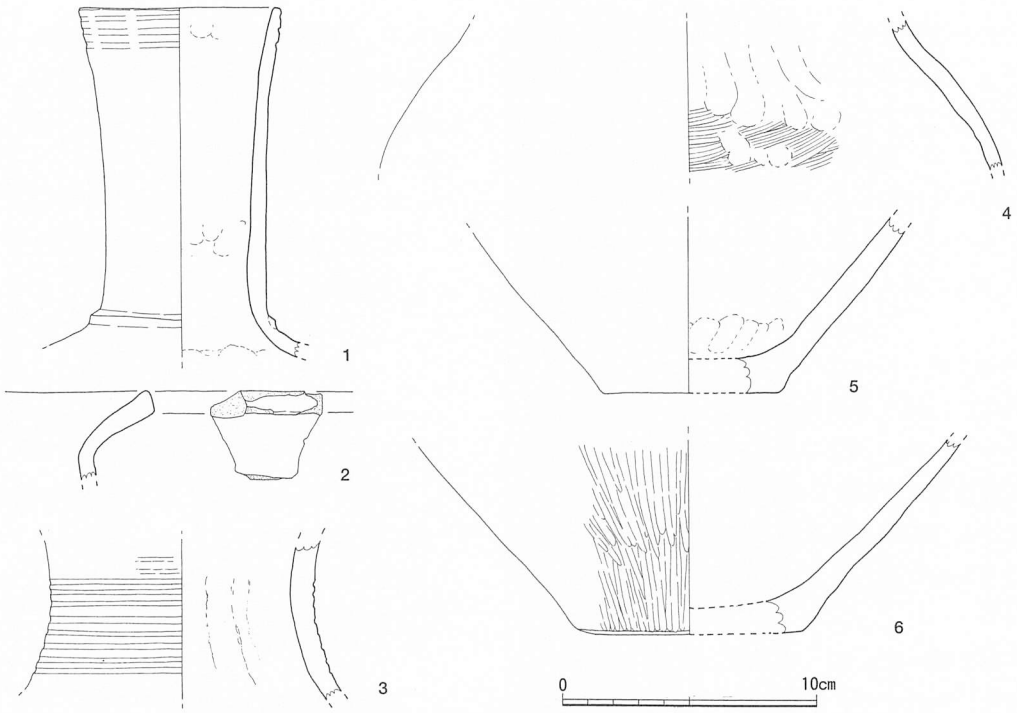


Fig. 46　SK-50南東壁際床面出土遺物実測図（縮尺1/3）

の竪穴式住居跡とも考えたが、床面の高さがあまりかわらないSC-8部分で柱穴などが確認できなかったため、比較的大型の円形土壙と考えた。

埋土は暗褐色砂質土である。遺物は出土していないが、SK-56を切るSC-8が弥生時代後期初頭の竪穴式住居跡であり、SK-56は弥生時代中期後葉の土壙と考える。

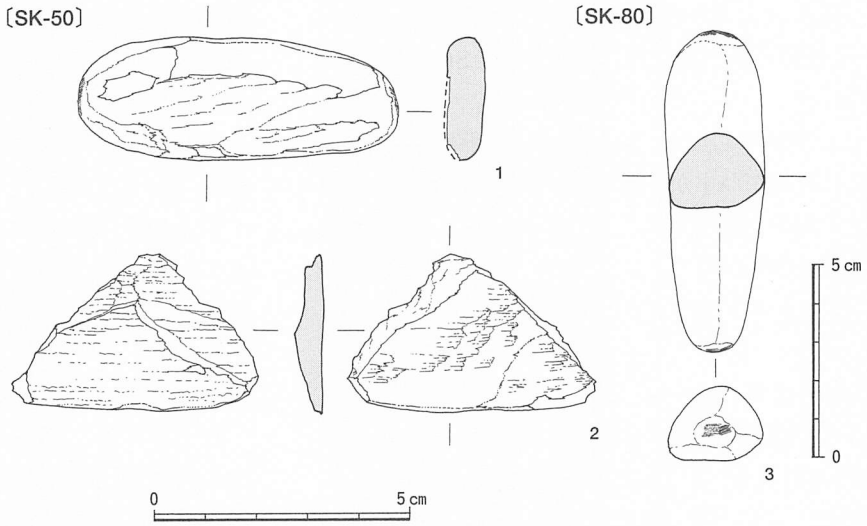


Fig. 47　SK-50・80出土遺物実測図（縮尺2/3・1/2）

SK-75号土壙（Fig. 40）

DF-15区南端に位置する不整な楕円形の小型土壙である（Fig. 40）。当初、SK-163の遺構番号を付与していたが、調査後にSK-75に振り替えた。SC-12に切られ、先後関係は不明であるがSP-164と切り合う。西半部も管路によって破壊され、平面形は不明である。

埋土は暗褐色砂質シルトである。埋土中から弥生土器の胴部細片1点が出土したのみである。

古墳時代後期のSC-12に切られ、砂礫が混じらない埋土の特徴から、SK-75は弥生時代中期～古墳時代前期の時間幅の中で捉えることしかできない。

SK-76号土壙（Fig. 40・45）

DF-14区に位置し、西端部分は管路で破壊されている。SP-169に切られる。残存長90cm、幅54cm、深さ

5～8cmのやや胴が張る長方形の小型土壙である(Fig. 40)。調査中にはSK-170としていたが、調査後にSK-76に振り替えた。

底面にはかなり凹凸があり、埋土は暗褐色砂質シルトで、小さな黄褐色砂質シルト塊がごく少量混じる。

埋土中からは、甕の胴部破片が出土しただけである(Fig. 45-2)。逆「L」字形に強く屈折した口縁部をもつ。弥生時代中期後葉に比定できる。SK-76上部のⅢ層部分からは、甕の胴部破片2点、小型壺の肩部破片1点、胴部の細片～小片が10点ほどが出土したが、いずれも弥生土器である。

埋土中から出土した甕と、砂礫がほとんど混じらない埋土の特徴から、SK-76は弥生時代中期後葉の土壙と考える。

SK-79号土壙(Fig. 40)

DC-14区に位置する隅丸長方形の浅いⅢ状の小型土壙である(Fig. 40)。調査中にはSK-222としていたが、調査後に遺構番号をSK-79に振り替えた。

西側を攪乱で破壊されるが、長さ72cm、推定最大幅47cm、深さ8cmを測る。

埋土は、暗褐色砂質土で、径1cmの楕円形のにぶい黄褐色シルト塊がごく少量混じる。

遺物はまったく出土していない。しかし、埋土に砂礫が混じらないことから、弥生時代中期～古墳時代前期の土壙として捉えておく。

SK-80号土壙(Fig. 40・45・47、PL. 6-3)

CZ-14区に位置する。Ⅲ層の下部で遺物が出土し始めたので、精査したところ、東西長122cm、南北幅75cm、深さ5cmを測る不整な隅丸長方形の土壙を検出できた(Fig. 40)。SP-336に切られる。調査中にはSK-337としていたが、調査後に遺構番号をSK-80に振り替えた。

埋土上半部のa層は、きめが細かい明黄褐色砂質シルトで、砂礫がわずかに混じる。径5mmの粒状の黄橙色シルト塊が少量混じる。下半部のb層は、褐色砂質シルトで、小礫がわずかに混じる。a層と同じく、粒状の黄橙色シルト塊が点々と混じる。

遺物は検出面および埋土中から弥生土器が出土した(Fig. 45-3・4)。3は、口縁部を上下に拡張して凹線文を巡らす甕である。4は、高坏の脚部破片で、脚柱部に沈線文を螺旋状に巡らし、脚裾に沈線状の凹線文を施す。その間に未貫通の矢羽透孔を施す。ともに弥生時代中期後葉に比定できる。他に、径1.9×2.5cmを測る棒状の花崗岩円礫の両端に擦痕が残る磨石(Fig. 47-3)がある。

以上の出土遺物と、古墳時代後期のSP-336に切られていること、砂礫が目立たない埋土の特徴から、SK-80は弥生時代中期後葉の土壙と考える。

SK-83号土壙(Fig. 14、Pl. 1)

DG-17・18区に位置する浅い鍋底状の小型土壙である(Fig. 14、Pl. 1-2)。SD-94に切られる。調査中にはSK-364としていたが、調査後にSK-83に振り替えた。

埋土は、暗褐色砂質土で、径5～6cmの拉げた細長い楕円形のにぶい黄褐色シルト塊がごく少量混じる。

埋土からは、径0.2～0.3cmの粒状の炭化物片がごく少量出土したのみで、他に出土遺物はない。

古墳時代後期と考えられるSD-94に切られ、埋土に砂礫が混じらないので、弥生時代中期～古墳時代前期の時間幅の中で、SK-83の時期をおさえておく。

SK-84号土壙(Fig. 14、Pl. 1)

DG-18区で、SC-7北壁近くで検出した(Fig. 14、Pl. 1-2)。調査中にはSK-366としていたが、調査後に遺構番号をSK-84に振り替えた。

大部分が調査区外にのびるが、幅50cmほどの東西に長い隅丸長方形の小型土壙と考えられる。深さは9cmほどで、中央がさらに2～4cm深くなる。

埋土は、暗褐色砂質土で、幅0.5cmほどの褐色シルトのレンズ状ブロックがごく少量混じる。砂礫は混じらない。

埋土中から、弥生土器の甕の胴部細片1点が出土したにすぎない。しかし、砂礫が混じらない暗褐色砂質土を埋土としていることから、SK-84は弥生時代中期～後期の土壙と考えた。

SK-85号土壙（Fig. 112）

調査区東端のほぼ中央のCX・CY-14区に位置する円形の土壙である（Fig. 112）。SD-95とSB-54の柱穴であるSP-423に切られる。推定径1.05～1.1m、深さ7㎝を測る。調査中にはSK-422としていたが、調査後にSK-85に振り替えた。

埋土①層は、黒褐色砂質土で、褐色シルトが径3㎜ほどの小塊で少量混じる。②層は、暗褐色砂質土で、径1～2㎝の楕円形の褐色シルト塊が少量混じる。③層は、暗褐色砂質土。径3㎝ほどの輪郭がぼやけた楕円形の褐色シルト塊が多く混じる。④層は褐色シルト。⑤層はSD-95の埋土部分である。

遺物は出土していない。しかし、古墳時代後期と考えられるSD-95やSB-54の柱穴SP-423に切られること、埋土に砂礫が含まれるが少量であることから、SK-85は弥生時代中期～古墳時代前期の時間幅の中で捉えることができる。

（6）その他の遺構－土器溜り

SX-48号遺構（Fig. 48～51、Pl. 12・16）

DF・DG-18・19区の境界部では、Ⅲ層を掘り下げ中に、その中位～下部で比較的大型の破片を含む弥生土器が集中して出土し始めた。しかし、Ⅲ層を掘り上げ中やⅣ層上面で、これらに伴う遺構の輪郭を平面的に確認できなかった（Fig. 48、Pl. 12-3）。

そこで、Ⅳ層上面で検出したSP-107～109・367～373の中で、(a)SP-107・368を柱穴とする2本柱構造の竪穴式住居跡や、(b)SP-107・109・367などからなる4本柱構造の竪穴式住居跡を想定してみた。しかし、各小穴では立柱痕が認められず、(a)の場合、柱間隔が2mほどで、周辺での既往調査の成果から一辺3～4mの規模の竪穴式住居跡が想定されるが、遺物の分布範囲はそれ以上に広がる。(b)の場合も、南西隅の柱穴が検出されていないことや、柱間隔が狭すぎる。さらに、東側の共同溝の余掘り壁の土層観察でも遺構と考えられる落ち込みは確認できていない。竪穴式住居跡とするには無理がある。

遺物の接合関係をみると、Fig. 49-1の大型壺はDG-19-2区とDF-18-25区で出土した破片が接合する。2の壺もDG-18-11・16・20～22やDG-19-2区、3もDG-18-16～18・21・22やDG-19-2区、13の甕はDG-18-16区とDG-18-17区、Fig. 50-10の底部はDG-18-16区とDG-18-21区で出土した破片が接合する。一定の範囲の中で接合関係がみられる。そこで、DF・DG-18・19区境界部のⅢ層中位～下部から集中して出土した弥生土器群をSX-48として報告する。

出土した弥生土器には、壺・甕・高坏・脚台付き鉢坏がある（Fig. 49・50）。

壺には、口頸部がラッパ状に広がる広口壺（Fig. 49-1・2・5・6）、頸部が筒状で口縁部が強く外反する壺（Fig. 49-3）、複合口縁壺（Fig. 49-4）がある。

1・2・7は大型壺。1は口縁端部に粘土を貼り付け拡張し、上下2段に分けて凹線文を巡らす。上段の2条は、波板状で1条ずつ施される。下段にはまず浅めに1条を施し、その下に深めの1条を追加する。2は、口縁端部に幅狭の粘土板を貼り付けて拡張する。口縁端面に箆状工具で斜格子文を施文する。頸部に低い幅広のベルト状の突帯を貼り付け、平織りの布を巻いた箆状工具で刻目を施す（Pl. 16-⑧）。頸胴部境付近の破片である7も、大型の広口壺と考えられる。幅が広く低い粘土帯を貼り付け、粘土帯の上下から刷毛目工具の小口を押し当て刻目をつける。刻目のサイズや形状から、刷毛目工具の幅は約2㎝程度、厚さ4㎜と考えられる。これらに対して、5・6は小型壺である。5（Pl. 16-⑦）は頸部との境には緩やかな段がつく。口縁端面を上下に拡張して、2条一単位の凹線文を4条施す。凹線文の凹部断面は「U」字形で幅が狭く沈線に近い。6は、口縁端部の内外面を強く横ナデし、端面を上下に拡張した後に、2条の沈線文を施文する。また、4は複合口縁壺と考えたが、口縁端部の拡張が大きく、器台である可能性もある。

甕には、口縁部を比較的強く屈曲させ、口縁端部を跳ね上げ、口縁屈曲部の内側に小さな段状の沈線が1条巡る甕がある（Fig. 49-8・9）。また、口縁部を横ナデ調整で跳ね上げる「く」字形口縁の甕（Fig. 49-10）、口縁部の屈曲が弱めの「く」字形口縁をもつ甕（Fig. 49-11～14）、口縁端部を上下に拡張して凹線文を施す甕（Fig. 49-15・16）がある。その中で、

9（Pl. 16-⑨）は、口縁端面をナデで上方に拡張し、2条の凹線文を一気に巡らす。凹線文は、凹部の断面が「コ」字形で沈線に近く、浅く幅が広い。10は、他の甕と比べて器壁がとくに薄いことが特徴である。11と比べて、12・13は、胴部があまり膨らまず、口縁部は緩やかに外反させる。14は大型甕で、口縁屈曲部に低い断面蒲鉾形の突帯を貼り付け、平織り布を巻きつけた指頭で摘むように刻目をつける。15は口縁端部を上方に拡張して、3条の沈線状の凹線文を巡らす。16も、口縁端部を上下に拡張して、波板状の凹線文を施す。

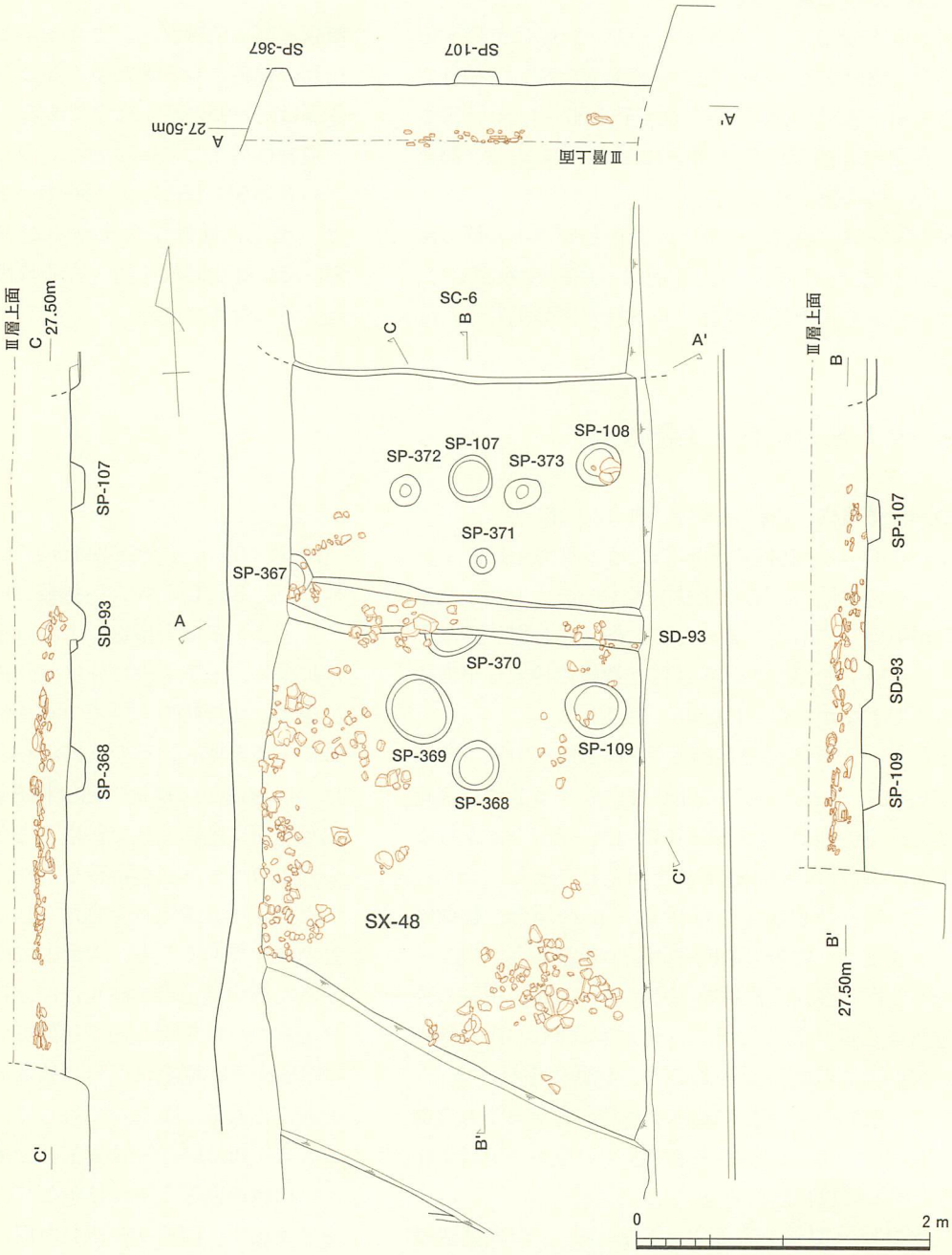


Fig. 48　SX-48遺構実測図（縮尺1/50）

高坏は坏部と脚部の破片が出土した（Fig. 49-17・18）。17は、坏部上半の湾曲部分から口縁部かけて、5条の沈線状の凹線文を施す（Pl. 16-⑩）。18は、脚部中位に5条の細く鋭い沈線文を巡らし、脚裾部に凹部が「U」字形で幅広の3条の凹線文を施す。その間に、篦状工具で山形文を施文する。しかし、山形文とは言え、矢羽根透孔を意識したものと考えられる。山形文の間隔や形状はバラバラで乱雑である。脚部端面には断面が「U」字形で、幅広く浅い凹線文を1条巡らす。

19（Pl. 16-⑪）は大形の脚台付き鉢と考える。外面には、浅い沈線が数条観察できる。部分的に山形文にみえるものがあり、18の高坏脚部にみられた矢羽根透孔を意識した文様とも考えられる。脚端面には、幅や深さが一定しない沈線が4条施文される。

この他、壺（Fig. 50-1～7）、甕（Fig. 50-9～13）、ミニチュア土器（Fig. 50-8）の底部がある。壺の底部の成形をみると、円盤状の粘土の側面に粘土帯を貼

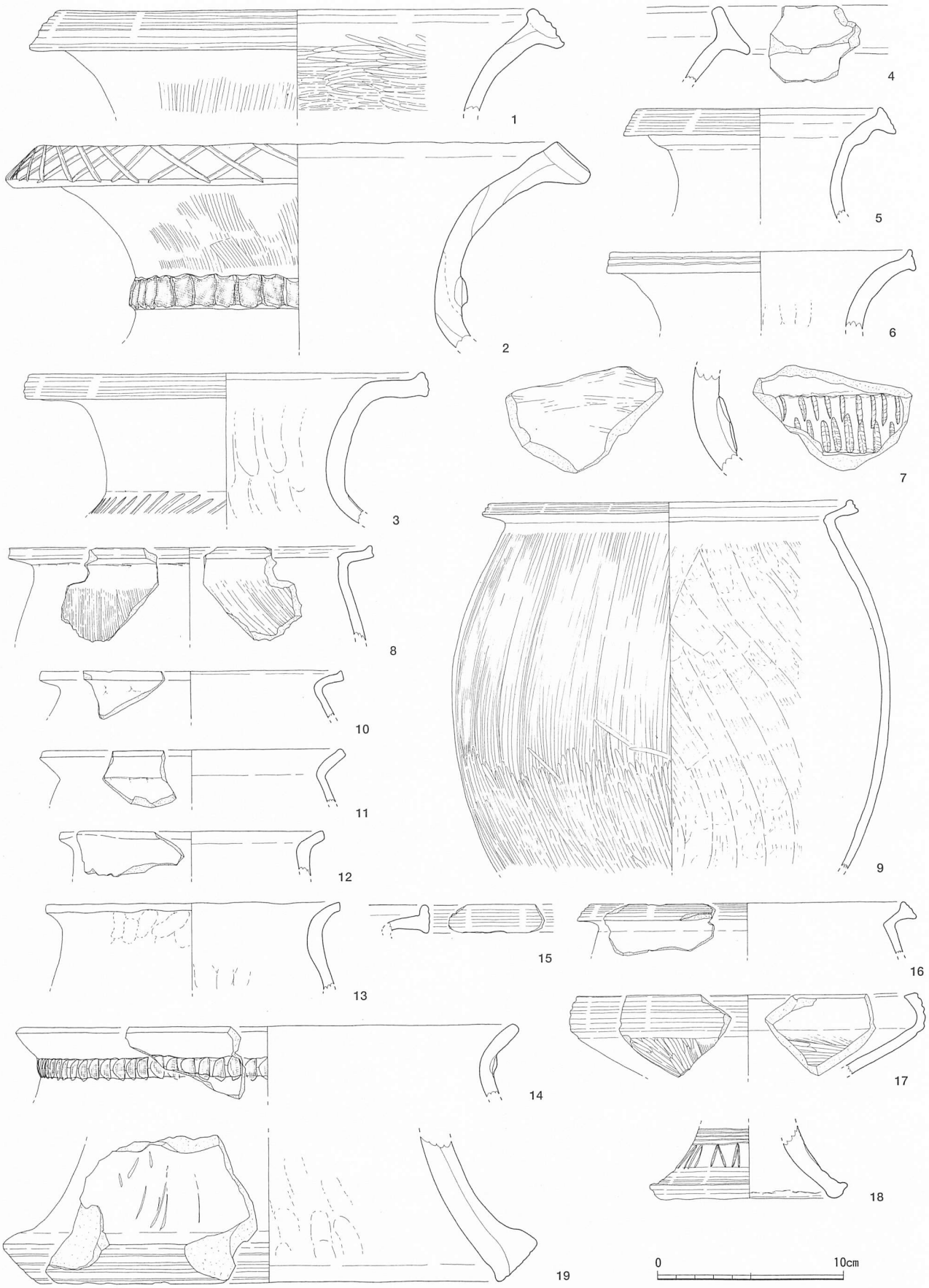


Fig. 49　SX-48出土遺物実測図１（縮尺１/３）

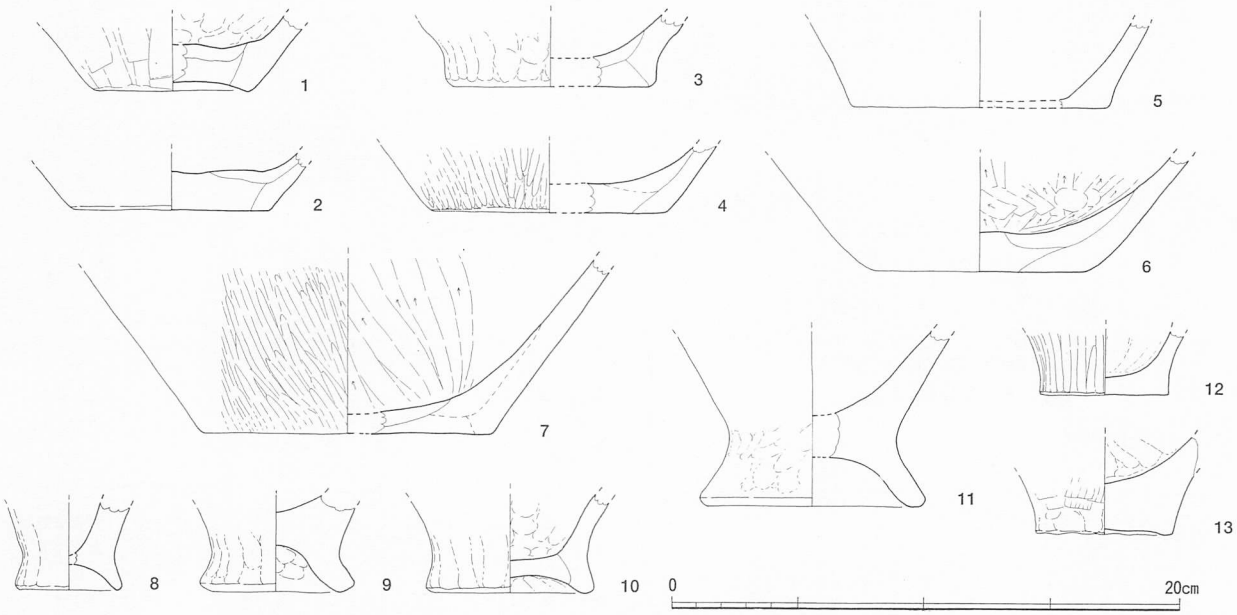


Fig. 50　SX-48出土遺物実測図２（縮尺１/３）

り付け、その接合部分にさらに粘土を追加する。７では、内底面の中央にさらに粘土が追加されている。８は、深鉢形のミニチュア土器。甕の底部には、上げ底（９～11）と、平底（12・13）のものがある。前者の上げ底の底部には、底部の裾が「ハ」字形にひらくもの（９・11）が含まれる。

以上の弥生土器に混じり、サヌカイト製の打製石鏃、緑色片岩の石片、敲石が出土している（Fig. 51-１～３）。１（Pl. 23-⑪）は、サヌカイト製の打製石鏃で、基部が破損している。２は両面ともに剥離面を残す緑色片岩の石片である。長さ9.2㎝、幅4.2㎝、厚さ0.8㎝を測り、石庖丁などの石器の製作時に生じる石片の可能性が考えられる。３（Pl. 26-②）は、砂岩の円礫を用いた敲石で、一端に敲打痕が残り、もう一端には擦痕が観察できる。

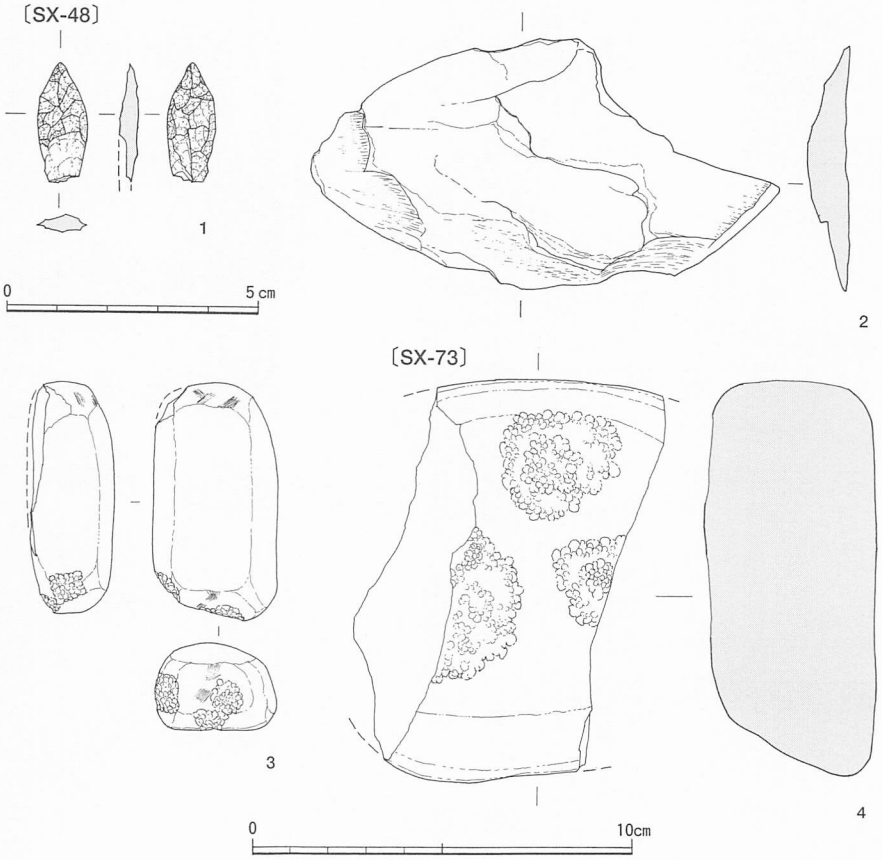


Fig. 51　SX-48・73出土遺物実測図（縮尺 2/3・1/2）

以上、SX-48の遺物の中で、Fig. 49-３・４・11～

14は弥生時代後期前葉～中葉、他は中期後葉～後期初頭の時期幅で捉えることができる。

SX-73号遺構（Fig. 14・51～55、Pl. 12・13・16・17）

DG-16区北端部では、大型の土器片が折り重なった状況で、Ⅲ層中部から出土し始めた（Fig. 14、Pl. 12-３、13-１・２）南北１m、東西1.4m＋αの範囲に集中し、何らかの遺構内に一括して廃棄されたものと考えられる。しかし、Ⅲ層を掘り下げた後、Ⅳ層上面で遺構検出を試みたが、何らの遺構の輪郭も確認できなかった。また、調査区西壁にも土器が食い込んでいるので、調査区壁も精査したが、遺構の断面も確実にできなかった。ここではSX-73として報告する。

SX-73の出土遺物は、ほとんどが弥生土器である。壺・甕・高坏がある（Fig. 52～55）。

壺には、口頸部がラッパ状に大きくひらく大型壺（Fig. 53-１）、胴部から頸部が次第に窄まり頸部中位が緩やかに外反して口縁部につながる壺（Fig. 52-１～３）、頸部が短く口縁部が緩やかに屈曲する壺（Fig. 52-４）、撫で肩の胴部上半から口縁部がつく無頸の壺（Fig. 54-1）がある。Fig. 54-２の壺の胴部には、後二者の口縁部がつくと考えられる。

Fig. 53-１（Pl. 17-③）は、胴部の成形にあたって、粘土帯の積み上げを中断するごとに、工具や方向を変えながら調整を施す。内面でも下半部にはケズリを施し、中位以上は刷毛目で調整する。外面は、刷毛目調整を施しているが、仕上げ段階で肩部、そして胴部中位以下を一気にミガキ仕上げする。その後、口頸部がつけられることが、肩部内面の刷毛目がナデ消されることから推測できる。

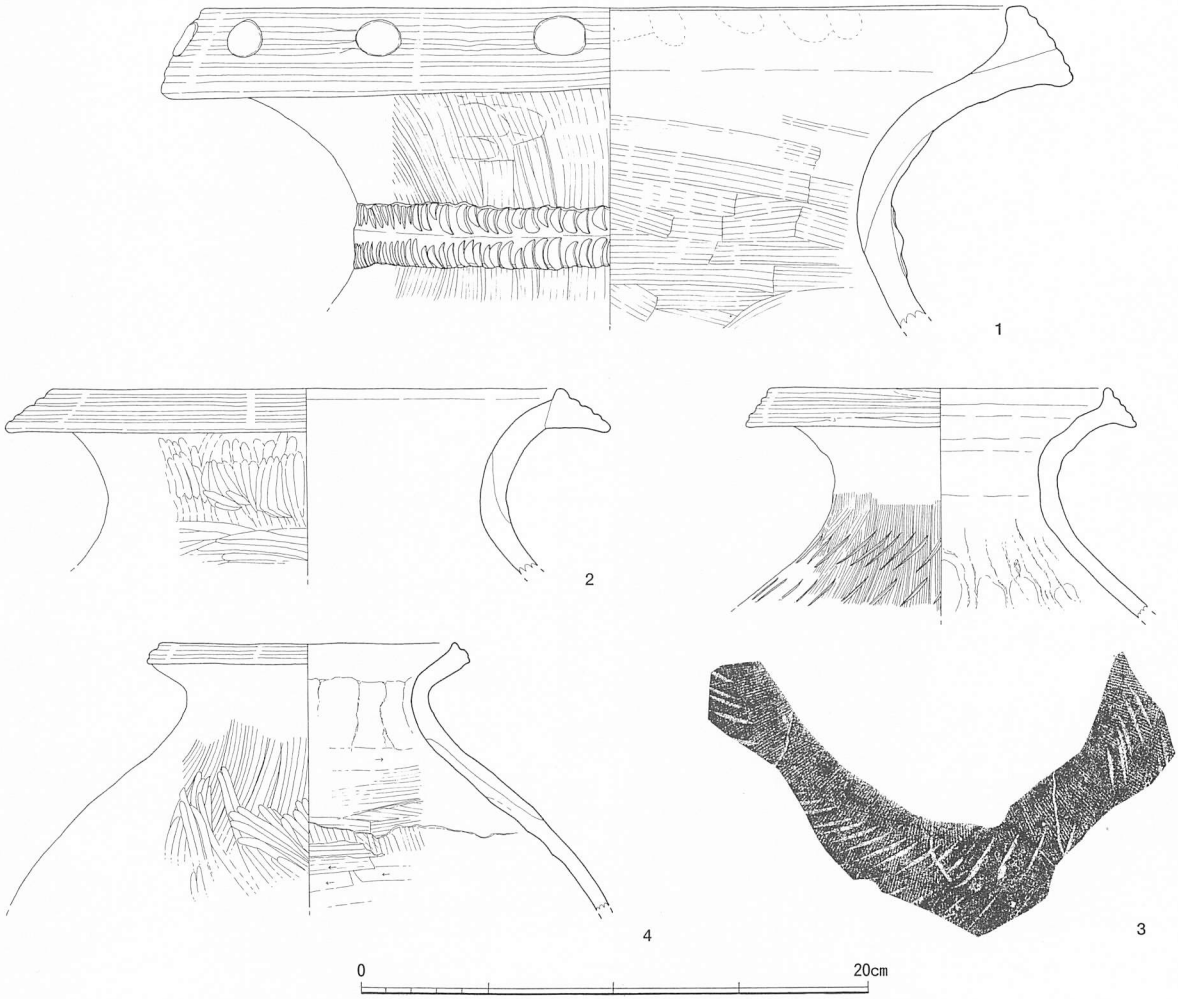


Fig. 52　SX-73出土遺物実測図１（縮尺１/３）

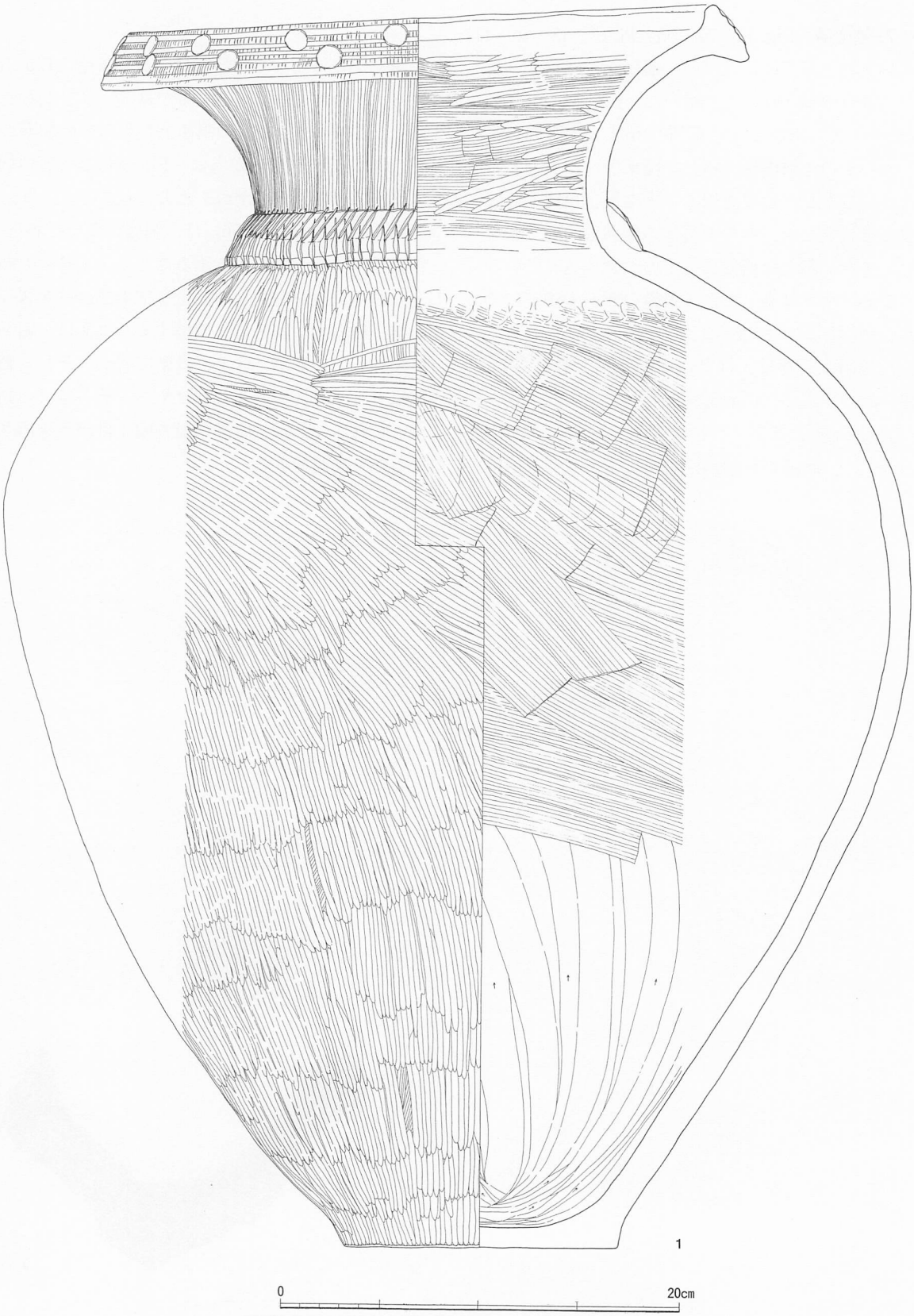


Fig. 53　SX-73出土遺物実測図２（縮尺１/３）

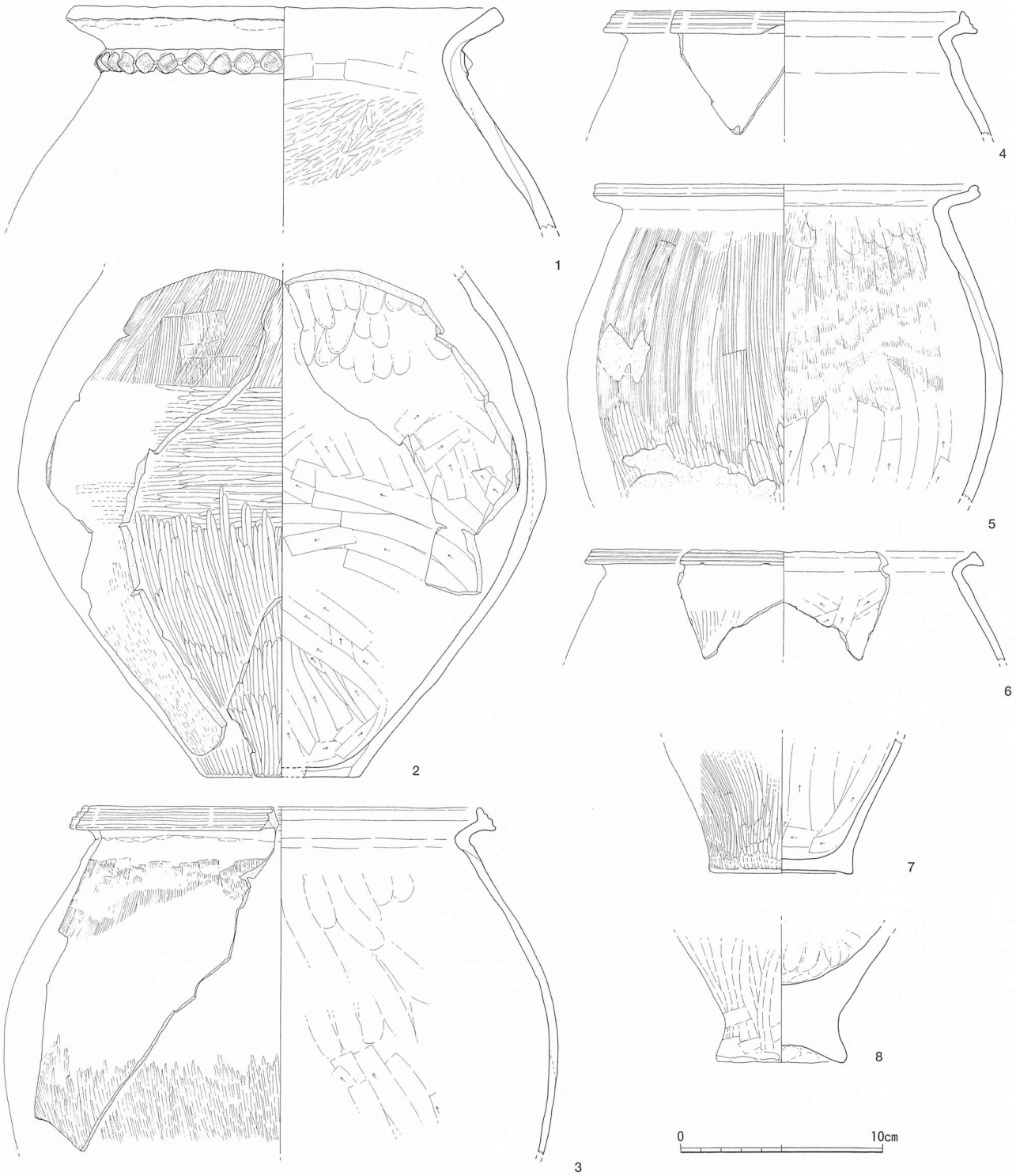


Fig. 54　SX-73出土遺物実測図３（縮尺１/３）

頸部付け根には、幅が広くベルト状の突帯が貼り付けられ、上方に向けて跳ね上げるように篦状工具を動かし、上下２段の斜交する刻目をつける。刻目を施文した後、突帯の下端部を篦状工具でナデつける。

口縁部は、端部を肥厚させて、口縁端面の上下を指で摘むように横ナデする。口縁端面には、１条ずつ５条の凹線文を巡らす。凹線文は、凹部断面が「U」字形で沈線に近い。その上に、竹串状の工具で縦方向の

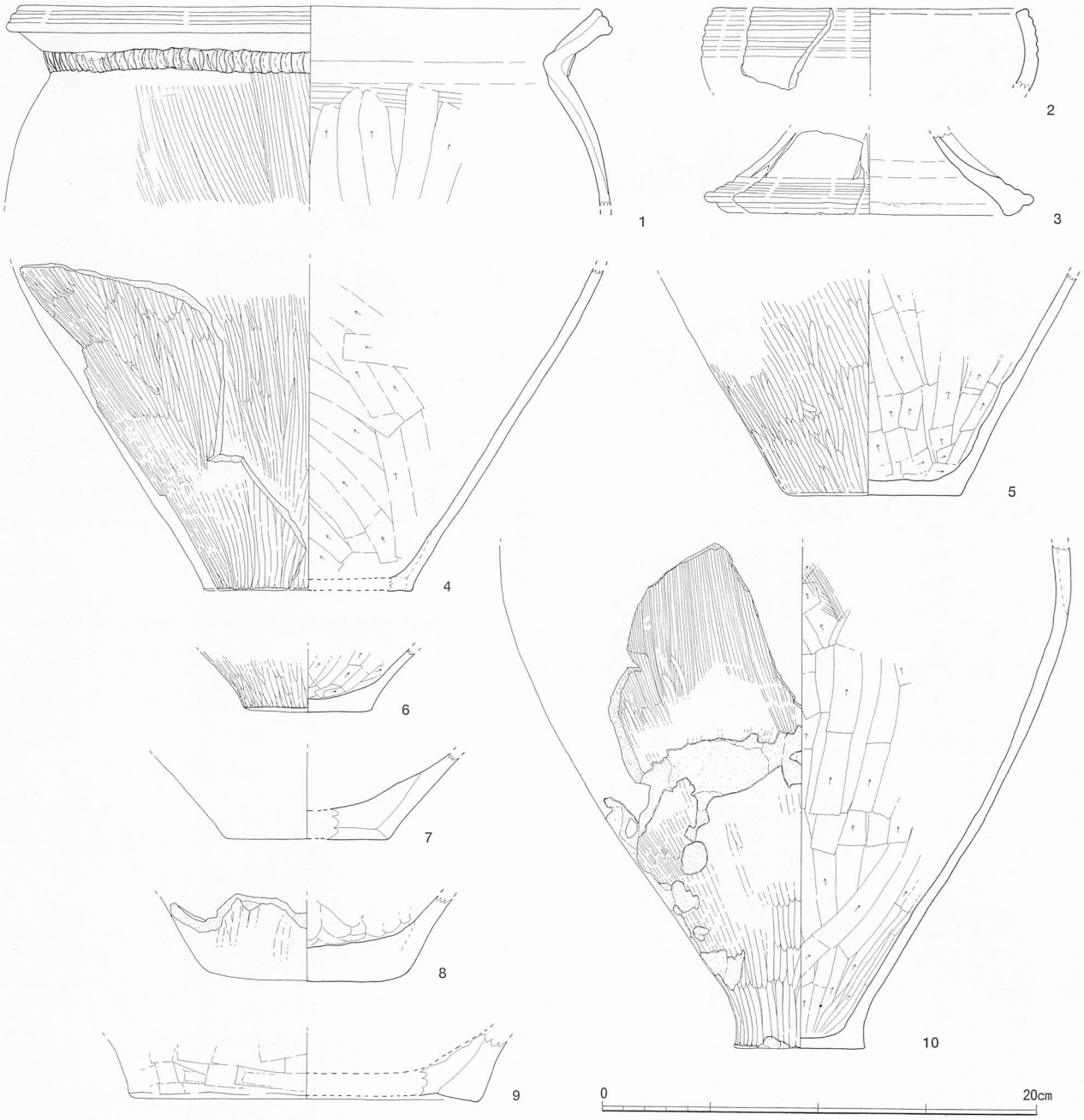


Fig. 55　SX-73出土遺物実測図４（縮尺１/３）

短線文を施し、円形浮文を貼り付ける。

また、胴部下半には、径4.5×５㎝、5.5×６㎝、深さ３㎜の略円形の焼成破裂痕が残る。胴部最大径付近から下半部には、弧状に黒斑が生じている。

Fig. 52-１（Pl. 16-⑫）は大型壺で、口縁端部に粘土を貼り付けて上方に拡張する。口縁端面には、６条の凹線文を巡らせ、その上に円形浮文を貼り付ける。凹線文の凹部断面は「U」字形で沈線に近い。頸胴部の境には、指頭で摘むように低く幅の広い突帯を貼り付ける。粘土帯の中ほどには稜が生じ、これを境に上下に爪先を押捺して刻目を施す。刻目は反時計回りに施文される。焼成や胎土が共通することから、Fig. 55-９の壺の底部破片と同一個体である可能性がある。２（Pl. 17-①）は口縁端面に断面波板状の凹線文を４条巡らす。３（Pl. 17-②）は口縁端面に１条ずつ４条の凹線文を巡らす。凹線文は凹部断面が「U」字形で沈線に近い。肩部外面には、刷毛目工具の小口を押捺して螺旋状に２段の刻目をつける。施文の始めと

終わりの位置が大幅にずれている。4は口縁端面に1条ずつ2条の凹線文を巡らす。凹線文の凹部断面は「U」字形で、沈線に近い（Pl. 17-④）。Fig. 54-1は口縁屈曲部に断面三角形突帯を貼り付ける。突帯には平織り布を巻いた指先を押捺して刻目を施す（Pl. 17-⑤）。

甕には、口縁端部を上下に拡張して凹線文を施す「く」字形口縁の甕（Fig. 54-3・4、Pl. 17-⑥・⑦）、口縁端部を上方に摘み出し口縁屈折部の内側に小さな段状の沈線を巡らす甕（Fig. 54-5）、口縁端部を横ナデ調整で上下に拡張して沈線文を巡らす甕（Fig. 54-6）、口縁部内面に粘土を追加して肥厚させ端面に凹線文を施す甕（Fig. 55-1）がある。

3（Pl. 17-⑥）は口縁端面に1条ずつ凹線文を3条施す。凹線文の凹部断面は「U」字形で、中段の凹線文は上下の2条に比べ幅が狭く浅い。沈線に近い凹線文である。焼成や胎土が共通することから、Fig. 55-5の底部破片と同一個体と考える。5（Pl. 17-⑧）は口縁端面に1条の沈線状の凹線文を巡らす。胴部外面には薄く煤が残り、器面がごく薄く剥離している。内面には煮焦げと考えられる炭化物が吸着している。6の口縁端面に施される沈線文は幅が細くて浅い。Fig. 55-1（Pl. 17-⑨）は大型品。口縁端面に沈線状の凹線文を1条ずつ2条施す。口縁屈曲部に低い帯状の突帯を巡らせ、篦状工具で押し引きで刻目を施す。

底部の破片には、壺（Fig. 54-2・Fig. 55-4・6～9）と、甕（Fig. 54-7・8・Fig. 55-5・10）がある。

壺の底部は平底であるが、Fig. 55-6・8は外底面が凸レンズ状に膨らみ、やや不安定な平底である。Fig. 54-2には、推定径7～8㎝、深さ2～3㎜の円形の焼成破裂痕の一部が残る。Fig. 54-2とFig. 55-4は、ともに器壁が薄いつくりで、ミガキ調整が丁寧に施される。

甕の底部破片の中で、Fig. 55-10は、パッチ状の小さな略円形の剥離面が、胴部下半に生じている。焼成破裂痕と比べて、小さく浅く、同じ深さで剥離している。外面は二次的な火熱で赤変しており、胴部下半には帯状に煮焦げ状に炭化物が吸着している。煮炊きによって生じた剥離と判断した。

高坏には、鉢形の坏部（Fig. 55-2）と脚部（Fig. 55-3）の破片がある。2（Pl. 17-⑩）は坏部上半に1条ずつ5条の沈線状の凹線文を施す。3（Pl. 17-⑪）は、裾部に未貫通の矢羽根透孔と3条の凹線文、脚端部に1条の凹線文を施す。凹線文は1条ずつ施文されている。凹線文の凹部断面は浅い「U」字形で沈線に近い。

この他、弥生土器以外に、扁平な砂岩の円礫を利用した凹石の欠損品が出土している（Fig. 51-4、Pl. 25-⑤）。

以上のSX-73の弥生土器は、SX-48と比べると、弥生時代中期後葉～後期初頭に限られる。また、これらの中には、器面に焼成破裂痕を残す土器が目立つ。しかし、焼成破裂が生じて器体に孔があいたような事例や、SK-29で出土したような焼成失敗品は含まれていない。煮炊きの痕跡を残す甕が含まれることを考えれば、SX-73は、焼成失敗品が投棄されたのではなく、生活残滓が一括して廃棄されたものと考える。

（7）柱穴・小穴

SP-226（Fig. 108）

DB-13区に位置する。南半部は攪乱で破壊されている。推定径38～40㎝、深さ14㎝の略円形の掘り形をもち、径15㎝の立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡にあたる①層は、黒褐色シルトに親指先大の黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。掘り形埋土の②層の黒褐色シルトで、黄褐色ブロックが下部に溜まる。ともに小礫は混じらない。

SP-259（Fig. 90）

DA-13区のSC-28床面で検出した。長径61㎝、短径54㎝、深さ8㎝の長円形の掘り形をもち、径18㎝の立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡にあたる①層は黒褐色シルト、掘り形埋土の②層は黒褐色砂質土である。掘り形内埋土②層からは弥生土器の甕胴部細片が1点出土した。

SP-271（Fig. 128、付図）

DB-13区で検出した長円形の小穴である。SC-25床面で確認され、SP-270・272に切られる。推定長径45㎝、短径36㎝、深さ7㎝を測る。埋土は、暗褐色砂質土で、褐色シルトのレンズ状ブロックがごく少量混じる。

弥生時代中期後葉の壺の口縁部破片（Fig. 128-10）、弥生土器の胴部細片4点、ごく少量の径5㎜の角張った炭化物片が出土している。

SP-273（Fig. 125）

DB-13区の古墳時代後期のSC-25の床面で検出した。長径47㎝、短径42㎝、深さ13㎝の長円形の掘り形をもち、径14㎝の立柱痕跡を確認できた。①層は立柱痕跡、②層は掘り形埋土である。ともに黒褐色シルトで、小指先大の黄褐色砂質シルト塊が混じる。②層には黄褐色砂質シルト塊が多くみられる。

立柱痕跡の①層から弥生土器の胴部細片1点、掘り形埋土②層から弥生土器の甕胴部片8点が出土している。他に、弥生土器の胴部細片～小片2点、径3～5㎜の角張った炭化物片が多く出土。

SP-293（Fig. 125・128）

DB-14区に位置する。長径56㎝、短径50㎝、深さ30㎝の不整な長円形の掘り形をもち、径19㎝の立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡にあたる①層は黒褐色シルトで、にぶい黄褐色や焼土の小塊が点々と混じる。掘り形埋土の②～④層は、黒褐色シルトで、にぶい黄褐色シルトが混じる。にぶい黄褐色シルトは、②層では親指先大の塊となって多く混じり、③層では塊がやや大きいが量は少ない。

弥生時代中期後葉～後期初頭の甕口縁部細片（Fig. 128-13）、肩部細片1点が出土している。

SP-294（Fig. 125）

DB-14区に位置する。長径52㎝、短径46㎝、深さ24㎝の長円形の掘り形をもち、径18㎝の立柱痕跡を検出した。

立柱痕跡にあたる①層は黒褐色シルトで、にぶい黄褐色シルトの小塊が下部を中心として少量混じる。掘り形埋土の②・③層も黒褐色シルトで、②層にはにぶい黄褐色シルトの薄いレンズ状ブロックが縞状にみられ、③層ではにぶい黄褐色シルトは親指先大の塊となっている。

出土遺物はいずれも弥生土器である。内外面をミガキ調整した大形鉢と考えられる胴部小片、外面を刷毛目調整し内面を丁寧なナデ仕上げの壺胴部小片、外面に擦過調整を施し内面はケズリ調整の甕胴部小片、二次的火熱をうけた胴部小片などがある。

SP-301（Fig. 125）

DB-15区に位置し、東端部分が攪乱で破壊されている。径45～50㎝、深さ28㎝の長円形の掘り形をもち、径22㎝の立柱痕跡を検出した。立柱痕跡にあたる①層は暗褐色シルト。掘り形埋土の②層はにぶい赤褐色砂質シルト、③層は黒褐色砂質土である。

埋土中からは、弥生土器の胴部小片6点が出土。また、径0.5～1㎝の角張った炭化物片、2～3㎜の粒状の炭化物片が多くみられた。

SP-309（Fig. 14）

DG-16区北東部に位置する。径20～22㎝、深さ10㎝ほどの逆円錐に近い形状の小穴で、中央部で8～9㎝の先端がやや尖る杭痕跡を確認した。杭痕跡にあたる①層は暗褐色砂質土である。その周囲の②・③層は暗褐色砂質土で、径1～3㎝のやや拉げた楕円形のにぶい黄褐色シルトや褐色シルトの塊が多く混じる。①層からは、径0.2～0.3㎝の粒状の炭化物がごく少量出土。他に弥生土器の胴部小片1点がある。

SP-330（Fig. 109）

調査区北東端のCX-15区で出土した杭痕跡のある小穴である。径23～24㎝、深さ22㎝を測る。杭痕跡は先

端が尖る径12～13cmで、埋土中位で確認された。その上部には、親指大の黄褐色シルト塊が多く混じる黒褐色シルトの①層がみられる。杭の折り取り後の流入土である。杭痕跡にあたる②層は黒褐色シルト、掘り形埋土の③層は①に近いが、黄褐色シルト塊の量がかなり少ない。

出土遺物はないが、埋土に砂礫がほとんど混じらない点から、古墳中期以前の杭跡と考えられる。

SP-332（Fig. 129）

CZ-14区に位置する。径21～22cm、深さ８cmの略円形の掘り形内で径15cmの立柱痕跡を確認した。

立柱痕跡にあたる①層は、先端が尖り気味で、黒褐色シルトに黄褐色シルトが散漫に混じる。掘り形埋土の②層は、黄褐色シルトが①層と比べてやや多く、砂礫を含む。遺物は出土していない。

SP-342（Fig. 129）

CZ-14区に位置する。長径30cm、短径27cm、深さ18cmを測る長円形の小穴の中で、先端が尖った径12cmの杭痕跡を確認した。杭痕跡にあたる①層は、黒褐色シルトで、不整形の黄褐色砂質土塊が点々と混じる。掘り形埋土の②層は黒褐色シルト。弥生土器もしくは土師器と考えられる胴部細片10点ほどが出土した。

SP-346（Fig. 128）

CZ-13区に位置する略円形の小穴で、SC-35床面で検出した。径24cm前後、深さ14cmを測る。埋土は、暗褐色砂質シルトで、径１cmの楕円形のにぶい黄褐色塊が少量混じる。

弥生時代中期後葉の鉢（Fig. 128-19）、甕底部片（Fig. 128-20）、大型壺や、甕の胴部破片などの弥生中期後葉と考えられる土器細片10数点、径１cmの角張った炭化物片が出土している。

SP-374（Fig. 129）

DB-13区のSC-25床面で確認した。径48cm、深さ13cmの略円形の掘り形をもち、径16cmの立柱痕跡を検出した。立柱痕跡にあたる①層は黒褐色シルト、掘り形埋土の②層は黒褐色シルトに親指先大の黄褐色シルト塊が多く含まれる。ともに小礫がごくわずかに混じる。

弥生土器の壺や甕の胴部細片～小片８点、長さ3.5cm、幅2.8cm、厚さ1.2cmの扁平な餅形の砂岩円礫が出土している。

SP-380（Fig. 26・128）

CY-13区に位置し、SC-35の床面で検出した。略円形で、径48～53cm、深さ20cmのしっかりした掘り形をもつ。

埋土上部には、礫が少量混じる褐色シルトの①層、礫が少なめの褐色シルトの②層、褐色シルトの③層がみられる。中位には、暗褐色シルトの④層が流れ込む。北側の壁際付近に褐色シルトのレンズ状ブロックがみられる。底面近くには、にぶい黄褐色シルトの中に径１～２cmの輪郭がぼやけた暗褐色シルト塊が多く混じる⑤層がみられる。

上げ底の甕の底部片（Fig. 128-27）、脚部の付け根に沈線を巡らす高坏（Fig. 128-28）、長方形の透孔をもつ高坏もしくは脚台付鉢と考えられる脚部片（Fig. 128-29）、脚裾に端面に沈線状の凹線をめぐらす高坏、甕や鉢・壺の胴部片が出土している。いずれも弥生時代中期後葉～後期初頭のものである。

SP-392（Fig. 35・130）

DF-23区に位置する略円形の小穴である。北東部は攪乱で破壊されているが、径56cm、深さ14cmを測る。擂り鉢状の小穴で、底面には褐色砂質シルト塊の②層がみられる。埋土の大半は、①層とした暗褐色砂質土で、径0.5～１cmの楕円形の褐色シルト塊がまばらではあるが、多く混じる。

①層から、弥生土器の胴部細片20数点、花崗岩台石（Fig. 130-２）、緑色片岩の石片が出土している。埋土には、小さな焼土塊や、径１～３cmの角張った炭化物片、径２～３mmの粒状の炭化物片が多くみられたの

で、水洗選別を試みた。その結果、イネとオオムギの炭化種子が出土した。

SP-397（Fig. 35）

DF-23区に位置する。径25～29cm、深さ16cmの略円形の小穴である。ほぼ中央で、先端が尖る径12cmの杭痕跡を確認した。杭痕跡にあたる①層は黒褐色砂質土。掘り形埋土の②・③層は、黒褐色砂質土で、幅２cmほどの褐色砂質土のレンズ状ブロックがごく少量みられる。

①・③層から、弥生土器と考えられる細片と、径0.5～２cmの角張った炭化物片がごく少量出土した。

SP-401（Fig. 35）

DF-22区に位置する。径28cmの略円形の掘り形をもち、径10～11cmを測り先端が尖る杭痕跡を検出した。杭痕跡の①層は黒褐色砂質土で、部分的にわずかに粘性をおびる。掘り形埋土の②・③層も黒褐色砂質土で、にぶい黄褐色砂質シルトの薄いレンズ状ブロックがごく少量みられる。①層から径２～３mmの粒状の炭化物片、②層から弥生土器と考えられる細片と径５mmの角張った炭化物片がごく少量出土している。

SP-437（Fig. 107）

CY-12区に位置する。長径29cm、短径25cm、深さ25cmの掘り形をもつ。上面で確認した黒褐色シルトの①層は先端が平らであるが、径が12cmと小さく杭痕跡と考える。掘り形埋土の②層は黒褐色砂質シルトで、小指先大の黄褐色シルト塊が多く混じる。弥生土器と考えられる胴部小片１点が出土した。

SP-453（Fig. 129）

CX-13に位置する。径31～32cm、深さ13cmの略円形の掘り形の中で、径11cmの杭痕跡を確認できた。杭痕跡の①層は黒褐色シルトで、少量の小礫が混じる。東へわずかに傾く。掘り形埋土の②・③層は黒褐色シルトで、小指先大の拉げた黄褐色シルト塊が混じる。黄褐色シルト塊の量は②層が目立つ。

掘り形埋土から、弥生土器の胴部細片３点が出土した。

SP-454（Fig. 37）

CX-13区に位置する径45～47cm、深さ23cmの小穴の中に、先端が丸い径８cm前後の杭痕跡を確認できた。杭痕跡の①層は黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の②・③層は黒褐色シルトで、②層には小指先大の黄褐色シルト塊が多く混じる。掘り形埋土から弥生土器の胴部細片８点、杭痕跡から胴部細片２点が出土した。

SP-456（Fig. 107）

CX-13区に位置する径19cm、深さ17cmの小穴の中に、先端が尖る径12cmの杭が打ち込まれていた。杭痕跡にあたる②層は、わずかに砂っぽい黒褐色シルトで、黄褐色シルトがわずかに混じる。掘り形埋土にあたる①層は黒褐色シルト。埋土中から、弥生土器の甕と壺の胴部小片３点が出土している。

SP-457（Fig.107・131）

CX-13区に位置する径38～42cm、深さ12cmの略円形の掘り形の北よりで径12cmの杭痕跡を確認した。先端は尖っていないが、径が小さいことから、杭痕跡とした。杭痕跡の①層は黒褐色シルトで、含まれる黄褐色シルト塊が0.5～１cmととくに小さい。掘り形埋土の②層も黒褐色シルトで、径２～３cmの黄褐色シルト塊が混じる。掘り形埋土から、弥生時代中期後葉～後期初頭の甕の口縁部（Fig. 131-７）、高坏の口縁部（Fig. 131-８）、甕胴部細片～小片７点が出土。他に、甕胴部小片３点がある。

SP-459（Fig. 32）

CX・CY-13区のSC-38の床面で検出した。径25cm、深さ19cmの円形小穴の中に、径８cmの杭が打ち込まれていた。杭痕跡にあたる①層は黒褐色シルトで、軟らかい親指大の黄褐色シルト塊が少量混じる。掘り形埋土の②層も黒褐色シルトで、拉げた黄褐色シルトの小塊が点々と混じる。掘り形埋土から、弥生中期後葉～後期初頭の外面をミガキ調整した甕胴部片、その他４点が出土。いずれも、細片化している。

SP-482（Fig. 129）

DD-14区のSC-14の床面で検出した。長径46cm、短径41cm、深さ18cmの掘り形の中で、径16～18cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の①層は先端がやや尖り気味である。黒褐色シルトで、小指先大の黄褐色シルト塊を含むが、軟らかい。掘り形埋土の②層も黒褐色シルトで、黄褐色シルト塊は堅く締まっている。掘り形埋土の②層から弥生土器の胴部小片４点、他に弥生土器胴部細片３点が出土している。

SP-485（Fig. 129）

DD-14区に位置し、SC-14の床面で検出した。SP-483・484に切られる。東西長128cm、最大幅75cmの比較的大型の小穴である。埋土は黒褐色砂質シルトで、上部には黄褐色砂質シルトの薄いレンズ状ブロック、下部には横に拉げた黄褐色砂質シルトの小塊が混じる。小礫を含まず、全体としてSC-14の貼り床に近い土層の特徴をもつ。埋土中から、弥生土器の胴部細片１点が出土している。

SP-486（Fig. 65・130・131）

DD-14区に位置する。長径44cm、短径39cm、深さ29cmの掘り形の中で、径17～18cmの立柱痕跡を確認した。立柱痕跡にあたる①層は黒褐色シルトで、先端が尖る。掘り形埋土の②層も黒褐色シルトであるが、横に拉げた黄褐色シルトの小塊が多く混じる。 掘り形埋土の②層から、弥生時代中期末～後期初頭の甕口縁部（Fig. 131-13）、土器細片１点、長さ14cm・幅７cm・厚さ５cmの棒状の花崗岩円礫、敲打痕を残す花崗岩円礫（Fig. 130-１）が出土している。この他、弥生土器の甕胴部片２点がある。

SP-487（Fig. 129）

DD-14・15区の境界部のSC-14床面で検出した。SP-486に切られる。長径90cm、短径67cm、深さ48cmの比較的大きく深い長円形の掘り形をもつ。掘り形の中央で径17cmの立柱痕跡を確認できた。立柱は途中で折り取られている。立柱折り取り後に流入した①・②層は、小礫が少量混じる黒褐色砂質シルトで、小指先大の黄褐色砂質シルト塊が点々と含まれる。立柱痕跡の③層は黒褐色砂質シルトで、わずかに黄褐色シルトの小塊が混じる。④～⑧層は掘り形埋土。④層は黒褐色シルトで、径２～３cmの不整形の黄褐色シルト塊が非常に多く詰まる。⑤・⑦層は黒褐色砂質シルト。⑥層は黒褐色シルトで、小指先大の横に拉げた黄褐色シルト塊が多く混じる。⑧層は黄褐色砂質シルトに黒褐色シルトが縞状に混じる。

上部流入土①層からは、弥生中期時代後葉～末の甕口縁部片（Fig. 131-14・15）、胴部細片３点が出土。掘り形埋土④～⑧層からも、弥生土器の胴部細片３点が出土。他、弥生土器の胴部片10数点がある。

SP-537（Fig. 99）

CZ-14区のSC-33床面で確認した。長径25cm、短径21cm、深さ16cmの小穴で、斜め方向に杭が打ち込まれている。

杭痕跡にあたる①層は暗褐色砂質土。上部に径２～３mmの礫がごく少量混じる。また、褐色シルトの薄いレンズ状ブロックがごく少量みられる。②層は、暗褐色砂質土で、径２cm前後の丸い褐色シルト塊がやや多く混じる。

SP-548（Fig. 99）

CZ-14区のSC-33床面で検出。長径23～24cm、深さ15cm前後の略円形の掘り形に、径11cmの杭痕跡を確認できた。先端は尖らず丸みをおびる。杭痕跡の①層は、砂礫がごく少量混じる暗褐色砂質シルトで、褐色シルトの薄いレンズ状ブロックがごく少量混じる。掘り形埋土の②層も暗褐色砂質シルトで、径２cmの楕円形の褐色シルト塊が少量含まれる。

杭痕跡の①層から径５mmの角張った炭化物片がごく少量出土以外、他に遺物は出土していない。

SP-550（Fig. 99）

CZ-15区のSC-33床面で検出した。径30～32cm、深さ９cmの略円形の掘り形の中に、径11cmの杭が打ち込まれていた。杭痕跡にあたる①層は暗褐色砂質シルト。掘り形埋土の②・③層は、径２～３mmの礫が少量混じる暗褐色砂質シルトで、②層には褐色シルトの薄いレンズ状ブロックがごく少量、③層には径２～３cmの楕円形の褐色シルト塊が多く混じる。

杭痕跡の①層から径５mmの角張った炭化物片がごく少量出土した以外、他に遺物はない。

SP-571（Fig. 128）

DA-12・13区に位置する。SP-281に切られている。不整な長円形で、長径50cm前後、短径43cm、深さ18cmを測る。径12cmの立柱痕跡が斜めに打ち込まれているのを確認。杭痕跡にあたる①層は、径１～３mmの小礫がまばらに混じる暗褐色砂質土で、径５mmほどの楕円形の褐色砂質土塊が少量含まれる。②～④層は掘り形埋土。②層は径２～５mmの礫が多く混じる褐色砂質土で、径１cmの丸いにぶい黄褐色砂質シルト塊が多くみられる。③層は径１～２mmの礫がまばらに混じる暗褐色砂質土で、褐色砂質土塊が２～３ヶ所みられる。④層は径１mmの礫が少量混じる褐色砂質土で、径１cmのにぶい黄褐色砂質土塊が多く含まれる。

埋土中からは、弥生時代中期の甕底部、甕胴部小片２点、径５mmの角張った炭化物片が出土。

SP-581（Fig. 129）

DC-14区に位置する不整な長円形で、長径35cm、短径29cm、深さ20cmを測る。径13cmの杭痕跡を確認できた。杭痕跡にあたる①層は、径１mmの礫が少量混じる暗褐色砂質土。埋土上部の②・③層は暗褐色砂質土で、径１～３cmの楕円形のにぶい黄褐色シルト塊が混じる。にぶい黄褐色シルト塊は、③層と比べて②層に多い。下部の④・⑤層は、褐色シルトで、径５mmのにぶい黄褐色シルトの小塊がごく少量混じる。弥生土器の壺と甕の胴部細片～小片５点の他、径５mmの角張った炭化物片が少量出土した。

SP-584（Fig. 129）

DB-14区に位置する。長径63cm、短径55cm、深さ21cmの略長円形の掘り形の中で、径16cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の①層は暗褐色砂質土で、礫はほとんど含まない。掘り形埋土上部～中部の②～⑥層は暗褐色砂質土、最下部の⑦層は黒褐色砂質土である。全体に礫が少量混じる。また、②・③・⑥層には、にぶい黄褐色シルトのレンズ状ブロックが多くみられる。

立柱痕跡の①層からは径２～３mmの粒状の炭化物片が少量出土。掘り形埋土からは、弥生土器の胴部破片６点、長さ・幅５cm、厚さ１cm板状の花崗岩の亜角礫、径５mmの角張った炭化物片が出土している。

2　古墳時代の遺構と遺物

（1）古墳時代の遺構の分布

出土遺物および出土状況、埋土の特徴から、古墳時代と考えられる遺構と遺物を報告する。

遺構は、竪穴式住居跡15棟（SC-10・12・13・14・15・16・17・18・21・22・25・28・30・33・37）、掘立柱建物13棟（SB-42・43・44・45・46・47・49・52・53・54・57・58・62）、柵列と考えられる杭列3条（SA-20・59・60）、溝2条（SD-92・94）、鍛冶炉1基（SF-41）、土壙15基（SK-1・9・23・24・26・32・36・77・78・81・82・86・87・88・89）、その他の遺構12基（SX-61・63・64・65・66・67・68・69・70・71・72・74）、そして、柱穴・杭穴もしくは小穴である。

その中で、竪穴式住居跡は、SC-10を除いて、すべて古墳時代後期のものである。調査区の数ヶ所で数軒が重複して営まれており、継続して集落が営まれたことがわかる。掘立柱建物も、大部分が古墳時代後期に属する。ただし、一部の柱穴だけを確認した建物が多く、全形を明らかにできたものは少ない。

土壙には、比較的大型のものと、浅く小型の土壙がある。性格不明の遺構としたものは、Ⅲ層中や竪穴式住居跡などの埋土・貼り床部で出土した焼土・灰の集積である。また、柱穴および小穴については、出土遺物と埋土の特徴から、古墳時代と判断でき、立柱痕跡や杭痕跡を確認できたものを中心として報告する。

これらの古墳時代後期の遺構は、CX～DG-15区より南側に分布し、共同溝北半部のDF・DG-16区より北側では営まれていない。Ⅲ層でも当該期の出土遺物は極端に少ない。北西へ50mほど離れた12・14・16次調査では、溝で囲まれた同時期の竪穴式住居跡や掘立柱建物が発見されている。空き地的な空間を挟んで営まれた2つの竪穴式住居跡・掘立柱建物群から構成される集落を想定でき、今回の調査地点は、その南側の集落部分にあたる。

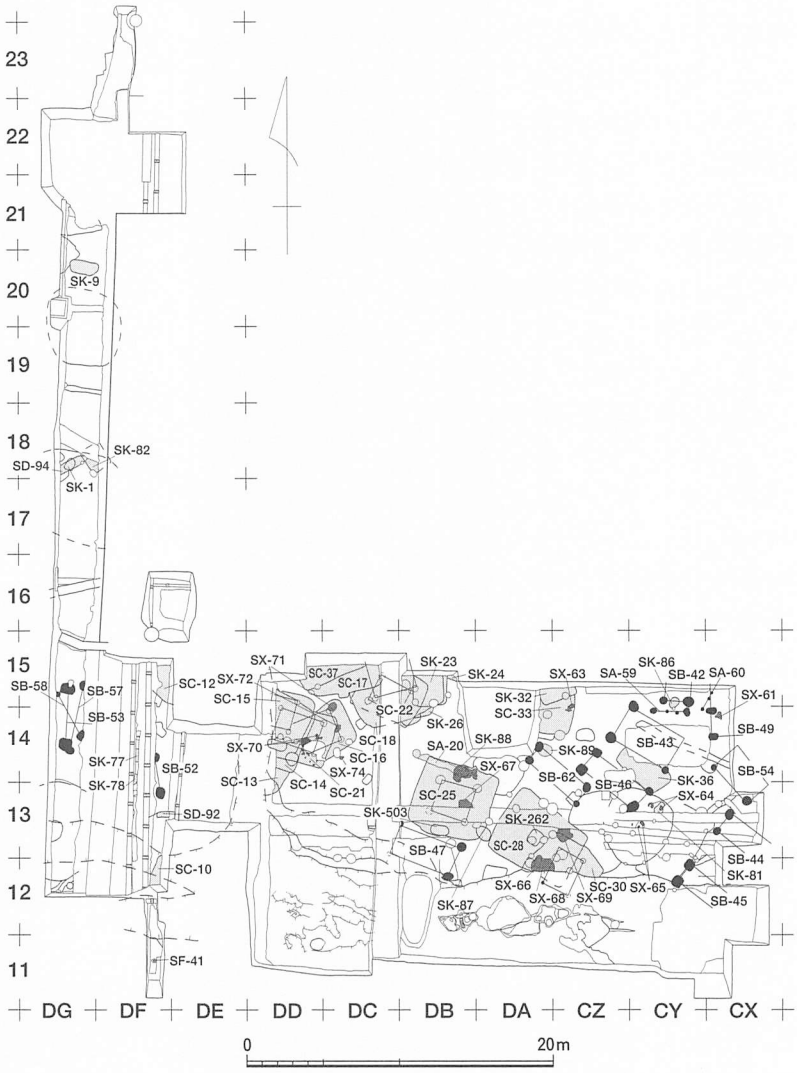


Fig. 56　文京遺跡13次調査における古墳時代の遺構（縮尺1/500）

（2）竪穴式住居

SC-10号竪穴式住居（Fig. 22・57・58、Pl. 1・3・19）

DF-12・13区の調査区隅では、Ⅲ層下部で多くの土師器の甕や壺が押し潰されたように出土し始めた。Ⅳ層上面で南北方向に直線的にのびる壁が、東へ緩やかに曲がることを確認でき、隅丸方形の竪穴式住居跡と判断した（Fig. 22、Pl. 1・3）。ただし、大部分が調査区外にのび、西側が共同溝の建設時に破壊され、規模は不明である。

床面は、Ⅳ層上面から深さ6～10cmを測り、ほぼ平坦である。床面では小穴を確認したが、立柱痕跡は確認できず、SC-10の柱穴は明らかでない。

埋土は、にぶい黄褐色砂質土の⑤・⑥層が主体で、部分的に褐色シルトの塊である⑦層が混じる。①～④層は、1～2㎜や径2～3cmの角礫や小石が多く混じり、⑤～⑦層とは土質がまったく異なるため、SC-10を切り込まれた小穴の埋土と考えられる。①層は暗褐色砂質土。②層は暗褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土が混じり合う。③層はにぶい黄褐色砂質土である。

比較的多くの土師器の壺や甕が、Ⅲ層下部を含めて、床面からやや浮いた状態で出土している（Fig. 58-1～11）。一部は、遺存状態もよく、大型の破片に復元できる。3はⅢ層最下部から出土しているが、9・10は埋土中の破片とⅢ層下部から出土した破片が接合復元できた。1～3は小型丸底壺である。1（Pl. 19-⑤）は完形品のミニチュア品で、球形の胴部から口頸部が緩やかに反転しながら立ち上がる。手捏ねでつくられ、内外面には指頭によるナデ痕跡が多く残る。2（Pl. 19-⑥）・3は、やや撫で肩の扁球形の胴部にラッパ形に広がる口頸部がつく。4（Pl. 19-③）は、球形の胴部に若干内湾気味の長めの口縁部がつく壺である。

5～9は甕で、5～6は小型品である。5（Pl. 19-①）は球形の胴部に「く」字形に屈曲する口縁部がつく。口縁部は若干内湾気味で、口縁先部を少し折り曲げ気味に横ナデする。6（Pl. 19-②）も球形の胴部で、「く」字形口縁がつくが、口縁部は胴部からやや反転しながらのびる。口縁端部には、強めの横ナデ調整で、粘土のよれが生じている。7・8は6と同形態の中型甕。9は厚めの胴部をもち、胴部上半が窄まり、口縁部は強く反転しながら屈曲し、端部に横ナデ調整を施し小さく折り曲げる。胴部内面に施されるケズリ調整は、5～8と比べてかなり乱雑である。

10・11は高坏。10（Pl. 19-④）は坏部の底面には円錐形の粘土塊を充填する。坏部底面はほぼ平坦で、上半が箍状の反転部から大きく広がる。脚部は裾がラッパ形にひらく。脚部端面は、横ナデで丸みをおびた面に仕上げられる。11は「ハ」字形に開く脚柱が、裾部で強く折り曲げられる。脚裾端部の内面は横ナデで若干窪む。

他には、土師器の丸底の甕や小型壺の底部破片、甕の胴部破片、混入品である弥生土器（Fig. 58-12・13）がある。土器以外には、敲石として用いられた握り拳よりやや小さい砂岩の円礫が出土している（Fig. 57-1）。周縁の一端に細かな敲打痕と擦痕が集中する。以上の遺物の中で、9は、器壁の厚さや形状、胴部内面のケズリの施し方も、他の土器とは異なる。6世紀後半代の甕に類似する。埋土でも上部から出土しているので、混入品と考えてよさそうである。これを除くと、いずれも古墳時代中期に比定できる土師器である。完形に近く復元できるものが含まれており、住居廃絶後に一括して投棄されたものと考えられる。したがって、SC-10は古墳時代中期に廃絶された竪穴式住居跡と判断できる。

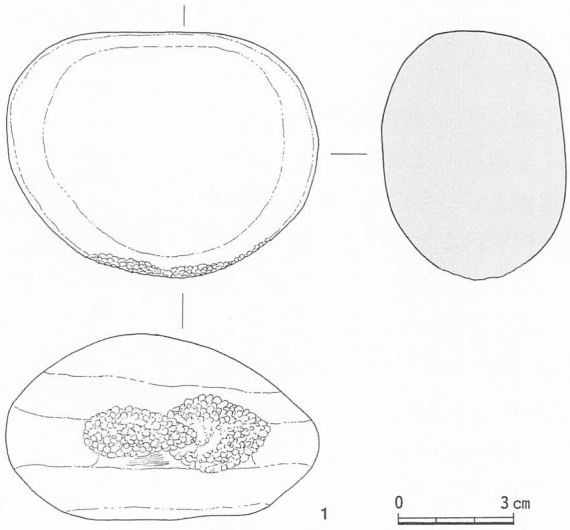


Fig. 57　SC-10出土遺物実測図1（縮尺1/2）

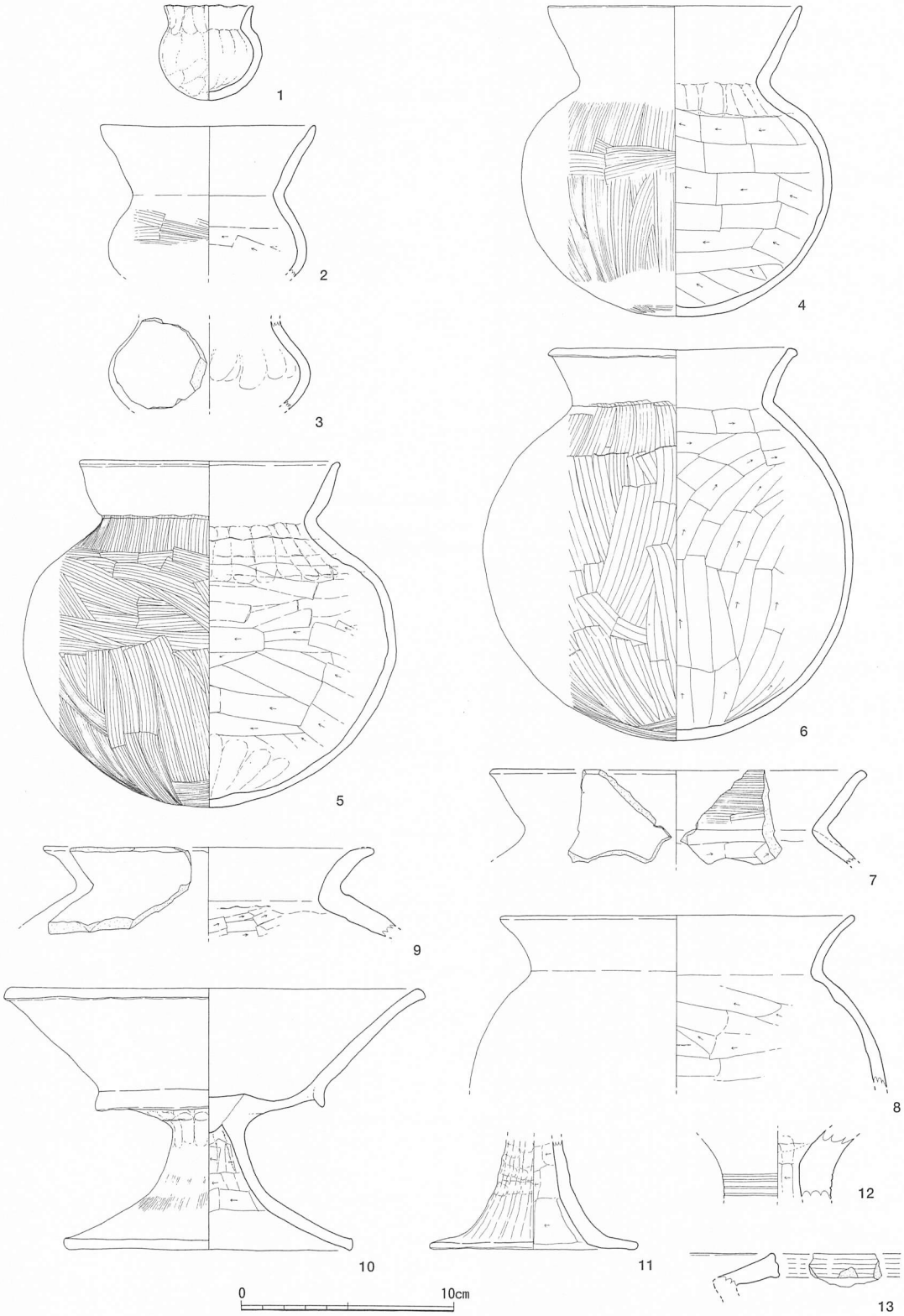


Fig. 58　SC-10出土遺物実測図２（縮尺１/３）

SC-12号竪穴式住居

(Fig. 59～61・126)

DF-15区で出土した竪穴式住居跡である。東側は調査区外にのび、西側は既設の管路で破壊され、ごく一部の周壁を確認できただけである。周壁がほぼ直線的にのび、東端が北へ向かってわずかにカーブすることから、隅丸方形である可能性が高い(Fig. 59)。SK-75に切られる。

床面上では、SP-153～162が出土した。その中で、SP-157～162は、深さが2～3㎝の皿状の小穴で、立柱痕跡も確認されていない。どちらかと言えば、SC-12床面上の凹凸を誤認して掘り下げた可能性もある。これらに対して、SP-154は、比較的しっかりした掘り形をもつ。平面形は長円形で、長径37㎝、短径28㎝、深さ11㎝を測る。埋土は暗褐色砂質シルトで、小指～親指大の黄褐色砂質シルト塊が少量混じる。立柱痕跡は確認できなかったが、位置関係からSC-12の柱穴の一つと考える。

遺物は、埋土中と上部Ⅲ層から出土している。埋土からは、古墳時代後期の須恵器の坏身(Fig. 60-1)、土師器の小形甕の口縁部細片(Fig. 60-2)と、土師器と考えられる胴部破片1点が出土しただけである。1の坏身の口縁部は、「く」字形に屈曲する長めの立ち上がりをもち、古墳時代後期に比定できる。

一方、上部Ⅲ層部分の遺物には、弥生時代中期後葉の脚台付鉢の脚台部破片(Fig. 61-6)、甕底部(Fig. 61-7)、中期後葉～後期初頭の甕口縁部細片、古墳時代中期の土師器甕の口縁部破片(Fig. 61-4・5)、古墳時代後期の須恵器坏蓋の天井部破片(Fig. 61-1・2)、坏身(Fig. 61-3)がある。この中で、須恵器坏は埋土出土のものと同型式である。

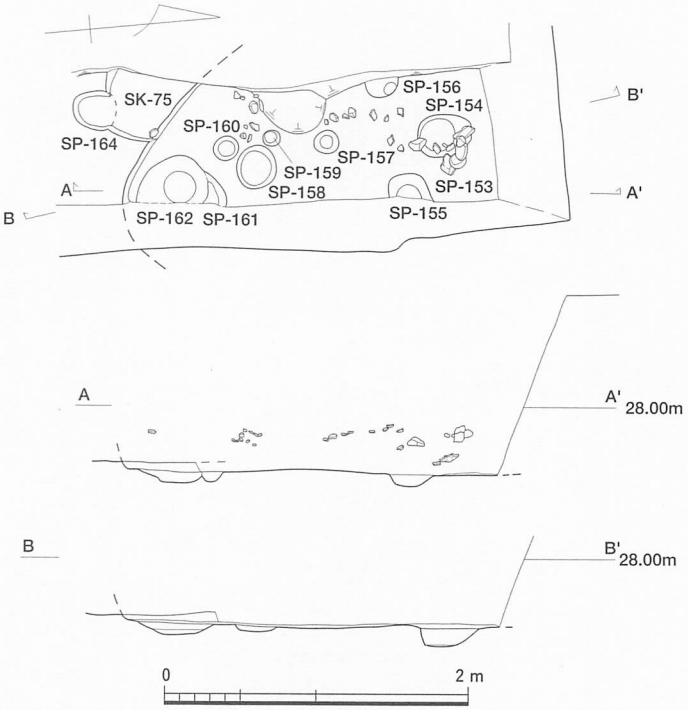


Fig. 59　SC-12遺構実測図(縮尺1/50)

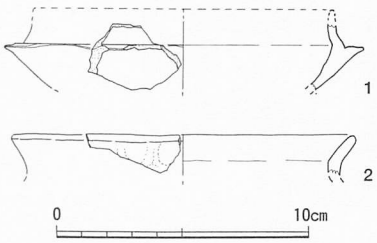


Fig. 60　SC-12埋土出土遺物実測図(縮尺1/3)

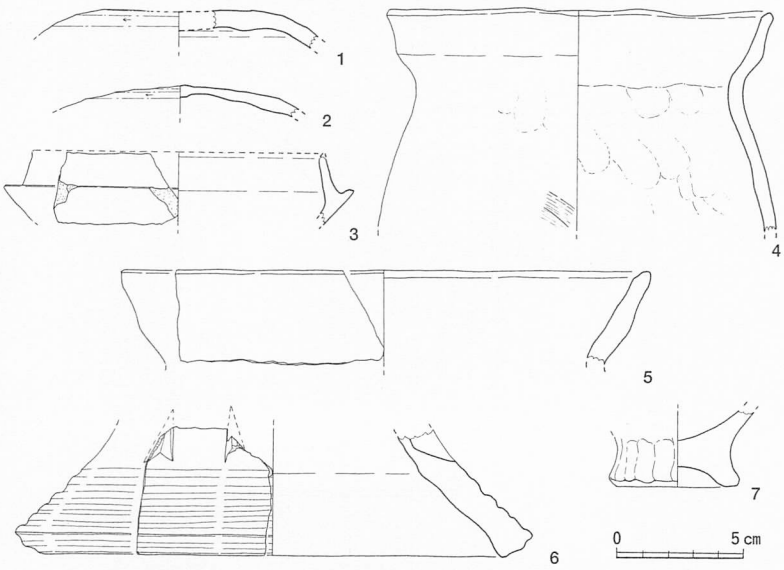


Fig. 61　SC-12上部Ⅲ層出土遺物実測図(縮尺1/3)

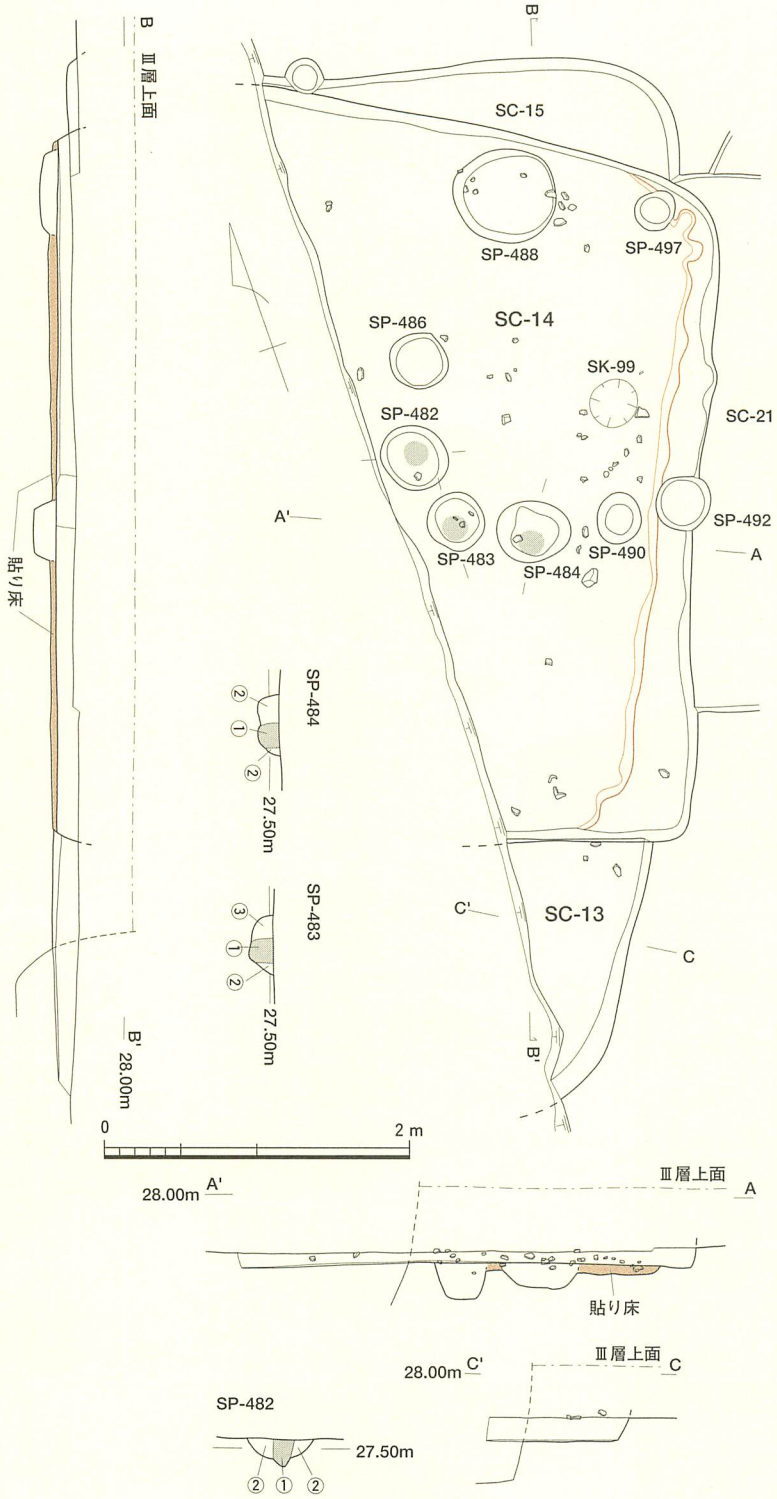


Fig. 62　SC-13・14遺構実測図（縮尺1/50）

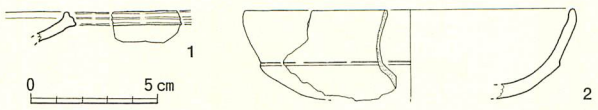


Fig. 63　SC-13埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）

この他、SP-154からは、弥生時代後期の長頸壺と考えられる頸部付け根の破片（Fig. 126-8）や胴部破片が出土している。

埋土出土の遺物は古墳時代後期に比定でき、Ⅲ層中からも同時期と考えられる須恵器坏が出土しており、SC-12は、当該期の竪穴式住居跡と判断できる。

SC-13号竪穴式住居

（Fig. 62・63、Pl. 4）

DD-13・14区に位置する隅丸方形と考えられる竪穴式住居跡である（Fig. 62）。北側の大部分をSC-14に切られ、西側も攪乱で破壊され、規模は不明。また、北側のSC-14の床面で検出された小穴で、SC-13の柱穴になりえるものもなく、柱構造は不明である。

埋土は、径1～2㎜の角礫が多く混じる暗褐色砂質土で、径1～5㎝のにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く含まれる。

遺物は、床面から若干浮いた状態で、弥生土器の甕口縁部の細片（Fig. 63-1）、須恵器高坏の坏部破片（Fig. 63-2）が出土した。1は混入品。2は口縁端部内面がわずかに内湾し、坏部中位に小さな浅い段が巡る。以外に、土師器もしくは弥生土器の胴部細片20点前後、須恵器の細片2点が出土した。

SC-13上部のⅢ層部分からは、土師器・須恵器・弥生土器が出土しているが、胴部の細片ばかりであり、出土量も少ない。

以上、出土遺物は少ないが、床面直上の埋土から出土した須恵器高坏の形状的な特徴から、古墳時代後期に比定でき、SC-13は当該期の竪穴式住居跡と考えることができる。

SC-14号竪穴式住居

(Fig. 62・64、Pl. 4)

DD-14・15区のSC-15の下層で確認した隅丸方形の竪穴式住居跡である（Fig. 62）。SC-13を切る。西側を攪乱部で破壊され、南北幅4.55m、東西残存長3mを測る。西半部がやや広がり気味である。床面を部分的に掘り込み、黄褐色砂質シルトの小塊が混じる暗褐色砂質土を貼り床としている。そのため、掘り上げ後には、東壁沿いに低いテラス部分が残る。

埋土は、砂礫混じりの暗褐色砂質土で、湿気をおびるとやや灰色みが強くなる。

床面では柱穴は確認できなかったが、貼り床を除去した後に、立柱痕跡をもつSP-482～484を検出した。その中で、SP-483・484は、SC-14の東西主軸上に位置する。いずれかが柱穴と考えられるが、判断がつかなかった。

SP-483は、径36～39cm、深さ16cmの不整円形の掘り形をもち、径16～17cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡にあたる①層は黒褐色砂質シルトで、径1cm前後の拉げた黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。掘り形埋土の②層は、黒褐色シルトに小指先大の堅めの黄褐色シルト塊が多く混じる。

SP-484は、長径52cm、短径40cm、深さ13cmの不整な長円形の掘り形をもち、径16cm前後の立柱痕跡を確認した。立柱痕跡にあたる①層は黒褐色シルトで、拉げた小指先大の黄褐色シルト塊が少量混じる。掘り形埋土の②層も黒褐色シルトであるが、黄褐色シルト塊が多く、さらに焼土塊を多く含む。

埋土出土の遺物は、ほとんどが上位～中位で散乱した状態で出土している（Fig. 64-1～8）。弥生土器が少量混じるが、古墳時代後期の土師器・須恵器が主体を占める。1は須恵器坏蓋の口縁部破片で、回転横ナデ調整によって、口縁端部が若干外方に摘み出され、内面に小さな段ができている。2は須恵器坏身の底部で、SC-17の埋土中から出土した破片と接合復元できた。3は肩部の破片で、頸部の付け根付近の径から平瓶としたが、傾きは不確かであり、横瓶の可能性も残す。4・5は甕もしくは壺の胴部破片である。6～8は土師器の甕で、口縁部が「く」字形に緩やかに屈曲する。6は口縁部が内湾気味にのびる。7の口縁部は短く、球形の胴部がつくと考えられる。8は、器壁の厚いつくりで、撫で肩の長胴がつく。胴部内面は指頭で乱雑にナデ上げる。

貼り床部からは、古墳時代後期の須恵器坏身や土師器甕の破片や、弥生土器も含めて10数点の小片が出土している。量は少なく、まとまった出土状況も示さない（Fig. 64-9・10）。9は須恵器の坏身で、口縁部

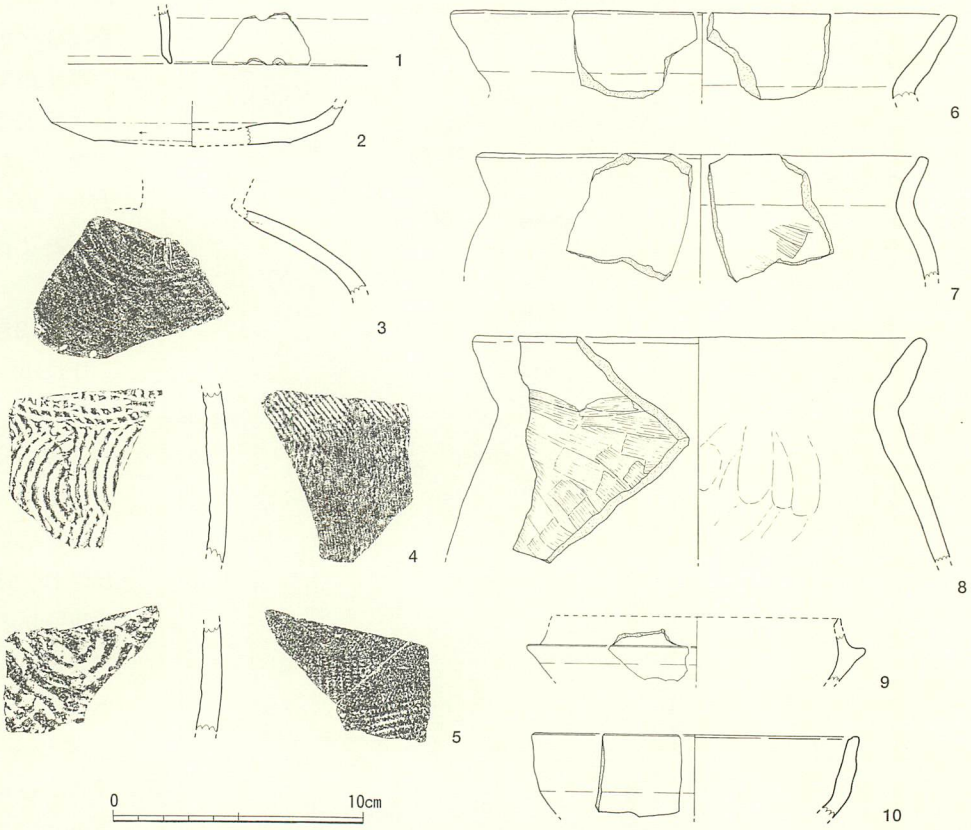


Fig. 64　SC-14埋土および貼り床部出土遺物実測図
（1～8：埋土、9・10：貼り床部、縮尺1/3）

がわずかに外反しながら立ち上がり、厚めの受け部をほぼ水平につくり出す。10は高坏の坏部破片で、SC-16上部のⅢ層から出土した破片と接合復元できた。この他、南壁沿いの貼り床部から、ウマの臼歯上顎が出土している。詳細は第Ⅳ章で報告する。

柱穴であるSP-483では、掘り形埋土の②層から、弥生土器もしくは土師器の胴部細片４点、他に弥生土器の甕胴部小片３点が出土。SP-484の掘り形埋土の②層からは、弥生土器の壺胴部小片が出土している。

埋土・貼り床部分・柱穴からは、弥生土器も出土しているが、大半は古墳時代後期の須恵器や土師器で、古墳時代後期に比定でき、SC-14の下限の時期を示す。貼り床部出土の９の須恵器坏は上限を示す。SC-14は古墳時代後期の竪穴式住居跡である。

SC-15号竪穴式住居（Fig. 65～68・89、Pl. 4・5）

DD-14・15区で出土した隅丸長方形の竪穴式住居跡である(Fig. 68、Pl. 4・5－1)。SC-14・21を切る。床面では、SK-99とSP-188・190・191・200・201・486が出土した。立柱痕跡の有無と配置関係から、SP-190・191を東側の主柱穴とする４本柱構造を考えた。南北幅3.15mを測り、西半部は攪乱部で破壊されている。しかし、SP-190・191の柱間が2.05m、柱と周壁の間隔が１mほどであるので、東西長は最低４m前後と推定できる。

埋土は径２～５㎜の角礫が多く混じる暗褐色砂質土である。

SK-99は、SP-190・191のほぼ中央に位置し、SC-15に伴う可能性があるが、性格は不明。径71～72㎝、深さ10㎝の不整円形の土壙で、底面は小さな凹凸がある。埋土は黒褐色シルトである。

柱穴のSP-190は、長径34㎝、短径30㎝、深さ７㎝の不整な長円形の掘り形をもつ。掘り形中位で、径18㎝の立柱痕跡を確認できた。①層は暗褐色シルトで、明黄褐色砂質シルトの薄いレンズ状ブロックがみられる。立柱が先端を残して折り取られた後に流入した土層である。立柱痕跡の②層は暗褐色シルトで、抜き取りの際に立柱を引き倒したため、平面形が南側に流れている。掘り形埋土の③層は暗褐色シルトで、大きな明黄褐色砂質シルト塊が混じる。

SP-191は、径34～35㎝、深さ９㎝の略円形の掘り形をもち、径18～19㎝の立柱痕跡を検出した。立柱痕跡にあたる①層は暗褐色シルト。掘り形埋土最上部の②層は暗褐色シルトで、明黄褐色砂質シルトの薄いレンズ状ブロックが縞状にみられる。下部の③層も暗褐色シルトであるが、①・②層と比べて堅く締まった土質である。

埋土から出土した遺物は、弥生土器も混じるが、古墳時代後期の須恵器や土師器が大半を占める（Fig. 65－１～５）。その中で、２は須恵器の坏身で、床面上で出土した。他は埋土中から散漫に出土している。いずれも住居廃絶後に流入した遺物である。

１は須恵器の坏蓋で、胴部外面に浅い段状の窪みが巡り、口縁端部の内面には横ナデで小さな面ができている。２・３は坏身で、わずかに内湾しながら立ち上がる口縁部をもつ。４は低脚の高坏、５は甕もしくは壺の胴部破片である。また径５㎜の細い釘状の鉄器破片がある（Fig. 89－１）。床面上を清掃中に、緑色片岩製の石庖丁の破片が出土した（Fig. 66－１）。外湾刃半月形もしくは杏仁形の石庖丁と考えられる。混入

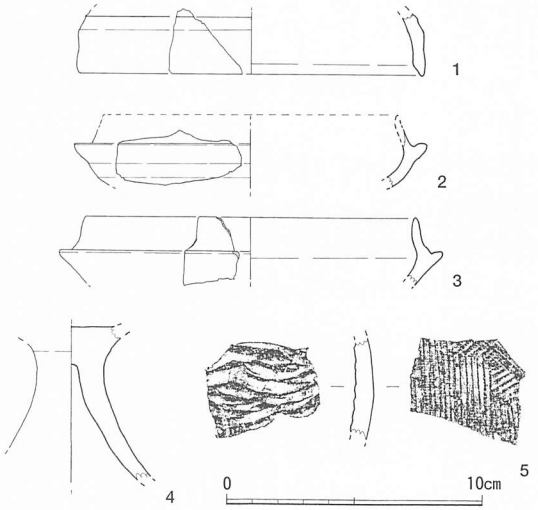


Fig. 65　SC-15埋土出土遺物実測図１（縮尺１/３）

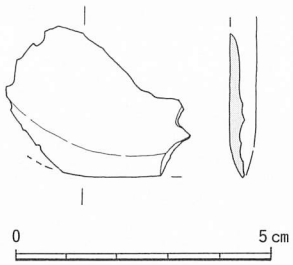


Fig. 66　SC-15埋土出土遺物実測図２（縮尺２/３）

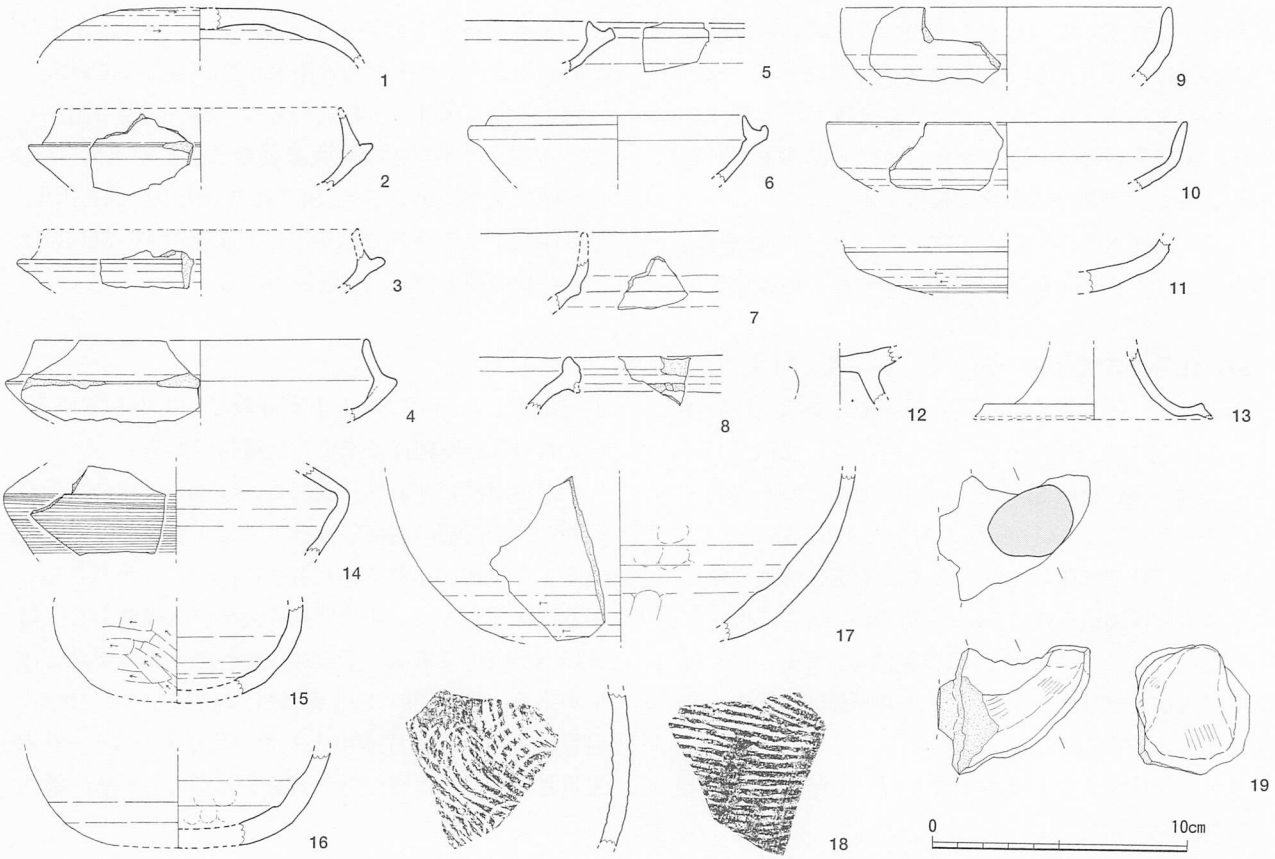


Fig. 67　SC-15上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）

品である。

柱穴のSP-191の立柱痕跡①層からは、炭化物の小片が少量出土した。SK-99からは弥生時代中期後葉の甕口縁部片1点が出土しているだけである。

一方、SC-15上部のⅢ層部分からは、比較的多くの遺物が出土している。弥生時代中期後葉～後期前葉の土器片も混じるが、古墳時代後期の土師器や須恵器が圧倒的に多い（Fig. 67-1～19）。その中で、須恵器の坏身をみると、口縁部の立ち上がりが長めの2～4、口縁部の立ち上がりが短く厚い5・6がある。前者は、埋土出土のFig. 65-2・3と同じく、古墳時代後期に比定できる。後者の6は、SC-25上部にあたるE-3-17区Ⅲ層上部から出土した破片との接合資料で、後期のものである。

以上の出土遺物と、下部で出土したSC-14が古墳時代後期に比定できることから、SC-15は後期の竪穴式住居跡と判断した。

SC-16号竪穴式住居（Fig. 68～71、Pl. 4・20）

DC・DD-14・15区に位置する竪穴式住居跡である（Fig. 68）。西半部をSC-21に切られる。上部のⅢ層下位でSX-71、遺構検出面でSX-72の焼土や炭化物の広がりを確認した。

床面では、立柱痕跡をもつSP-512・513が出土し、SC-16の主柱穴と考えた。柱間隔は2.2mを測る。ほぼ同じ高さで床面をもつSC-21・15では、これに対応する西側の柱穴がみあたらなかったので、推定東西幅2.7m前後で、南北長3.1mで、柱主軸が東に偏った歪んだ隅丸方形の小型の竪穴式住居跡である可能性を考える。

埋土は、径2～3㎜の角礫が多く混じる暗褐色砂質土で、径1㎝ほどの輪郭がぼやけた褐色シルト塊が多く含まれる。

柱穴であるSP-512は、径40～43㎝、深さ12㎝の略円形の掘り形をもち、径16㎝の立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡にあたる①層は黒褐色シルトで、黄褐色シルトがわずかに混じる。掘り形埋土の②層は黒褐色シル

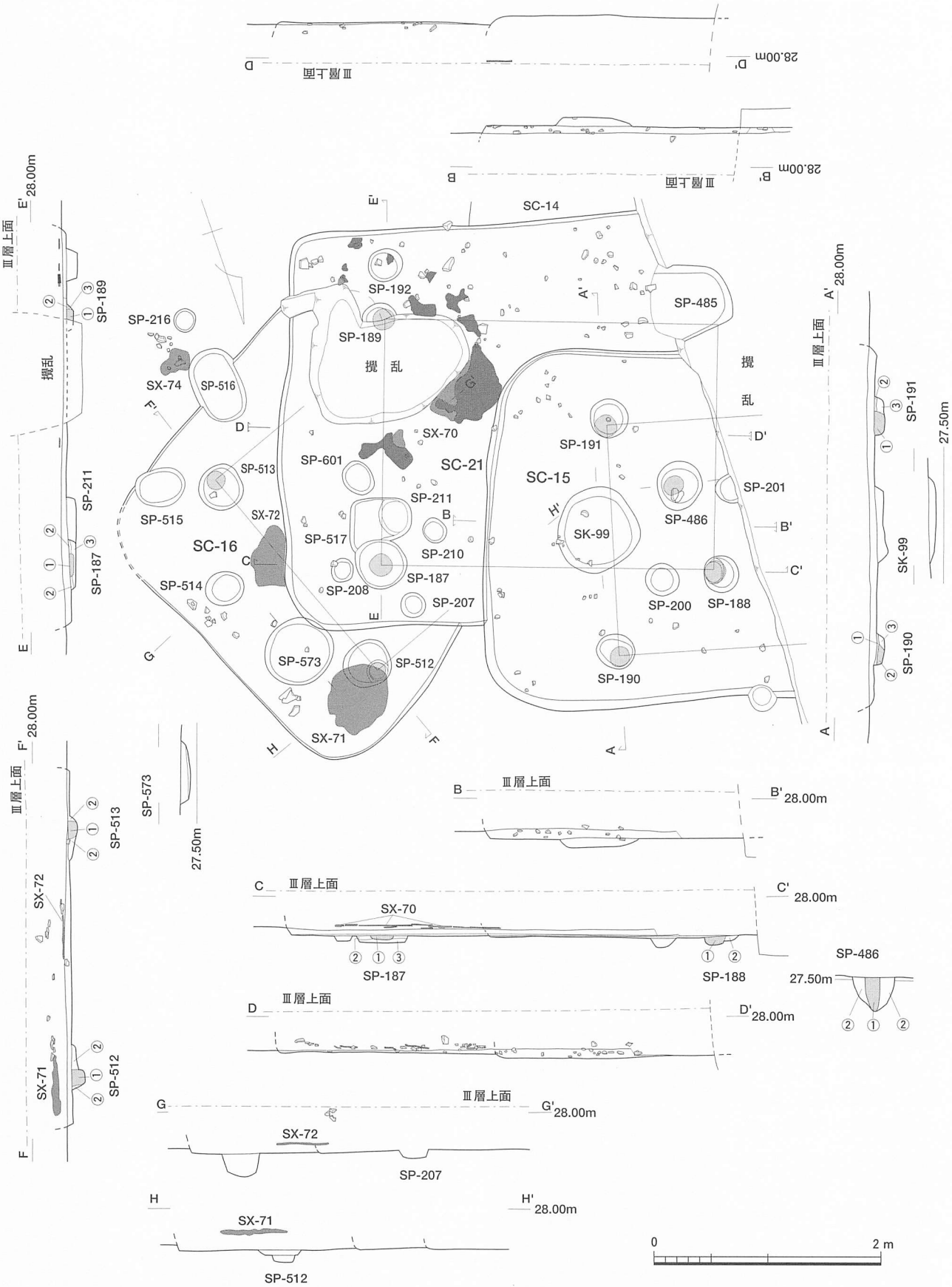


Fig. 68　SC-15・16・21、SX-71～73遺構実測図（縮尺 1 /50）

トで、小指先大の黄褐色シルト塊が点々と混じる。

SP-513は、径40cm、深さ9cmの略円形の掘り形をもち、径15～16cmの立柱痕跡を検出した。立柱痕跡にあたる①層は黒褐色シルト。掘り形埋土の②層は黒褐色シルトで、小指先大の黄褐色シルト塊が多く混じる。

柱穴であるSP-512の東側で、略円形の浅いⅢ状の小穴であるSP-573が出土した。径58～61cm、深さ8cmを測り、径2mm前後の小礫が多く混じる暗褐色砂質土を埋土とする。後述するように、弥生土器の細片6点とともに、長頸壺の脚台部破片が出土し、SC-16上部のⅢ層の破片と接合・復元できた。埋土の特徴はSC-16と共通しているので、SC-16に伴う遺構と考えるが、性格は不明である。

埋土から出土した遺物は少ない（Fig. 69）。その中には、完形に近く復元ができた須恵器坏蓋がある（Fig. 69-2、Pl. 20-①）。埋土出土の破片に加えて、SC-16上部のⅢ層でも下半部の破片などと接合・復元できた。SC-21の床面直上から出土した破片も含まれるが、SC-16との切り合い関係から、SC-21への混入品と考える。天井部は丸みをおび、天井部と口縁部の境には強い横ナデで幅の広い凹線状の窪みが巡り、口縁部はやや内湾して、端部は丸くおさめられる。この他、1は須恵器坏蓋の天井部破片、3は高坏の坏部破片、4は口縁端部を横ナデで細く摘み上げる壺の口縁部破片である。これらは、いずれも古墳時代後期に比定できる。また、弥生時代後期前葉の甕の口縁部細片もあるが、混入品である。丸い円礫の一端に敲打痕が残る敲石（Fig. 70-1）が出土している。

柱穴のSP-512の立柱痕跡①層からは弥生土器の胴部細片2点、掘り形埋土②層から弥生土器の胴部細片が1点が出土。SP-513の掘り形埋土②層から、弥生土器の胴部小片1点、長さ4cm、幅3.5cm、厚さ1.5cmの花崗岩円礫が出土した。

上部Ⅲ層部からは、比較的多くの遺物が出土しているが、細片もしくは小片ばかりである（Fig. 71-1～17）。須恵器では、1は坏蓋で、天井部と口縁部の境に凹線状の段が巡り、口縁先端は横ナデで浅い段をもつ面をつくり出す。2～4は坏身。口縁部の立ち上がりは、長めで内傾する。5・6は須恵器の高坏。6は器体が焼け歪む。7は短頸壺の蓋。8・9は短頸壺の口縁部と肩部の破片。10は瓶の口縁部破片で、口頸部の境には横ナデで突出する小さな段が巡る。口縁端部の内面には、横ナデで浅い段をもつ面をつくり出す。

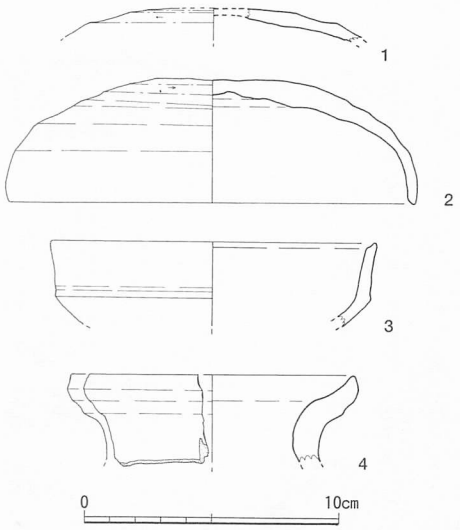


Fig. 69　SC-16埋土出土遺物実測図1（縮尺1/3）

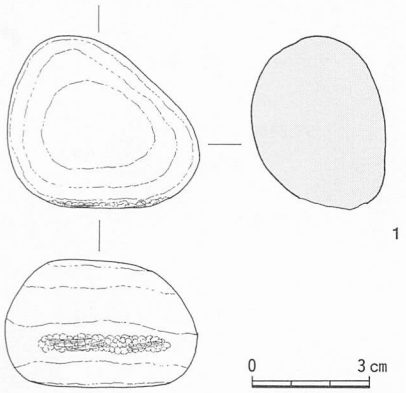


Fig. 70　SC-16埋土出土遺物実測図2（縮尺1/2）

11は瓶の胴部破片。12（Pl. 20-②）は脚台がつく長頸壺の脚台部で、脚部中位に円孔が穿孔される。SC-16上部のⅢ層下部だけではなく、SC-17・21上部のⅢ層部分、さらにSC-16の床面で確認できたSP-573の埋土中から出土した破片が接合・復元できた。本来SP-573に埋積していたものが、SC-16上部のⅢ層部分に混入したものと考えた。13～15は、壺の口縁部と肩部の破片。13は、肥厚させた口縁部の外面を横ナデして、浅いが明瞭な段状の沈線を巡らす。口縁端部を回転横ナデを施しながら折り曲げる。15は外面に平行条線のタタキを施し、間隔をあけて7条一単位のカキメが巡る。内面は、同心円文の当て具痕がナデ調整で消されている。これらは、埋土出土の須恵器と同じく、いずれも古墳時代後期のものである。この他、16・17は、弥生時代後期前葉の甕で、他に口縁端面に凹線文を巡らす壺の破片などがあるが、混入品である。

以上、埋土の遺物だけではなく、Ⅲ層出土のものの

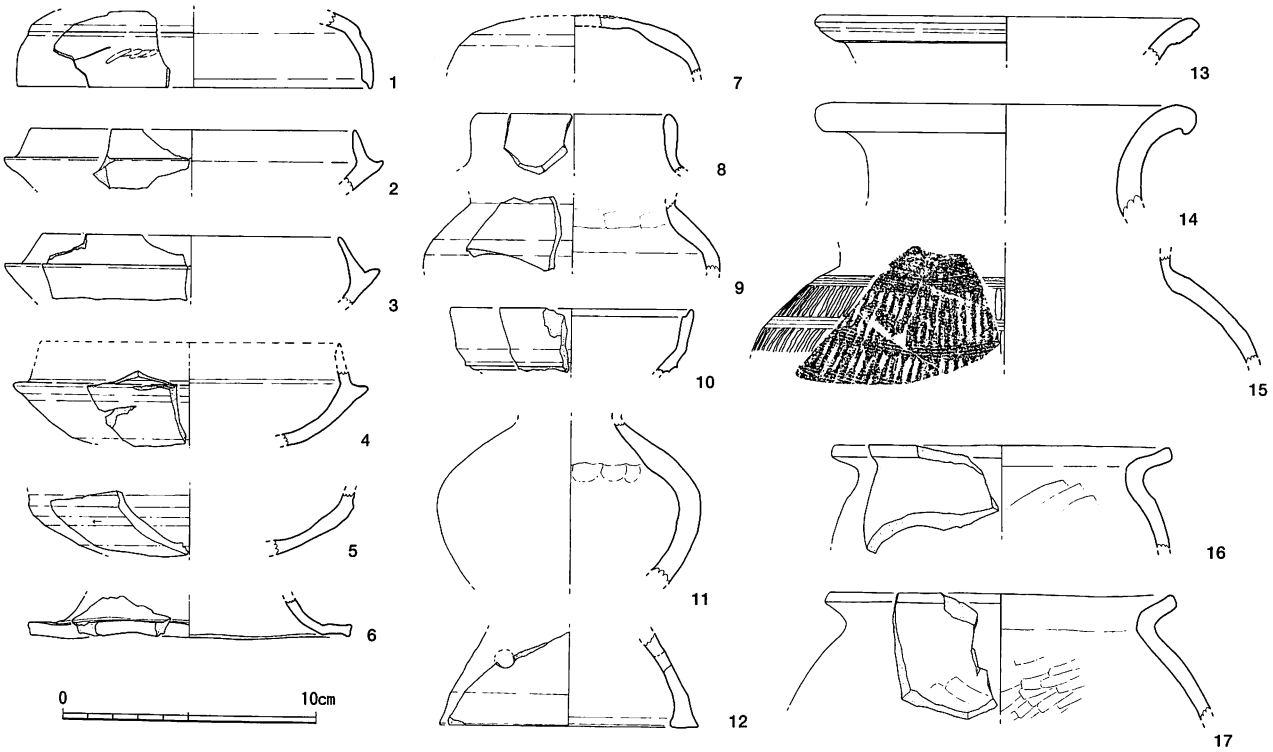


Fig. 71　SC-16Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）

大部分は、古墳時代後期の遺物である。SC-16は当該期の竪穴式住居跡と考える。

SC-17号竪穴式住居（Fig. 72～75、Pl. 3・20・23）

調査区北壁沿いのDC・DD-15区に位置する。北半部分は調査区外にのびるが、一辺4.5～5mの隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である（Fig. 72）。SC-37、SP-510・583に切られ、SC-18・22を切る。SC-18・22とは、SC-17の埋土がやや灰色みが強いことから、明瞭に切り合い関係を把握できた。SC-37との関係は、当初、SC-17がSC-37を切ると考えた。ところが、SC-17の埋土を掘り下げ中に、南北で埋土に暗褐色シルトが縞状にみられる部分とみられない部分があることに気がつき、再度土層断面を確認した結果、当初の判断とは逆に、SC-17はSC-37に切られていることを確認できた。

床面では厚さ5～8cmの貼り床を確認できたが、柱穴は検出できなかった。土層断面では、床面から掘り込まれた小穴を確認したが、立柱痕跡もなく、位置関係からも、SC-17の柱穴とは考えられない。

また、南壁の中央には幅70cm、長さ35cmの方形の張り出し部分が付属する。当初SK-498として別遺構と考えたが、土層断面の観察で埋土（⑧層）がのびることや位置関係から、出入り口と判断した。

埋土を南北土層断面でみると、小礫が多く混じる褐灰色砂質シルトが堆積する⑧層が均一に堆積している。なお、①～⑦はSC-37の埋土と貼り床部である。⑨層はSC-17の床面から掘り込まれた小穴の埋土である。暗褐色砂質シルトで、縞状に黄褐色シルトのレンズ状ブロックが混じる。⑩～⑬層はSC-17の貼り床部にあたる。⑩層は暗褐色シルトで、黄褐色シルトのレンズ状ブロックが南から北へ傾いて縞状にみられる。⑪層は黒褐色シルトに横に拉げた親指大の黄褐色シルト塊が多く混じる。⑫層は暗褐色シルト。⑬層は黒褐色シルトの塊。出入り口部分も、深さ13cmほど掘られ、親指先大の黄褐色シルト塊が混じる黒褐色シルトの⑭層、径2～3cmの黄褐色砂質シルト塊の間に黒褐色シルトが混じる⑮層、暗褐色シルトの⑯層が貼られている。

遺物は、ほとんどが床面から浮き、SC-17の埋没過程で流れ込んだり、投棄された状態で出土している。比較的多くの須恵器・土師器・弥生土器があるが、いずれも小片～細片で、土師器は胴部の細片ばかりで図示できるものはない（Fig. 73-1～10）。

須恵器をみると、1～4は坏身。比較的口径が大きくやや長めの口縁部が内傾して立ち上がる1・2と、口径が小さく口縁部の立ち上がりが短い4がある。3は器壁が厚く、壺の底部の可能性も残す。5は提瓶の口頸部の破片か？　端部を折り曲げて口縁部を肥厚させる。内外面に自然釉がかかる。6は瓶の肩部破片。7・8は高坏の坏部と脚部の破片である。8の坏部中位には、浅い段が巡り、口縁端部の内面を横ナデすることで、小さな面ができ、先端が尖り気味となる。8は脚端部を小さく折り曲げる。低脚の高坏である。以上の須恵器は、古墳時代後期のものである。10は弥生時代後期前葉の鉢で、混入品である。

この他、石鏃・敲石・台石が出土している（Fig. 74-1～5）。1は

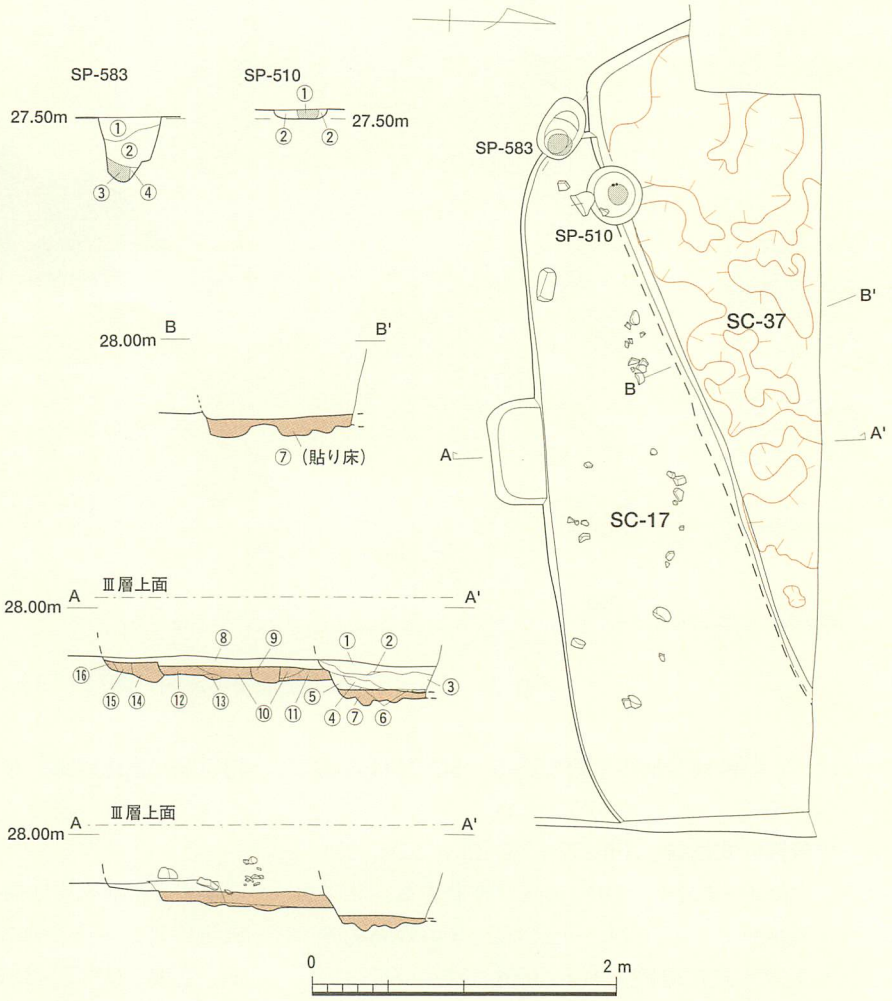


Fig. 72　SC-17・37遺構実測図（縮尺1/50）

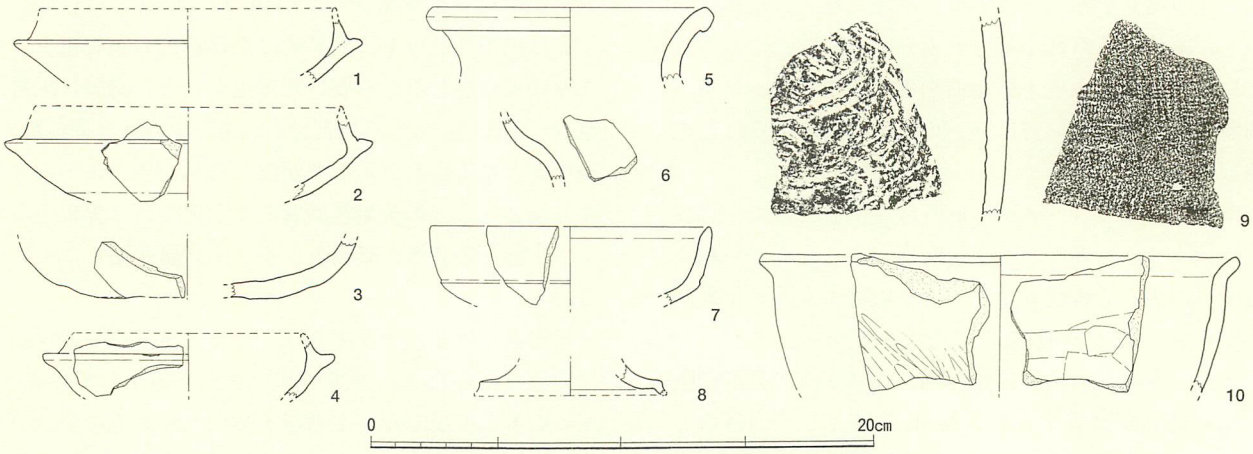


Fig. 73　SC-17埋土出土遺物実測図1（縮尺1/3）

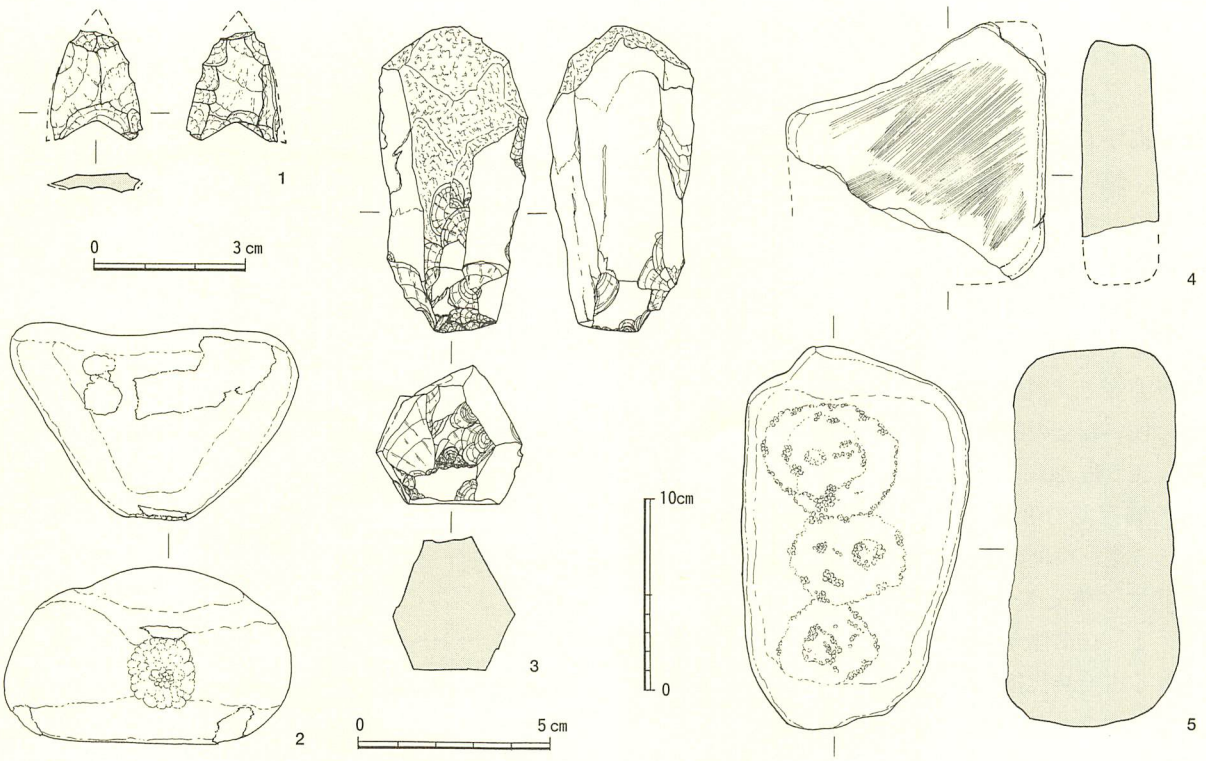


Fig. 74　SC-17埋土出土遺物実測図２（縮尺２/３・１/２・１/４）

凹基式の打製石鏃で、サヌカイト製である。先端と基部縁の一部が欠損している。床面直上から出土したが、混入品である。２～５は、埋土の中位～上部で投げ込まれたような状態で出土している。２は握り拳大の砂岩の円礫で、一端に敲打痕が観察できる。３（Pl. 26-③）は一端に自然風化面を残す方柱状の石英塊で、下端に敲打痕が残る。４は砂岩、５は花崗岩の扁平な円礫を台石に利用している。４の上面全面に擦痕が残り、５には敲打痕や擦痕が３ヶ所に集中してみられる。埋土の⑧層と⑨層からは、炭化物片が少量出土している。

一方、貼り床部分からは、遺物は出土していない。

SC-17上部のⅢ層では、掘り下げの過程から多くの須恵器・土師器・弥生土器が出土し始めた（Fig 75-１～17）。須恵器の坏身には、埋土出土と同じく、比較的口径が大きくやや長めの口縁部が内傾して立ち上がる２～５と、口径が小さく口縁部の立ち上がりが短い７～９があ

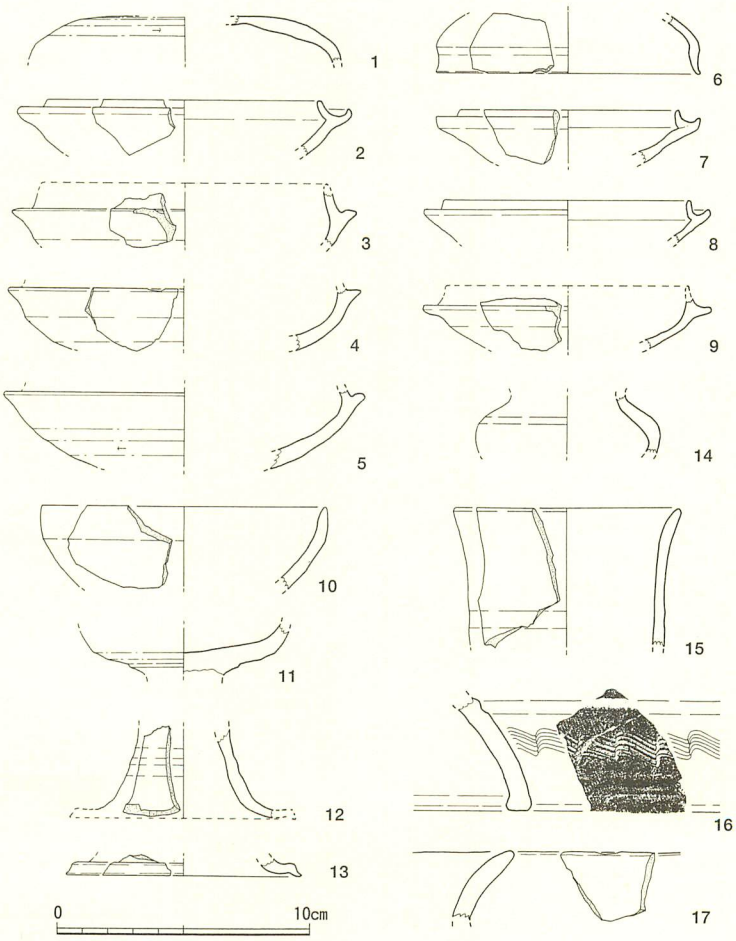


Fig. 75　SC-17上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺１/３）

り、それぞれに対応する坏蓋の１・６がある。10～13は高坏で、坏部は小さめで、短い低脚の高坏ばかりで、埋土出土のものと共通する。14は甕の胴部破片で、肩部に浅いが幅の広い凹線が巡る。15は長頸壺で、頸部の中ほどに浅い幅広の凹線が巡る。16（Pl. 20-③）は器台の脚端部の破片で、凹線の５条一単位の櫛描き波状文が施文される。17は、１～16に伴うと考えられる古墳時代後期の土師器の甕である。胴部から反転してのびる「く」字形口縁である。以上、Ⅲ層出土遺物には、弥生土器も混じるが、大半が埋土と同じく、古墳時代後期に比定できる須恵器や土師器である。

埋土出土の遺物は、弥生時代の遺物の混入もあるが、古墳時代後期に比定できる。上部Ⅲ層部分から出土した遺物も、同時期の須恵器や土師器が出土している。しかし、出土状況からSC-17廃絶後に流れ込んだり投棄されたものである。また、SC-17に切られるSC-37は、古墳時代後期であり、SC-17は古墳時代後期と考えられる。

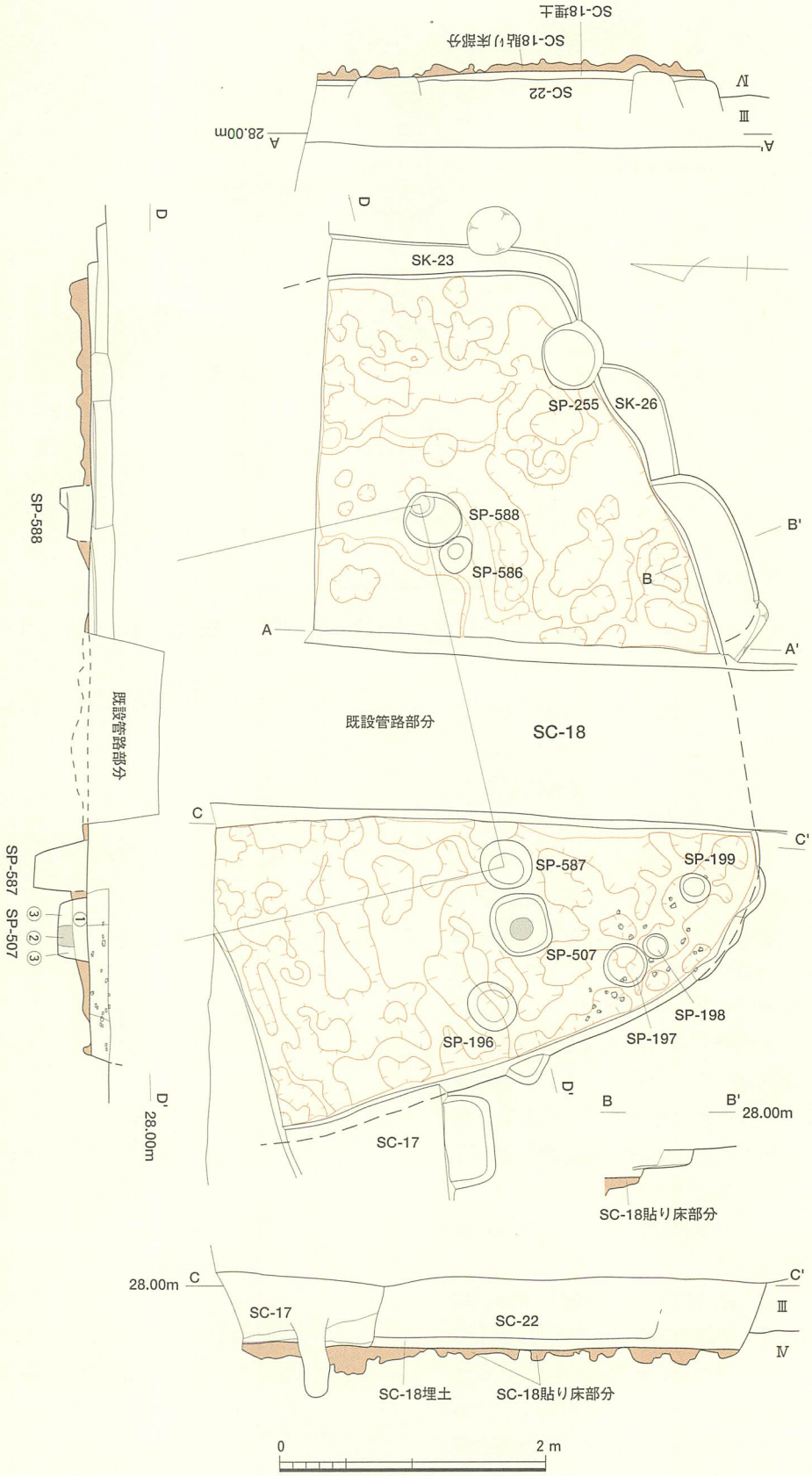


Fig. 76　SC-18遺構実測図（縮尺１/50）

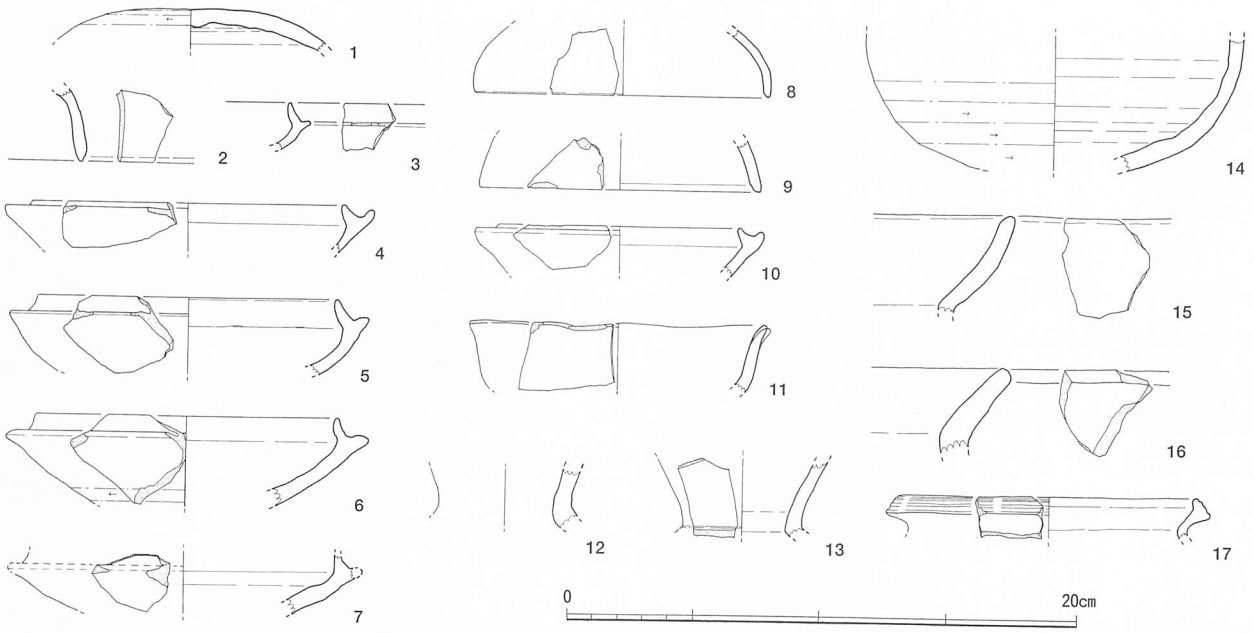


Fig. 77　SC-18埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）

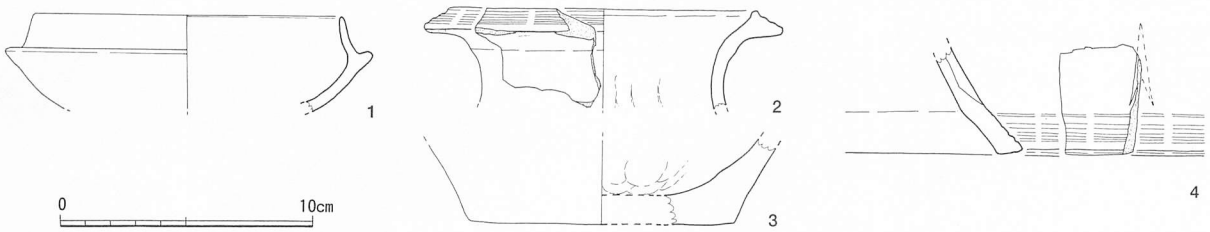


Fig. 78　SC-18貼り床部出土遺物実測図（縮尺1/3）

SC-18号竪穴式住居（Fig. 76～78・89・118、Pl. 6）

DB・DC-14・15区で出土した胴張りが強い隅丸方形の竪穴式住居跡である（Fig. 76、Pl. 6－1）。東西幅6m、住居跡北半部が調査区外にのびるため南北幅は不明である。SC-17・22、SK-23、SP-255に切られ、SK-26を切る。床面には貼り床が施されている。

床面では、SP-196～199を検出した。しかし、いずれも浅い小穴で、SC-18との関係は不明である。貼り床部分を除去した後、SP-507・587・588を確認した。その中で、SP-507では立柱痕跡を検出したが、周壁に近接しすぎるため、SC-18に伴う柱穴とは考えられない。配置関係から、立柱痕跡を確認できなかったが、SP-587・588を柱穴と考え、4本柱構造を想定する。

また、南壁のほぼ中央に幅1.3m、長さ40cmの張り出し部分が付属する。当初、SK-55とし別個の遺構と考えたが、埋土がSC-18と共通することから、出入り口部分と考えた。そのため、SK-55は欠番とした。

埋土は、小礫が少量混じる黒褐色砂質シルトで、親指先大の黄褐色砂質シルト塊が点々と混じる。床面と貼り床の境界部には、部分的に黄褐色砂質シルトの薄いレンズ状ブロックがみられる（Fig. 118）。貼り床部分は暗褐色シルトである。

柱穴のSP-587は長円形の平面形で、長径38cm、短径35cm、貼り床下底面からの深さ36cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

SP-588は、径41～44cmの略円形の掘り形をもち、貼り床下底面からの深さ20cmを測る。柱痕跡にあたる北東隅が径18～20cm、深さ7cmほど窪む。埋土はSP-587と同じく、黒褐色シルトである。

埋土中からは、弥生土器・土師器・須恵器・鉄器の破片が30数点出土しているだけである。弥生土器が多い。床面直上から出土した遺物もあるが、大半の遺物は埋土の中位～下部から散漫に出土する状況である。

小片や細片が多く、いずれもSC-18が廃絶した後に流入した遺物である（Fig. 77-１～17）。

須恵器の坏身には、比較的口径が大きくやや長めの口縁部が内傾して立ち上がる４～７と、口径が小さく口縁部の立ち上がりが短い10がある。前者に対応する坏蓋として１、後者の坏蓋に８・９がある。11は高坏の坏部破片。坏部中位で反転して屈曲する坏部で、口縁端部が部分的に歪む。12・13は、瓶もしくは提瓶の頸部の破片である。13の頸部の付け根には、段状の浅く細い沈線が巡り、外面に自然釉が残る。15・16は土師器の甕である。ともに「く」字形口縁ではあるが、15は内湾しながら屈曲するのに対して、16はほぼ直線的にのび、厚手のつくりである。17は弥生土器の甕で、口縁端部を上下に拡張して、端面に沈線状の３条の凹線文を巡らす。

これらの中で、15は古墳時代中期、17は弥生時代中期後葉～後期初頭の遺物で、混入品である。他は、いずれも古墳時代後期の時間幅の中におさまる遺物である。この他、北半部の埋土中から、鉄刀子の茎部と考えられる破片（Fig. 89-１）や鉄滓小片が出土している。

貼り床部から出土した遺物も、図示した弥生土器や須恵器の他に、弥生土器もしくは土師器の胴部破片が50点ほどがあるにすぎない（Fig. 78-１～４）。１は古墳時代後期の須恵器坏身で、比較的口径が大きく、口縁部の立ち上がり部分は、やや長めに内傾する。２は弥生時代中期後葉～末の壺で、口縁端部を拡張して、波板状の凹線文を３条巡らす。器面が荒れ、凹線文の施文法は不明である。また、口縁部外面に強い横ナデを施すため、口頸部の境に稜線が巡る。３は平底の壺の底部。４は高坏脚部の破片で、脚部の下部に未貫通の矢羽根透孔をもち、その下方に沈線状の凹線文を４条、脚端面に凹線文を１条施す。凹線文の凹部断面は、断面「U」字形で、裾部の凹線文に比べ、端部の方が幅が広い。

この他、SC-18上部のⅢ層部分から出土した遺物には、鉄滓の小片がある（Fig. 89-２）。また、東半部の貼り床部の下底面近くから、ウマの臼歯上顎の小片が出土している。詳細は、第Ⅳ章を参照されたい。

以上、住居廃絶後に流れ込んだ埋土出土の遺物と、住居構築時に施された貼り床の遺物を比較することで、SC-18の営まれた時期は古墳時代後期と考えることができる。

SC-21号竪穴式住居（Fig. 68・79・80、Pl. 4・5・20）

DC・DD-14・15区に位置し、SC-15に切られ、SC-16を切る隅丸長方形の竪穴式住居跡である（Fig. 68、Pl. 4・5）。南北幅は3.53mを測る。床面で出土して立柱痕跡を確認できたSP-187・189と、SC-15の床面で検出したSP-188を加えた４本柱構造を復元できる。柱穴のSP-187・188の柱間が３m、SP-187と周壁の間隔が0.85mであることから、東西長は4.7m前後と推定できる。

埋土は、SC-15と同じく、径２～５㎜の角礫が多く混じる暗褐色砂質土であるが、湿り気をおびると、やや灰色みが目立つ土色である。そのため、比較的容易にSC-15との切り合い関係を把握できた。また、SC-21の検出面と埋土中で、SX-70とした焼土と炭化物片の広がりを確認できた。他の遺物の出土状況も考慮すると、後述するようにSC-21の埋没途中で投棄されたものと考えられる。

柱穴のSP-187は、DC・DD-14に位置するSC-21北東隅の柱穴である。径44～46㎝、深さ６～７㎝の略円形の掘り形をもち、径18～20㎝の立柱痕跡を確認した。立柱痕跡にあたる①層は暗褐色シルト。掘り形埋土の最上部の②層は、暗褐色シルトに黄褐色砂質シルトが大量に混じる。下半部の③層は、逆に黄褐色砂質シルトの中に暗褐色シルトの小塊が混じり込む。

SP-188は、DD-14・15区の境界部にあり、SC-15の床面で確認できた。径32～33㎝、SC-15床面からの深さ７㎝を測る略円形の掘り形をもつ。径18㎝の立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡にあたる①層は暗褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は、暗褐色シルトにごくわずかの明黄褐色砂質シルトが混じる。

SP-189はSC-21南東隅の柱穴である。北半部分を攪乱で破壊されている。径28㎝前後、深さ６～７㎝を測る円形の掘り形の中で、推定径が18～20㎝の立柱痕跡を検出した。立柱痕跡にあたる①層は暗褐色シルト。掘り形埋土上部の②層は、黄褐色砂質シルトの中に暗褐色シルトの小塊が混じり込み、下半部の③層は軟らかな黄褐色砂質シルトである。

SC-21から出土した遺物は、すべて埋土中のものである。細片化した須恵器・土師器・弥生土器があり、

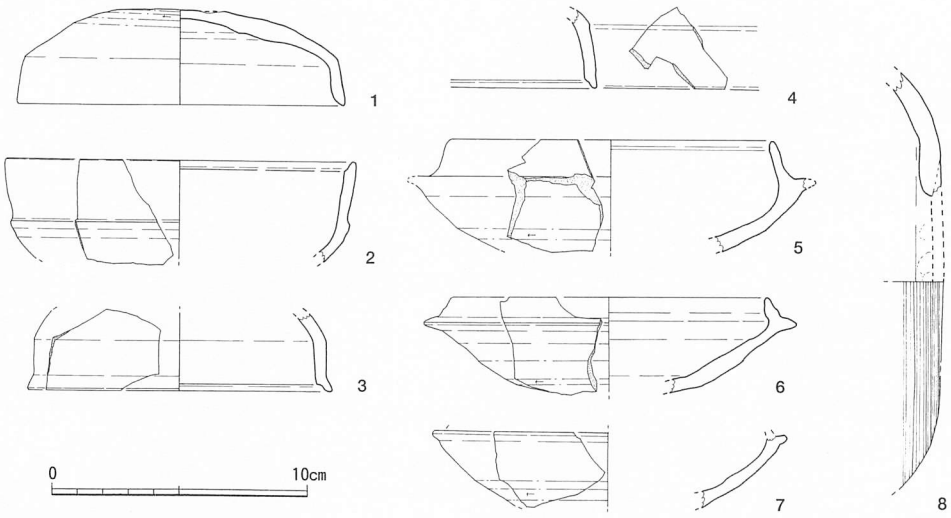


Fig. 79　SC-21埋土および上部Ⅲ層部分出土遺物実測図（1～3：埋土、4～9：上部Ⅲ層、縮尺1/3）

SC-21が廃絶され埋没過程で流入した遺物である（Fig. 79-1～3）。その中で、1（Pl. 20-④）は上部Ⅲ層部分の破片とともに、略完形に復元できた須恵器の坏蓋である。天井部が丸く膨らみ、口縁部はやや厚みがあるが、回転横ナデで尖り気味の口縁端部に仕上げる。2の高坏は、坏部中位に回転横ナデで段を設ける。口縁端部には回転横ナデで浅い段をもつ面ができている。3の蓋は床面直上から出土した。口径から短頸壺の蓋と考えた。口縁端部を回転横ナデで摘み出し、小さな段をもつ面がつくられる。この他、両端に擦痕が残る棒状の磨石（Fig. 80-1）や、弥生土器の胴部破片が少量出土している。

柱穴であるSP-188の立柱痕跡①層からは、弥生土器の胴部細片2点が出土している。

SC-21上部のⅢ層中からも、弥生土器や須恵器が出土している（Fig. 79-4～8）。須恵器を見ると、5～7の坏身は、埋土から出土した1の坏蓋に対応する。8は、胴部の成形後に径10cmほどの孔をあけて内面を調整し、さらに孔を塞ぐ。横瓶と考えた。この他、SC-37上部Ⅲ層から出土した破片と接合できた坏身がある。

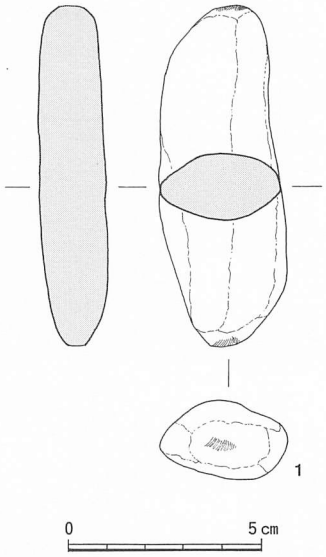


Fig. 80　SC-21埋土出土遺物実測図（縮尺1/2）

SC-21の埋土から出土した遺物は、廃絶後の埋没過程で流入したものである。上部Ⅲ層の遺物を含めて、古墳時代後期に比定できる。一方、古墳時代後期のSC-15に切られ、同じく後期のSC-16を切る。以上の出土遺物と遺構間の切り合い関係から、SC-21は、古墳時代後期の竪穴式住居跡と判断できる。

SC-22号竪穴式住居（Fig. 81～83、Pl. 20）

DB・DC-14・15区に位置する長方形の竪穴式住居跡である（Fig. 81）。SK-23・SP-254・461に切られる。当初、Ⅳ層上面では、既設管路の南側のSC-17西壁中央付近と、北側のSK-26・37との重複部分で、方形プランの隅を一部検出したが、SC-18・23との時間的先後関係や全体の平面プランを把握できないでいた。ところが、SC-18の西半部分（DC-14・15区）の掘り下げを行っている途中で、土層断面からSC-18と

は別の住居跡が切り合っていることを確認、SC-22とし、DB-14区のⅢ層上面、SC-23床面を精査した結果、DB-14・15区でようやく平面形を確認できた。そのため、西半部のDC-14・15区部分の周壁ラインは、既設管路部の壁面土層と、SC-18の西壁沿いに残存した隅部分、SC-17周壁を残すため設けたベルト部分で確認できた周壁の立ち上がり部分をつないで復元した。規模は長辺約4.3m、短辺3.3～3.4mと推定できる。

柱穴は床面では確認できず、SC-18の貼り床部分を掘り下げ中に、SP-507・586をようやく確認でき、4本柱構造を復元した。

埋土は小礫が混じる暗褐色砂質シルト。床面とSC-18埋土の境界には、黄褐色砂質シルトの薄いレンズ状ブロックが点々と挟まる。

SP-507は、長辺48cm、短辺42cm、SC-18の貼り床下底面からの深さ17cmの隅丸方形の掘り形をもつ。掘り形のほぼ中央で径16～17cmの立柱痕跡を確認できた。立柱は先端近くを残して折り取られている。折り取り後に流入した①層は、炭化物片が多く混じる黒褐色砂質シルト。立柱痕跡の②層は黒褐色シルトで、縞状に黄褐色シルトの薄いレンズ状ブロックが混じる。掘り形埋土の③層は、径2～4cmの黄褐色シルト塊が詰まり、その間に黒褐色砂質シルトが混じる。

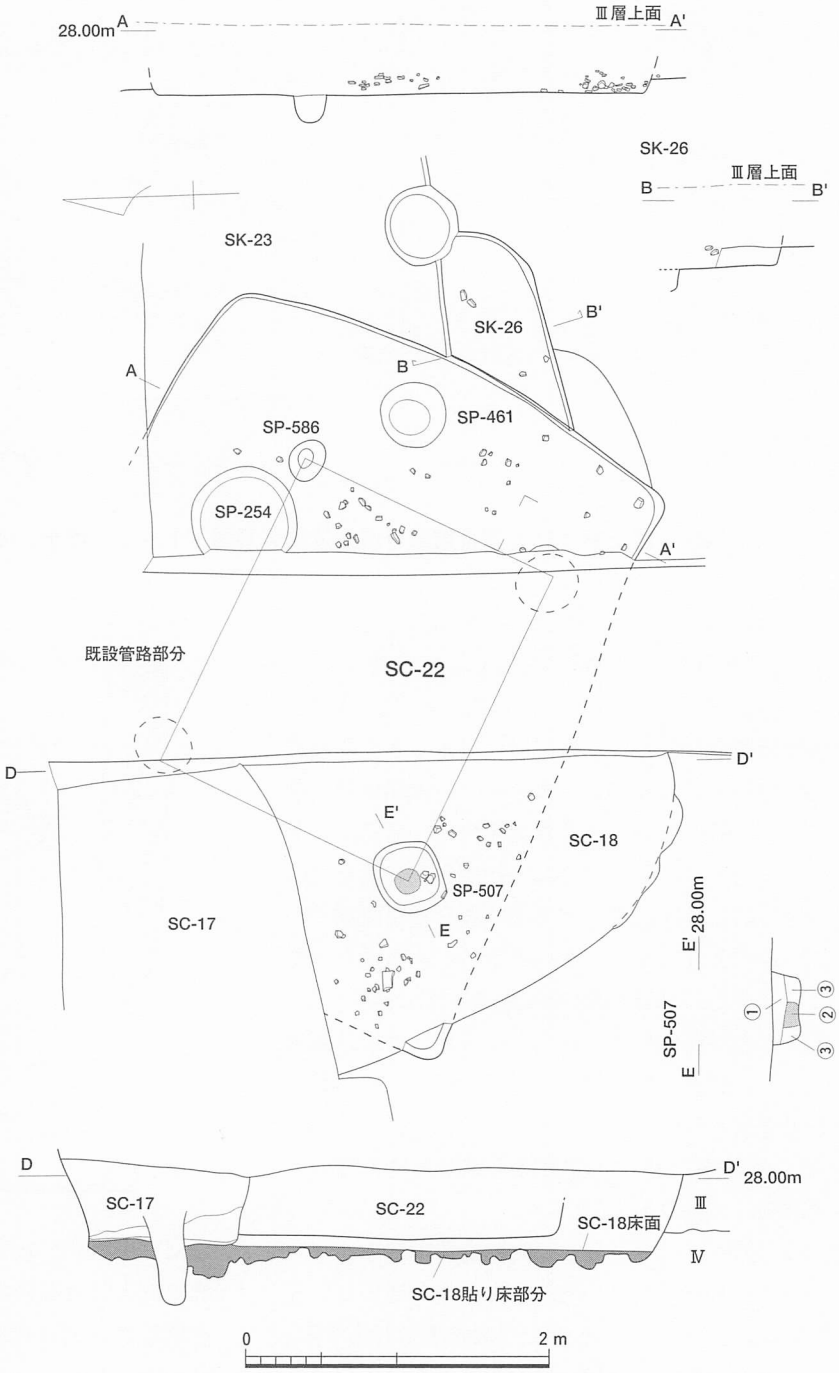


Fig. 81　SC-22、SK-26遺構実測図（縮尺1/50）

SP-586は、床面では確認できず、下層のSC-18の貼り床部分を掘り下げ中にようやく検出することができた。そのため、長径30cm、短径23cm、深さ18cmの不整な長円形の掘り形しか確認できていない。埋土は暗褐色シルトで、立柱痕跡は確認できなかった。

埋土出土の遺物は少なく、しかも遺構検出時に切り合い関係を把握することが遅れ、とくにDC-14・15区で混乱をきたしている。

その中で、確実にSC-22の埋土から出土した遺物を図示した（Fig. 82-1～3）。1は須恵器の坏身。口

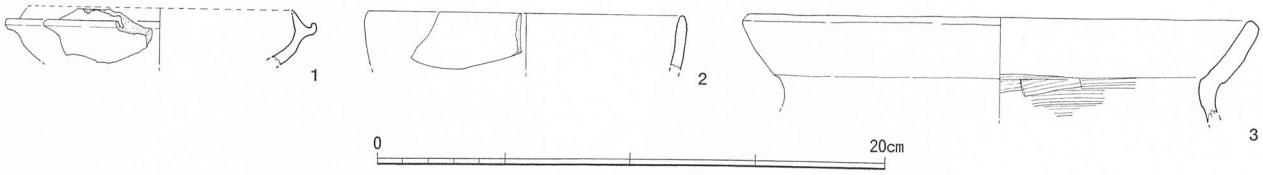


Fig. 82　SC-22埋土出土遺物実測図（縮尺1/3）

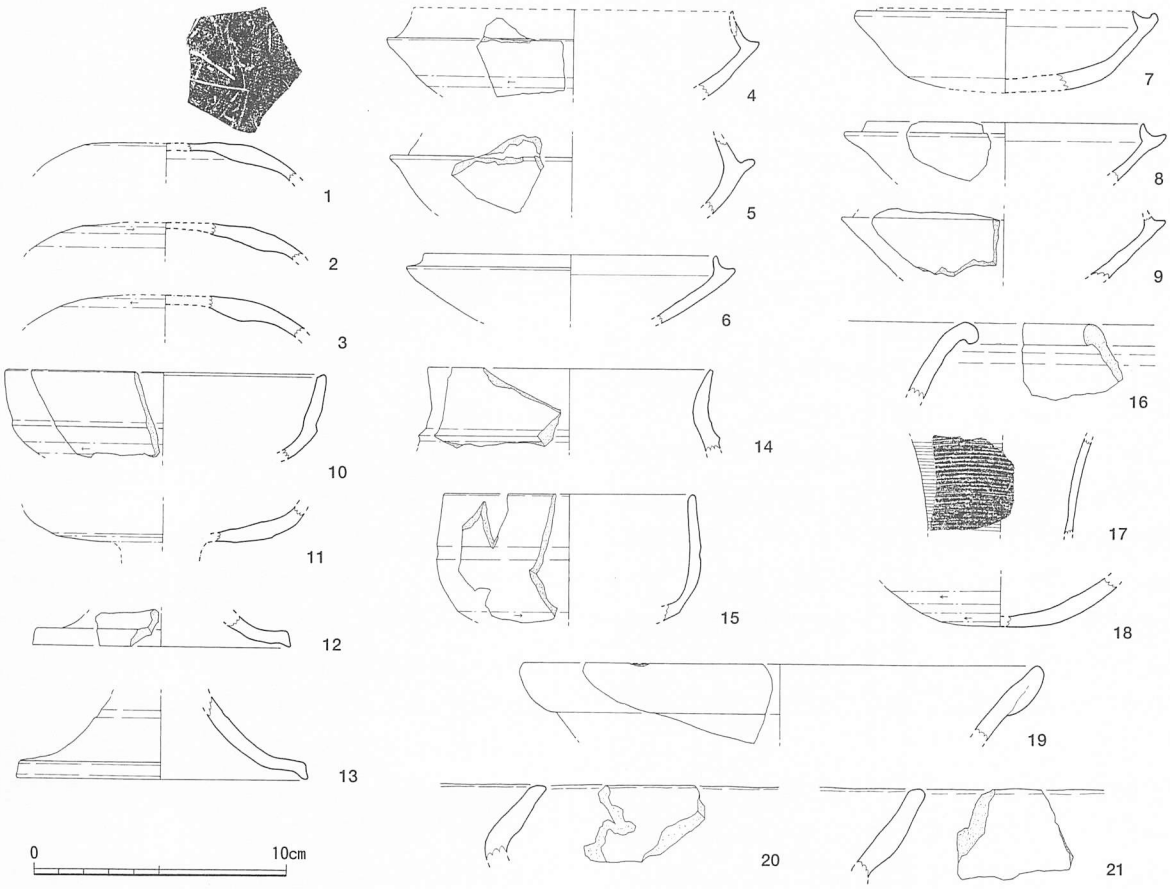


Fig. 83　SC-22上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）

径は小さく、口縁部の立ち上がりは短い。受け部の端部は横ナデで上方に折れ曲がる。2も須恵器で、提瓶・平瓶の口縁部とすると口径が大きすぎ、長頸壺の口縁部と考えるにも器壁が厚めで、鉢形の土器と考えた。3は土師器の甕の口縁部破片。「く」字形口縁の内面がわずかに湾曲する。この中で、1の須恵器坏身は、古墳時代後期に比定できる。

一方、SC-22上部のⅢ層からは、比較的多くの弥生土器・土師器・須恵器が出土している。しかし、いずれも細片～小片である。弥生土器が多いが、明らかに混入品と考えられるので、埋土と同じ古墳時代後期の遺物を選び図示した（Fig. 83-1～21）。1～3は須恵器の坏蓋の天井部破片。1の天井部外面にはヘラ記号が残されている。4～9は須恵器の坏身。口径が比較的大きく口縁部の長めの4・5、これと同じ大きさではあるが口縁部の立ち上がりが短い6・8・9、口径が比較的小さく口縁部の立ち上がりが内傾して短めの7がある。6は土師質の焼き上がり。10～13は須恵器の高坏。坏部の中位には浅い段が巡り、脚端部は回転横ナデで鳶口状に短く折り曲げられる。13の脚部下半には凹線が1条巡らされる。14・15は須恵器の埦。14（Pl. 20-⑤）は、口縁部下が一旦窄まり、緩やかに反転する口縁部につながる。口縁端部は回転横ナデで細く尖らせる。肩部には、回転横ナデで低い凸線を巡らせる。15（Pl. 20-⑥）は、碗形の胴部の中央に回転横ナデで凹線を1条巡らせる。16・19は須恵器の壺の

口頸部、17は甕の頸部、18は甕もしくは小型壺の底部の破片である。16は横ナデで、口縁端部を折り曲げる。19は口縁端部に粘土を貼り付け肥厚させている。灰褐色で、焼成不良。20・21は土師器の甕で、口縁部が「く」字形に屈曲し、口縁内面がわずかに内湾する。口縁端面は小さく面取りされる。

以上のⅢ層出土の遺物の中で、須恵器の坏および高坏（1～13）は、埋土出土の須恵器坏身と同じく、古墳時代後期のものである。しかし、須恵器の椀（14）や土師器の甕（20・21）は、古墳時代中期のものであり、混入品と判断した。

SC-22から出土した遺物は、量も少なく、弥生土器、古墳時代中期の須恵器や土師器の混入品もみられる。しかし、古墳時代後期のSC-18を切り、埋土出土遺物から考えて、SC-22は、古墳時代後期の竪穴式住居跡と考えることができる。

SC-25号竪穴式住居（Fig. 84～89、Pl. 5・6・20）

DA・DB-13・14区で出土した方形のSP-249・250・251・252で構成される4本柱構造の竪穴式住居跡である（Fig. 84、Pl. 5）。南北長5.06m、東西幅4.92mを測る。SC-27を切り、上部Ⅲ層の中位でSX-67が出土した。SX-67については後述する。

北壁中央部では、造り付けの竈を確認したが、残存状況が悪く、本来の竈の形態は不明である。

柱穴の中で、SP-252は、後世に攪乱され、掘り形のごく一部しか残っていない。SP-249・250・251では立柱痕跡を確認できた。柱間隔は、SP-249・250間が2.3m、SP-250・251間が2.34mを測る。また、SP-249・250では、柱が抜き取られ、柱の先端部分が底面に残っていたにすぎない。いずれの立柱痕跡とも、先端がやや尖り気味である。各柱穴は以下の通りである。

SP-249は、長径64cm、短径61cm、深さ51cmの南西側にやや広がった不整円形の掘り形をもち、掘り形底面で径19cmの立柱痕跡の先端部を確認できた。①～⑤層は立柱抜き取り後の流入土で、径1～2㎜の小礫が混じる。①層はにぶい黄褐色砂質土、②層は暗褐色砂質土である。③層は暗褐色砂質土で径1cmの明黄褐色シルトがレンズ状ブロックでみられる。④層は暗褐色砂質シルトで、径5cmの楕円形の明黄褐色シルト塊が混じる。⑤層は黄褐色シルトの塊。⑥層は立柱痕跡の先端部分にあたる。暗褐色シルトで、小礫はほとんどみられずきめが細かい。径5㎜の丸い明黄褐色シルト塊がみられる。⑦・⑧層は部分的に残存する掘り形埋土である。⑦層は暗褐色砂質土で、径2㎜の小礫が所々に混じる。明黄褐色シルトの薄いレンズ状ブロックがわずかにみられる。⑧層は暗褐色砂質土で、径1㎜の小礫がわずかに混じる。

SP-250は、径55～58cm、38cmの略円形の掘り形をもち、径16cmの立柱痕跡を掘り形上半部で確認した。立柱が抜き取られた後に流れ込んだ①層は、径2㎜の小礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質土。立柱痕跡にあたる②～④層は、径1～5㎜の小礫が混じる暗褐色砂質土で、先端部分の④層は小礫が少なく、オリーブ褐色砂質シルトが混じる。⑤～⑦層は掘り形埋土。⑤層は径1㎜の礫が所々に混じるにぶい黄褐色砂質土。⑥層は小礫が混じる暗褐色砂質土塊。⑦層は、径5㎜の礫がわずかに混じる暗褐色砂質土が、オリーブ褐色砂質シルトと混じり合う。

SP-251は、長径46cm、短径39cmの不整な長円形の掘り形をもつ。掘り形中位で径18cmの立柱痕跡を検出した。①～③層は立柱抜き取り後に流れ込んだ土層である。①層は径2㎜の小礫が混じる暗褐色砂質土。②層は暗褐色砂質土で、幅1～5㎜の明黄褐色シルトのレンズ状ブロックがみられる。③層は径5㎜の礫が混じる暗褐色砂質土で、明黄褐色シルトの小塊が点々と含まれる。④・⑤層は立柱痕跡で、暗褐色砂質シルト。上半部の④層には径5㎜の小礫が少量混じり、下半部の⑤層には小礫がほとんどみられず、径1～2cmの丸い明黄褐色シルト塊が所々に含まれる。⑥・⑦層は掘り形埋土。⑥層は暗褐色砂質土で、径5㎜の小礫がわずかに混じる。⑦層は暗褐色砂質シルトで、径2～4cmの楕円形の明黄褐色シルト塊が点在する。

SP-252は、大半を攪乱で破壊され、部分的にしか残っていない。埋土上半は径1～3㎜の礫が混じる暗褐色砂質土。下半部は幅3～5cmの明黄褐色シルトのレンズ状ブロックがみられる褐色砂質シルトである。

南壁沿いで出土したSK-503は、長径118cm、短径63cm、深さ18cmの不整な楕円形の掘り込みで、土壙西半部の土層断面で直径14cmほどの木柱痕跡（①層）を確認できた。位置関係から考えて、SC-25の出入り口である可能性が高い。木柱痕跡は出入り口部分を構成する何らかの施設と考えられる。①層は木柱痕跡で、径